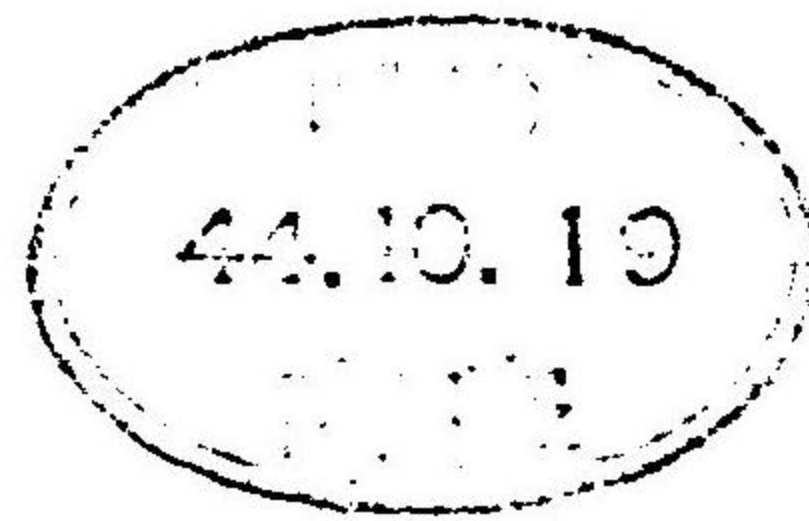


324-267

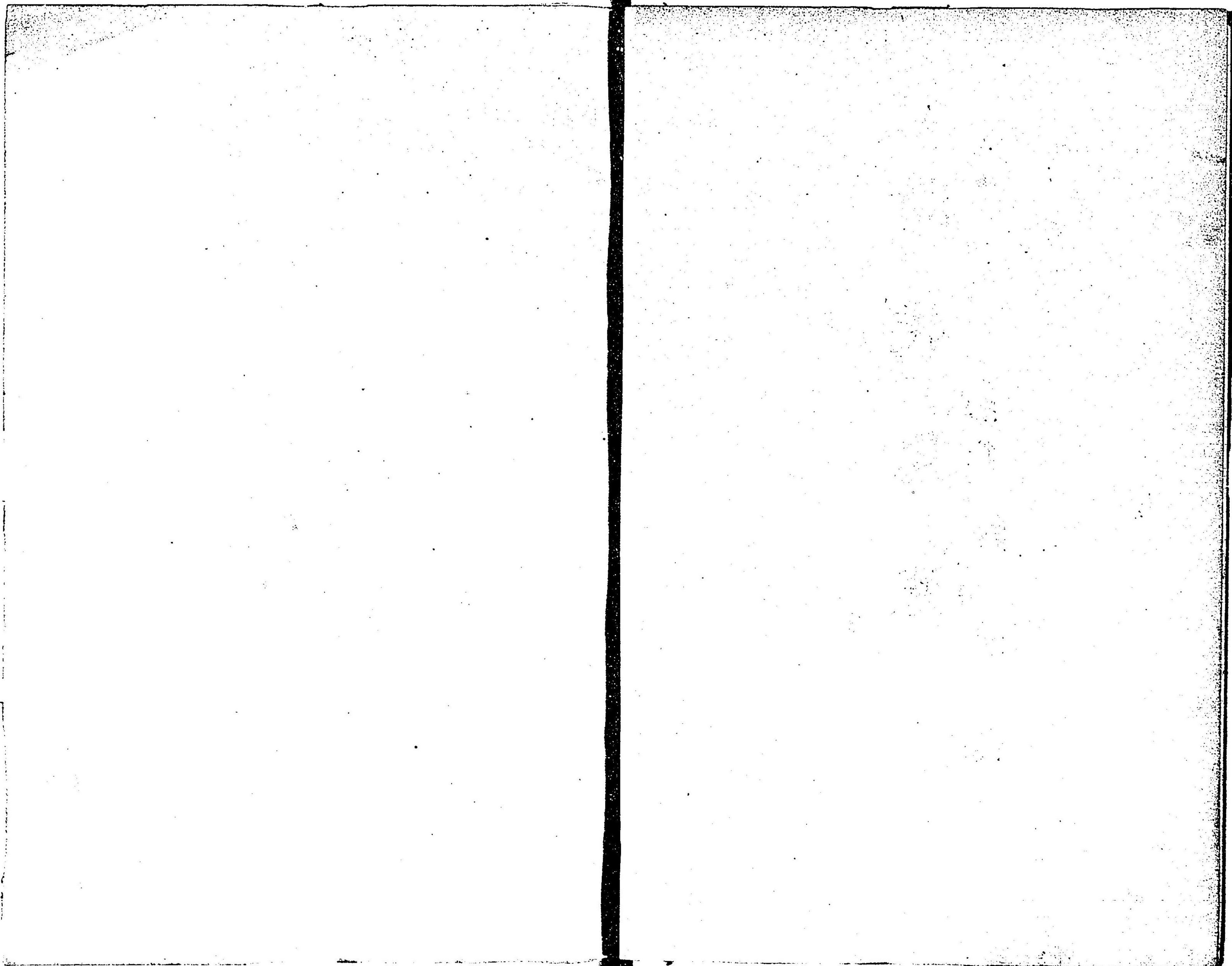


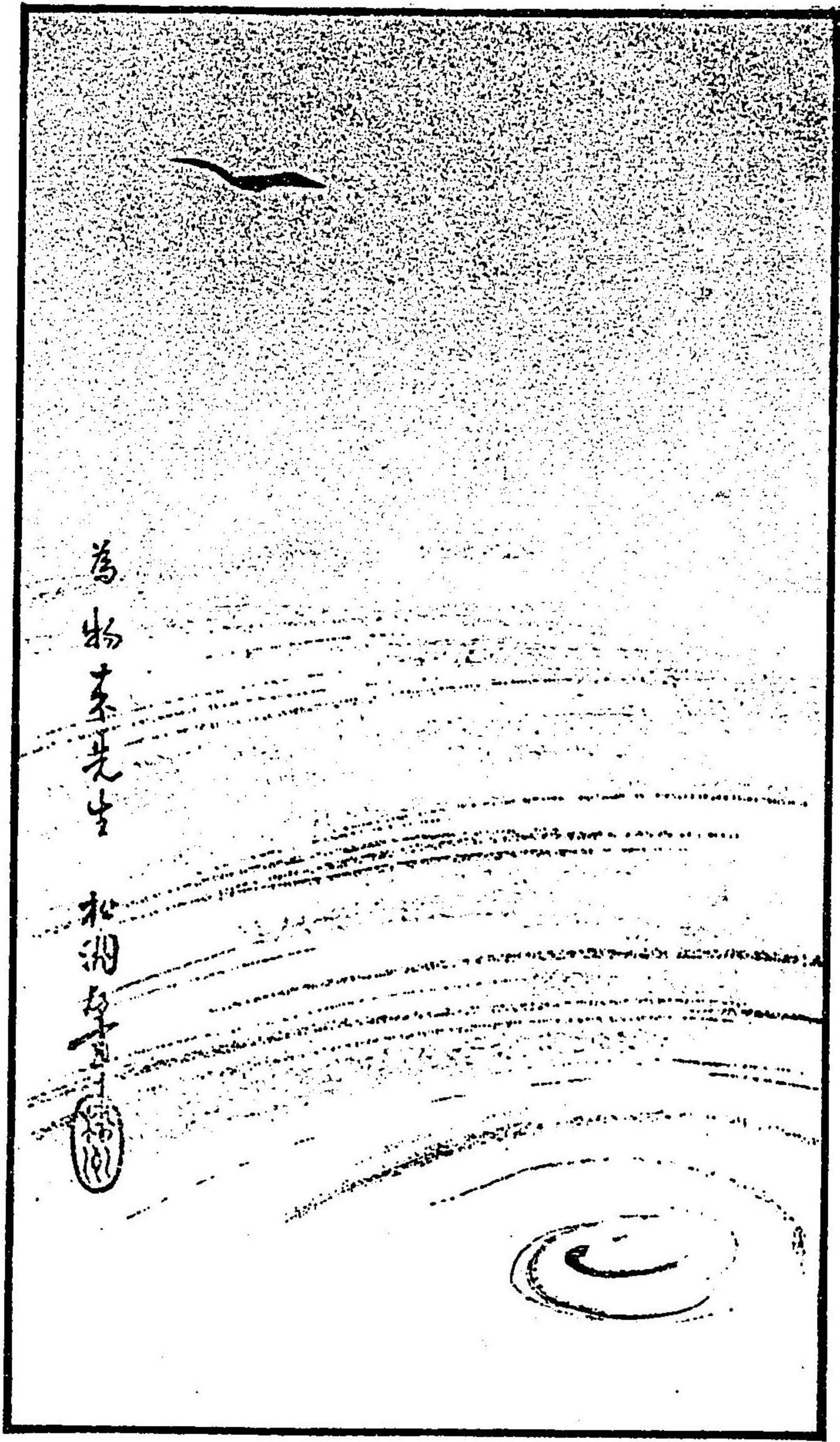
時代思想

附錄 冥想錄



Handwritten notes or markings on the right page, including some illegible characters and symbols.





為物茶先生

松洲



對畫述懷

天高く、氣清く、馬肥へ、人活く、當に是れ靜動の機訣を説くべき秋
にあらずや。顧みれば予も亦老ひぬ、而かも曾て洛陽に拔俗の工
夫を凝し、更に米國に地上の天國を觀じ、今や虛明圓瑩の間に乾
坤を映せしめ、凜然の中に温然を和せしめ、未だ大妙に至らざる
も、猶且つ八面玲瓏の佛を得來るもの、亦た年華の積功たらずん
ばあらず、古人曰く、鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍ると、蓋し亦た予
の悟懷を述ぶるもの歟。

辛亥仲秋

著者物來識

凡例

本書は主として予が近來の宗教思想なり而して其思想の傾向は確かに世界に於ける現代の思潮に合する所あるを信ず是れ本書を名けて「時代思想」となせし所以なり。

宗派の垣牆を繞らし自ら其區域を狭くして互に相争ふ世の宗教家は其の佛教徒たると基督教徒たるとを問はず、本書を見て或は歎ばざるべし。然れども切に人生問題を攻究し、眞に宗教問題に興味を抱き、又從來の歴史的諸宗教に満足せずして、何れにか靈光を求めつゝある人士は必らず其所説に首肯する所あらん、而して本書の希望は實に是等人士の要望に應せんと欲するにあり。

本書中青年の修養に關するもの數篇あり。是亦予が宗教的信仰の立場より觀じて今日の青年を論じたるものにして、其言ふ所に宗教の二字なしと雖も、然れども其精神と感想は全然宗教的にして、則ち宗教的時代思想より觀たる予が青年修養論なり。

凡例

附録「瞑想録」は、予が明治四十三年の劈頭、豆州修善寺にありて、靈的覺醒を得たる時より今に至るまでの感想を、日誌「無絃琴」中より轉載したるものなり。
本書の編纂には友人葛岡龍吉君の援助を得、又表裝の意匠と卷頭及附録の挿畫とは齋藤松洲畫伯の手を煩はす。記して茲に深く兩氏に感謝の意を表す。

明治四十四年九月

著者識

時代思想

目次

時代思想の變遷……………	一
雄大なる思想……………	三
無宗教の日本……………	三
東西の宗教思想……………	三〇
國民の特長と宗教の發展……………	三六
予が宗教思想の變遷……………	四四
基督は基督教に必要なりや……………	五〇
我は何教の信者なる乎……………	五七
予が宗教觀……………	七一

目次

理想的宗教生活……………七九

信仰の修養……………八六

動と静……………九五

進化と退化……………一〇三

刻々主義……………一二一

隠れたる生涯……………一二七

最高の生活……………一三〇

活宗教の特色……………一三八

コムトの人類教を評す……………一三四

大宗教家の資格……………一四二

偉人の心……………一四七

人生の好伴侶……………一五三

誤解の修養……………一六二

模範青年……………一六九

青年自修論……………一八五

青年と刀劔……………一九五

婦人の特性と其事業……………二〇二

予が宗教的抱負……………二〇九

予が未來觀……………二二五

附 録

瞑想錄……………二二五

時代思想目次

時代思想

村井知至著

時代思想の變遷

時代思想とは一時代を掩ひて民心の歸趨を統御する最大勢力を發揮したる思想にして其要件として(一)時代の重なる思想(二)時代に流行する思想(三)時代の人に崇拜せらるゝ思想(四)時代を支配する思想即ち *The Spirit of the age* 又は *The Ruling idea of the age* ならざる可らず然も斯く優勢なる時代思想も亦榮枯の理に洩れずして衰運漸く至り他の思想の代りて全盛を極むる時期到來することあり之を時代思想の變遷と稱し社會の進歩に連れ又國民の發展に伴ひて推移して已まざるものである之れを近く我國の歴史に徴するに時代思想の變遷輾々として盛衰地を交ふるもの其跡炳乎として火を觀るが如し蓋し事物の變遷は其生長を意味し其進化を意味し其向上發展を意味するものあつて存するが故に時代思想の變遷も社會

の進歩、國民の發展に伴ふて生長し、向上發展し行くことは、理の免かれざる所であつて吾人は此間に神の攝理の存すること及び神が冥々の裡に社會を指導し、國民を教育し玉ふ所以を確認し得て餘りあることと思ふ。

吾人は茲に時代思想の變遷を叙するに先だち、時代思想は如何なる徑路によりて發生し來るものなるか、其起原を釋ね置くの要ありと思ふ。時代思想果して如何なる徑路によつて發生するかと云ふに、之れは時代の趨勢に倚ることにして、假如へば戰國の時代に於ては、尙武の氣尙一世を風靡し、軍人崇拜の思想一代を覆ふの概あるが如く、時勢の然らしむる所にして、所謂英雄其間に處して風雲を捲くの快舉を企つるのである、而して吾人は此茫漠たる人心の傾向を察し、其内に浮游する思想の歸嚮する處を視て先覺して之れが啓發に任ずる者を達人と云ふ、然れども時代思想は決して達人を俟つて而して後に出づるにあらず、却て達人こそ時代思想の産出する英華たれ、之れを要するに時代思想の起原は時勢にあるのであるが、時勢が時代思想を産出する動機は、一揆に出でずして、却て反對なる二様の影響によることを見る、即ち一は時勢の反響によりて、之れに適應せんがために起るものと、

他は時勢に反抗せんが爲めに起る時勢の反動によるのである。

さて、之れを我國の史蹟に徴して、其時代思想の變遷を研究し其興亡の跡を究むることは、最も興味深き事なれば予は左に我國に於ける過去の時代思想の變遷を叙し、現在の時代思想を説き、又將來の時代思想を豫想し、且卑見を開陳し様と思ふ。

(一)腕力崇拜時代 中古以前の事は暫く措て茲に問はず、足利氏の政令漸く弛廢して、應仁以來天下麻の如くに紊れ、群雄四方に割據して、各覇を稱し、中原の鹿を争ふに際し、當時の時代思想は那邊に傾いたかと云ふに、云ふ迄もなく武力に傾いたので、凡そ當世に志を得んとするものは皆劍術、鎗術、馬術、弓術、砲術、軍學等武藝の習練に日も足らざりし有様であつた、而して一度び武藝に熟達し得た者は、其武力によつて幸福なる生涯の前途を開拓し得たる者比々然る勢なりしかば、田圃の牧童、巷間の走卒に至る迄、争ふて茲に榮達の途を覓むるに至り、サシモ堅固なりし門閥の墻壁も一時は爲に破壊し了せらるゝに至り、腕力萬能の盛時を現すに至つた、此風雲に乗じて木下藤吉は豊太閤となり、加藤虎之助は鬼上官となり、柴田權守勝家、佐久間玄馬盛政の名を聞くに恐ろしげなる、其他山中鹿之助、薄田隼人、本多平八郎

等、勇名今尙吾人の耳朶に轟き、欣慕措く能はずとなす者、皆當代の代表的偉人にして腕力崇拜の權化であつた、而して之れ單に我國に於てのみ然るにあらずして世界萬國の歴史は發現の時機に早晩の相違こそあれ、皆腕力崇拜時代のあらざりしはなく、又一様に此時代を以て最も光彩ある時代とせざるはなく、所謂英雄豪傑其間に崛起して錦上花を添ふるの偉觀を呈したのである。

(三)忠義崇拜時代 徳川氏一度天下を平定し、征夷大將軍の威令四海を風靡するに迫んで論功行賞の結果は封建の基礎を確ふし、家光台閣に臨んで諸侯に臣従の誓を強ゆるや、風雲見登龍の門最早武力を以てするの餘地なきに至り、忠君の大義盛んに高調せられ、仁義禮智忠信孝悌の倫常大に奨励せられて時代思想は茲に一轉化を呈し、儒者は其傳導師として官衙の保護に衣食し、忠臣義僕節婦孝子は常に頌徳及褒賞の光榮を荷ひて一代の羨望を購ふに至り、所謂水行かばみづくかばね、山行かば苦むす屍の、古歌の心をあらはし、身を忘れ、家を忘れ、富貴利達を忘れ、一念唯君主の爲めに竭すの心事が一世の理想となつて、茲に忠義崇拜の時代を現出するに至つた、彼の殿中に頭巾と帶杖を許されたる大久保彦左衛門、巡察廻國に種々の

逸話を遺したる水戸光圀、泉岳寺の墓前に香華を絶たざる赤穂浪士、大石良雄の一輩、伊賀越の警討に譽を上げたる荒木又右衛門の如き、實に當代の偉人にして、其鐵石の如き忠義心は永く口碑に残る所である、斯くて吾人が所謂大和魂の精華は此時代に燦爛の美を顯揚したのであつた。

(三)獨立崇拜時代 王政維新は我國開關以來の大變革にして、サシモ徳川氏三百年の經營になりたる牢乎たる封建制度の基礎も、其根底より轉覆せられ、代ふるに萬世一系の天皇を奉體して、四海の政令を一途にし、且四民の權利を平等にして、以て稟賦の性を開發し、天與の幸福を自由に享樂せしむることとなり、茲に人民始て自尊獨立の思想に達着するに至つた、之れ即ち明治昭代の初期に於て國民が其心に覺醒せられたる思想にして、所謂文明の曙光の國民生活の上に光被し初めたるものであつた、元より此思想は其以前に在つて小數なる蘭學者の腦裏に萌芽し、彼の浦賀の砲聲に曉夢を破られたる人士の間に生長し來りしものにして、我洋學界の先覺者たる福澤先生の如きは此點に於て、卓越したる勳功を奏せられたのである、先生が教育の大主張は實に自尊獨立にあつて、其筆、其口の記述する所、皆此主義の

鼓吹ならざるはなかつた、同時に政治界に於て盛んに此の主張を宣傳したるものは彼の板垣伯爵であつた。回顧すれば明治八九年の頃予が尙中學生時代のことであつたが、當時民権自由と云ふ語は一種非常なる愛着力を吾人の上に有し、其の叫びは慥かに野に呼べる人の聲の如く招かざるに天下の耳目を集めたのであつた。斯く一方には國民として民権自由に憧憬し、一方には個人として自尊獨立を自覺したる人民は單に積極的に自由民権を崇拜し、自尊獨立を尊重したるのみならず、其熱情の迸る所消極的に專横なる官權を敵視し、官吏を卑視するに至り、茲に官民の衝突を生じ、所謂有志者は對官の利器として盛んに新聞を發行し、演說會を公開し、孜孜として此思想の普及を計つた次第であつた、而して此時代に於て青年者たる吾人の腦裏に(恐らく當時の一般民心に偉大なる人物として深き印象を與へたる代表的人物は前記の福澤、板垣兩氏の外、福地源一郎、沼間守一、馬場辰猪、末廣重恭、成島柳北等の人士であつた、予等は此等人士の感化により、或は筆寫の新聞を發行して生嚙りの大議論を回讀し、或は教場に演說會を開いて罪なき校長攻撃をなし、或は棍棒を振つて街頭に野犬を撲殺して得々として快哉を叫び、或は此時代思

想の祖述者としてミル、スベンサー、ベンザム等を崇拜して已まざる等當時を追想すれば民権、自由、權利、獨立等は恰んど魔力を以て民心を牽引した觀があつた。

四愛國崇拜時代 明治十七八年の頃は外交政策の關係上政府が西洋模倣を獎勵した結果、一方に於ては内外の交親大に進捗し彼我の了解に好結果を收め得たるものありしが、又一方より云へば恰んど西洋心酔に陥りたる譏を免れざりし、而して其反動として二十年頃より「日本主義」は唱道せられ、内には國粹の保存となり、外には對外硬の主張となり、大に國民的自覺を喚起するに迫んで、陸海軍の擴張は官民の均しく急務とする所となつた、時恰も日清端を開くに際し、國家的觀念は更に民心に旺盛し、舉國一致、愛國奉公の語口々に唱へられて、有爲の青年は争ふて陸海軍人に志し、身を軍國に奉するを以て、最大榮譽とし、愛國の熱誠一代を掩して青年の理想又他あらざるの觀を呈した、當時早稻田中學校に於て倫理問題として教師が學生の理想を徹した事があつたが、其の答案には軍人希望が最大多數を占めて居つたと云ふ事である。以て其時代思想を察するに餘りありと思ふ、現今吾人が慶賀の熱情を表明する爲めに用ゆる「萬歳」の歡聲は最新の意義を以て當時凱旋の將

士を迎えて絶叫した祝聲であつたが、爾來其流行波及の急速にして廣汎なりし事は、一に時代思想の反響に歸するのである。次で日露戦役の端を開くに至つて此思想の熾烈正に燒點に達したので、當時愛國の精神は實に國民の生命であつたと謂つても敢て過言でないのである。而して東郷乃木の兩大將の如きは、愛國的將軍の典型として正に時代の崇拜を贏ち得た偉人である。

(五) 成功崇拜時代 日清日露の二大戦役に連戦連捷の奇功を奏し、武威を八肱に輝したる我國運の、特に日露戦役後一大發展を遂げたるに就ては、國力充實の希望上下に瀾漫し、企業熱頓に旺盛を極め、百般の新事業は陸續として興り、工場會社の設立日を以て夜に繼ぐの盛況を呈し、従つて事業の成功は一代の理想となり、苟も事に成功せば其業の何たるに係はらず、手段の何たるを問はず、將た又心事の善惡を究めずして恰も戦場の勝利者を以て目し、其成功を謳歌して倍々聲譽を尊からしめ、官府亦與ふるに榮爵を以てして光榮身に餘らしむる者あれども、之れに反して一度び事業界に失敗するや社會は冷罵嘲笑を浴びせて身の置き所なきに至らしむ、安田善次郎、村井吉兵衛、古河市兵衛諸氏皆之れ此の時代の代表的人物にして、成

功崇拜者の福の神たり、斯くて成功は當時の代表的思想となり、成功を標榜する言論は盛んに歡迎せられ、成功に關する雜誌著書は春草の萌え出づるが如き勢を以て發生した、實業の日本「成功」冒險世界等此機運に乗じて産れ出で又健全なる成育を遂げたのである。

(六) 修養崇拜時代 成功主義の謳歌せらるゝ時代は應て拜金主義流行の時代にして、風俗漸く華奢に流れ、其反響として淫猥なる自然主義や、輕薄なる虛榮心の跋扈を齎らし、其反動として亂暴なる社會主義者を輩出するものであつて、心ある者は密かに此時期の到來を危み未然に之れが救濟の策を講じて居つたのである。斯くて人格修養問題漸く世間の耳目を惹くに至り、修養崇拜の時節到來して今日では一も修養二も修養、苟も文字を解する者にして品性、人格修養等の語を口にせざるはなく、修養論、修養篇、修養漫語、人格養成、常識修養等、修養を冠せる書籍の刊行屈指に暇なく、終に日誌にさへ修養日誌を見るに至り、假如ひ其調子の何となく上調子なるものあるにせよ、修養の必要今日の如く高調せられたる時代は過去に於てないのである、吾人の知る所を以て云ふも恰んと修養問題に容喙する權利さへなき、

下劣なる人格の輩迄が自から計らずして修養を云爲し、却て以て糊口の料に供して居るものあるに至つては、實に言語同断の次第であつて、之れや所謂時代思想の獅子身中の虫とも稱すべき輩である、目下儒道復興して經書の翻刻流行するに至つたのも、此時代思想の反響にして、彼の新渡戸博士の如きは此時代思想の宣傳者として、一方の大立物たることを失はぬのである。

(七) 將來の時代思想 吾人は今や我國に於て修養時代少くも修養の必要を高調せらるゝ時代に遭遇して國民道德の發展の上に大満足の意を表するものであるが、扱今後の社會は今日の人格修養を以て十全の理想として安んずべきものであるか、吾人も亦今日尙個人に對しても、國家に對しても、建徳の用意に一層熱誠ならんことを冀望して已まざるものなれども、更に進んで一段の進境に達せんことは、一層切に冀望して已まざる所である、而して其來るべき時代思想は果して如何なるものなるか、又斯る思想は今日尙其曙光だも吾人の上に放たざるか、之れを究むることは最も興味深き事と思ふ。

吾人の觀察によれば、最も近き將來に於て、我國民の逢着すべき、又逢着せざるを得ざる思想は、「ヒューマニチー」即ち総合的人類觀にして、彼のマヂニーが宣傳したる超個人、超國家の雄大なる大思想である、我日本人は既に自己の觀念を自覺し、國家の觀念を自覺し、又人類の觀念を自覺し得たる如くなれども、未だ此「ヒューマニチー」の觀念を自覺し得たる者にあらざるなり、而して是は獨り我國民のみならず、最も文明開化したりと稱せらるゝ歐米諸國に於ても尙此大觀念を自得したる國民は少いのである、故に今政治的に世界の形勢を觀る時は所謂列強羈を稱して、乍左封建時代の群雄割據の狀を現出し、弱肉強食の非人道的政策が、巧妙なる外交と稱せらるゝ、虚偽なる儀禮の背後にひそみて、稍もすれば爪牙を露出して居るので、彼の帝國主義が各國民の理想となれるに徴しても、「ヒューマニチー」の理想は、遠く吾人の握手の外にあることを察するに餘あるのである、然りといへども將來世界人類の間に此神聖なる「ヒューマニチー」の存在が認識せられ、又自覺せらるゝに至るべきことは、人類進歩の途上に於て終に遭遇すべき必然の出來事にして、數の免かるべからざる所である、而して此思想は單に理想として自覺せらるゝのみならず、既に現實されて組織的大團體となり、世界の國民を打つて一團となし、一大共和國

の政下に泰平を謳歌するものとなつて現はるゝであらうと信ず、ダンテの「インビリアム」、基督の「神の國は共に此理想界を指したのである、然れども讀者幸に誤る勿れ、予の所謂世界的大共和國は國家の存立を破壊するものにあらず、否之れを破壊せざるのみならず、却て其存立の基礎を牢固にすること尙國家成立して個人の存在に危害を加へざるのみならず、國運の發展に伴ふて個人の福祉も増進するが如くなるものにて、畢竟個人相集つて家族を爲し、家族相集つて國家を作り、國家相集つて「ヒューマニチー」を現出するのである、唯其發現によつて各國民は國家的觀念以外に人類として共通の大責任即ち愛の大法の實行の責任ある所以を衷心より會得し、今日の如き割據的自利他排の狹隘なる思想の排斥を強ひられ、人類一般の公益を思念するに至るのである、此思想や實に理想的思想にして、斯る思想の實現せらるゝ時代は理想の時代即ち黄金時代と稱すべき時代である、而して此時代に於て崇拜せらるゝ思想は何ぞと云へば奉公の精神にして、即ち人類に奉仕する精神である、従つて最も多くの人の爲めに盡くす人は、是れ來らんとする理想時代の偉人にして、又尤も多く世界の爲めに貢獻する所ある國民は、此時代に於ける最大

國民である、基督曰く、

異邦の領主は其民を主どり、大なる者は彼等の上に權を採る、是れ爾曹の知る所なり、然れど爾曹の中にては然すべからず、汝等の内大ならんと欲する者は、爾曹に役はるゝ者となるべし、又爾曹の中首たらんと思ふ者は、爾曹の僕となるべし、此の如く人の子の來るも人を役ふ爲にあらず、反て人に使はれ又多くの人に代りて生命を與えんがためなり
と予は基督に於て「ヒューマニチー」の權化を見るのである。

雄大なる思想

英米の大學に於ては、學生が最後の學年を迎えて、愈々卒業と云ふことになる、其一年は殆んど教場に出席せず、講義をも聴かずして、只管卒業論文の起稿に従ふのである、而して其題目は各生其専門の科目に應じて撰むので、法科生は法學問題を撰び、文科生は文學問題を撰む等自然の結果なるが、曾て米國の一大學生が恰も此卒業期となりて、論文起草するに際し、如何にしても適當なる題目を得能はざり

しかば、終に思考に餘りて「宇宙」と題する事にした處が之れを見た同窓生等は何れも皆其題目の餘りに廣大なるに吃驚して其論旨を叩いた所其學生の疏辨に曰く「予が此題目を撰びしは、凡そ森羅萬象の事物は皆此語中の現象ならざるはなければ、論じて此れ以外に逸する者なく、説いて此範圍に洩るゝ者なき便利を有すればなり」と、聽者啞然として終に大笑したとの事である。

予が茲に題して「雄大なる思想」とせる者、亦頗る廣大なる内容を示し、漠として其結論を豫想し難きものあるより、讀者の中には或は「宇宙」に類する滑稽の意義を有するものにあらずやと疑はるゝ者あらんが、決して然らず此懐廣き題目の陰に隠れて、何でも云はれる便利の下に無意義の漫語を弄せんとする如きは、予の爲し能はざる所にして、近時深く感ずる所ありて、特に此題目を撰んだのである。

試に我思想界の状態を觀察せよ、果して其所に何等の思想か民心を啓發し、又指導して之れを向上發展せしめて居るものがあるか、暫らく一代を統率するに足る大思想の事は措て問はずとするも、茲に雄健なる思想ありて吾人の惰氣を鞭打して居るものあるか、茲に深遠なる思想あつて吾人の思索を清冽ならしめて居るもの

があるか、思ふて茲に到れば我思想界は實に寂莫の感に打たれざるを得ぬのである、讀者若し之を疑はば、近年の我出版界の產出物に徴せば、必らず思ひ半に過ぎるを知るものあらん、蓋し書籍は思想の發現にして時代の影たるなり、而して吾人は日々の新聞に新刊廣告の掲載せられざるなく、時としては同一日に幾十の廣告を見るにも拘らず、其多數は「ラビッシュ」に屬して一讀にも値せず、然らざるものも一時的の存在にして、永遠不朽の生命を有する大作に至つては絶無なりと稱せらるるは抑何の兆候なるか、予嘗て校堂に於て學生に質問を發して「君等が近時最も愛讀したる書籍は何なりしや、又夫等の書籍の内に生涯の伴侶として座右を離し難く、假ひ水難火災の如き危害の急場の際することありとも、何はきて置くも生命と共に救はざるべからずとする者ありしや」と云へるに對して、一人も之れありと答へたものはなかつた、恐らくは之れ學生の寡聞短見のみに因るのではなからう、吾人を以てしても實際ないのである、斯て唯健全なる思想、有益なる思想に於ても貧弱斯くのごとし、况んや萬世に亙つて人類の崇尊に値する雄大なる思想に於てもや、其絶無なる元より恠むに足らず、之れを今日に求むるこそ却て木に縁つて魚を

求むる愚者の業なれ、吾人は最早現はれて又直に消ゆる霧の如き果無き著書出版に厭きたり、今後は少なくとも冥想合味に値するの新著の刊行を望まざるを得ざるなり、而して斯く其内容の貧弱なるにも拘らず、近年發行の書籍は徒らに表題のみ立派にして、或は宇宙的滑稽なるもの、或は羊頭を掲げて拘肉を賣る者など、所謂虛假威の甚しき者あり、就中原書思想を剽窃し僅に項目の添削、章節の轉倒によりて讀者の眼を昏まし、西洋書籍を自己の著作とし、恬然として耻ぢざる者あるに至つては、所謂盜竊學者の行爲にして、我出版界は故買犯の責を免れざる者あらん、茲に至りては書籍は最早世道人心に貢獻する所あらざるのみならず、其風教を誤るの罪大なりと云はざるべからざるものあり。

一兩年前の事であるが當時予は書肆に就て世間好評の書籍を質した事があつた、書肆の語る所によれば當時の新刊なりし芳賀矢一博士の「月雪花」及浮田博士の「人格と品位」等は最好評に屬する者なりき、而して予は兩者とも購ふて閲讀したが、前者に對しては予は何等の思想をも得ず、只著者が此自然の三大美觀に對して古人が吟詠したる詩歌の粹を蒐め、快く之れを排列し、美はしく現代的に解釋したるもの

に過ぎざる、至極瀟洒たる者なることを認め得た計りであつた、後者に至つては無遠慮に云へば恰んど失望したのである、浮田博士は當代の名士である、其論説は一種の風骨を帯びて、趣味津津たる者があるのであるが、何事ぞ、人格と品位に於ては其跡が見えぬのである、且論題の大多數は氏の舊稿に屬し、嘗て諸雜誌に掲載せられたるものらしく、是非訂正あらまほしき點なども其儘記載せられたるものあり、校正も杜撰にして、何の方面より見ても貢獻の熱誠の籠れる著作とは承認し難き點が現はれて居つた、而して此等が尙世間の好評を贏ち得て、良書の稱を博したるものとすれば他は推して知るべく、我思想界の萎微不振の狀態するに餘りあるのである。

秋風落莫たる此出版界に在つて、單り異彩を放ち燦然として人目を惹きしものは、各種の辭彙の出版であつた、彼の日本大辭典、法律大辭典、醫學大辭典等何れも有益ならざるはなく、其他見るべきもの少からざりき、當時予は日本類語大辭典を繙き其開卷の第一頁に「あゝに十六様の異なる意義を列記せられたるを見て、其博引精通に驚いたのである、然も由來辭彙流行は思想界の不振を表明するものにして、文

字言語の末に奔る時代は大思想や大理想の忘れられたる時代である。果して然らば何故に我思想界は斯くも寂莫を極めて居るかと云ふに、之れには種種の原因がある、其第一は近時學問の傾向が甚だしく専門的になつて來た事で、之れは我邦のみならず世界一般の傾向にして、科學の進歩より云へば今後此傾向は倍々盛んとなり、専門又専門を生じ、研究愈々分析的となり、特に精神修養に勤むるものにあらざる限り、哲學的思想は萎縮して終に雄大なる思想を滅亡せしむるに至るは理の當然である、而して我邦の現状漸く茲に至つて居るのである。

第二は教育制度の結果にして、現時の教育が餘りに機械的又形式的に陥り、凡ての學生を同一模型裡に形成しやうとして居る所より、自然に自由活達の思想の發達を阻碍し、有爲の氣象を殺滅したので、之に反して其昔教育機關の未だ具備せざりし私塾時代に於ては其不完全なる塾舎より高邁なる思想家を輩出したのは、其不羈の教育制度に由るのである、維新の前に於ては松下村塾あり、弘道館あり、維新後に於ては同志社、慶應義塾等あり、何れも名士を輩出して思想界に貢獻する所少々ならざりしが、官學隆盛の世となりし以來人物は正反對に輩出を止め、私塾に於て

も茅舎變じて高閣雲に入り、器具完備して制度の文部系統裡に屬するに迫んで、當年活躍の英氣銷沈して唯惰氣漫々たる平凡なる學校を現出するに至つた。

第三は物質文明の餘弊に基くので、國民利あるを知つて理あるを知らず、拜金の風潮澎湃として到り、思想的趣味轄として地を拂ふに至つた、某なるものあり、多年米國に遊び哲學博士の榮譽を荷ひて歸朝するや、人は適れ思想界の雄將として某を待ちしに、如何なる事情の爲にや職を本邦金融界の中樞たる銀行に奉ずるに至り、彼は俄然として其體度を變じ、年來蒐集の書冊を擧げて之れを古本屋の店頭に曝らして敢て顧みることなく、管て耽溺したる哲理の思索は駿履の如く棄て、緇銖の利を計る人となつたが、之は時弊の感化である、又友人某なるものあり、嘗て某富豪の賀筵に招かれて酒席に列したが、斯る筵席に興味を有せざる彼は絃歌大に起り舞姫袖を翳して舞ひ主客共に歡樂極まれりとせる際、獨り席を月光明かなる欄のあたりに避けてウオーズウオーズの詩集を低誦して居つた、主人遙かに此體を見て訝り傍に來り密語ひて云ふには、貴下は彼の愉快極まる歌舞の宴樂を外に見て讀書に耽らるゝが、そも書籍の内には宴樂にも優る愉快の存するものなるやと

而して之れが今日我國の上流に地位を占むる富豪の言なりと聞かば、何人が當代紳士の趣味の下劣なるに驚かざるものある、左は予が嘗て大森に寓居して居つた時朝夕見聞した事實である、同所より東京に通勤する人々の中には其容貌風采、服装等眞に間然する所なき紳士が多い、然るに一度び其談話を聞けば銅臭紛々として鼻を衝くものがあつた、而して此等の風潮が青年學生の間にも汎濫して、學問の目的一に糊口にあるもの、如く思惟せることは實に寒心に堪えざる次第である、予は外國語教授を以て立てるものなるが、今日の外國語研究者の態度を見るに、之れによつて思想を養成せんとするよりも、言語文章の末を習塾して處世の具となさんとするのである、之れを彼の變則英語時代の學生が發音、文典、會話、作文等の如きに意を留めずして、一意専念只智識を得るに汲々して思想の練磨に勤めたのに比して、其心事に雲泥の差ありと云ふも過言でない、予自らの經驗を以て云ふも予は漸く第三讀本を読み得た時既に文明史を繙き、或は論理學を讀み、ミルの宗教三論、プラトリーの「リパブリック」等を開し、意義に通曉する毎に其愉快禁じ難きものがあつたのである、然るに今日は幸か不幸か正則英語の時代となつて、流暢なる英語

を操り、正確なる英文を綴り得るもの其人に乏しからずと雖も、發音修辭の末に走りたる結果小説院本の讀者を増加したれども、思想的書籍を涉獵するものに至つては、眞に寥々たる小數者に過ぎるに至つては吾人爲めに一大恨事とせざるを得ぬのである。

事態斯くの如し左れば此思想的趣味は如何にして之を養成すべきか、又雄大なる思想は如何にして期待すべきか、之れ現下の重要問題である、而して予が視て以て有効なる方法なりと爲す所は

(一) 讀書 にして書籍を介して偉大なる思想に親炙することである、前年予は米國留學中マヂニーの書を読んだが、予は之れに由つて實に雄大なる觀念と、インスピレーションを得た、而して爾來反覆愛讀する毎に高尚偉大なる思想の予が胸奥より湧出するを覺ゆるので、終に予は此書籍を第二の聖書として尊敬し、書齋の寶典として秘藏して居るのである、併し予は此書籍が凡ての人に予と同様なる尊敬を受くるものと思はず、又予に及ぼしたる感化と同様の感化を凡ての人に及ぼすものとも思はず、要は唯此書籍が雄大なる思想を予に鼓吹したる如く、凡ての人々も

各自雄大なる思想を鼓吹する書籍を發見して、常に愛讀せられんことを希望するのである。内村鑑三氏のカライル崇拜は久しく傳えられたる所にして、氏が人格は茲に養成せられたのである。兎に角予は各人が其趣味理想に應じて日本なり、支那なり、歐米の諸國なり、昔なり、今なり、小説なり、傳記なり、哲學書なり、經書なり、何なりより自己の生命にも代へ難しとする、寶典を發見して以て冥想の資に供し、雄偉の思想を養成せんことを希望するのである。而して予が讀書を推奨するに際し就中凡ての人々に薦めんとする寶典あり、聖書乃ち是れなり。聖書は其存在過去に於て數千年を經、將來に於て不朽ならんとする坤輿第一の寶典である。其章句は聯珠の趣をなし、一度之れを繙くものは其雄大なる思想に厭せられざらんとするも得ない威力を發現して居るものである。天國は畑に藏れたる寶の如しと書いてあるが、總て此世界に藏れたる寶は皆此聖書の中にて發見し得らるゝのである。

(二)冥想 讀書に次で吾人をして思想的趣味を感得せしむるものは冥想である。所謂沈思默考である。藤田靈齋なる人は息心調和の修養と云ふものを高調せられて

居るが、吾人に冥想なくば他の思想は理解し得らるゝものでない。故に大思想は常に冥想の人を俟つて發現するのである。世界の最大思想を發現したる基督は其冥想によつて宇宙の心を理解し、人類の真相を觀破し、彼の如き大思想を世に遺したのである。カライルの語に、斯る森嚴なる宇宙にありながら跪坐冥想して畏敬の念を兆さざるものは偉人たるの資格なく、斯くの如き思念を生ぜざる國民は偉大なる國民たることを得ざるなりと。嗚呼雄大なる思想なるかな、吾人之れを思ふ毎に殆んど他界的の感に堪へぬのである。然れども之れ決して他界のものならずして、吾人の衷に生々活躍する靈能の神聖勇健なる發現である。而して吾人の生涯を崇高偉大ならしむる者は實に其威力に外ならぬのである。

無宗教の日本

予は今日の日本を無宗教の日本といふのである。然し是れは人種的性情の上より見て斯くいふのでない。曾て西洋人の間に斯る妄説をなした者があつたが、其人々

の見る所に依れば日本人は宗教心に乏しく、宗教には先天的に冷淡なる人種であると思はれたのである、然れども予の見る所を以てすれば、斯の如きは實に日本人を知らない、極めて皮相の見解に由るものにして、斯る評論は多分頑迷なる宣教師輩の間に言い出されたのに相違ない、彼等は日本人を野蠻人種と見做し、高尚なる宗教を有して居らぬものとして居つたから、耶蘇教を説教して聴かせたら、隨喜の涙を流がして、ハワイやニュージーランドの如く、舉國皆耶蘇教に改宗するであらうと思つて居つた、然るに日本人は他の野蠻人種などとは趣を異にして、歴史あり、思想あり、見識あり、又た強き、ブライドのある上に、幽玄なる宗教を有して居つたのだから、そう容易に耶蘇教に心酔するといふ譯に行かなかつた、それで事情に疎い宣教師等は直に日本人を評し、先天的に宗教心の乏しい人種であるとか、無宗教的の國民であるといひ出したのであらうと思ふ。

耶蘇教を信じないからとて日本人には宗教心がないと云ふ理由はない、佛教も宗教であり、神道も宗教である、これらの宗教を信する者は日本に澤山ある、數より云へば日本人中全然無宗教者といふ者は極めて少數であつて、日本人の大多數は何

宗かの信者である、又た日本の歴史に徴して考ふるも、宗教的趣味に於て日本人は世界の他の各國民に優る所あるとも、決して劣る所はないのである、日本の歴史、日本の文明から宗教的分子を一切取り除けば、後にどれほどのものが残るであらうか、各時代に於て宗教が其感化を或は政治に、或は社會に、或は家庭に、或は美術に、或は音樂に、又たは風俗習慣の上に及ぼしたる所は實に驚くべき程多いのである、更に進んで之れを個人の信仰よりいふも、耶蘇教の歴史にだに稀に見る如き宗教的熱情が日本の佛教徒の間に顯はれて居る、予曾て米國に在りし時日本の宗教に就て屢々意見を徵せられて講演したが、其時日本に於ける佛教の善男善女が熱心なる信仰よりなしたる善行嘉蹟に就て實際見聞した話をして聴かせると、何時も彼の耶蘇教徒が聴いて却て欽仰の念を起したことを記憶して居る、斯く觀し來れば日本人は人種として宗教心に乏しいとか、先天的宗教には冷淡だとかいふ議論は立たないと思ふ、否、日本人は其性情に於て宗教に最も熱心なる國民であると思ふ方が寧ろ適當であると思はなければならぬ。

然らば予は何故に今日の日本を稱して無宗教の日本といふのであるか、是れ癡に

いふ如く人種的又は個人的性情からいふのではなく現代の精神的傾向から見ても斯くいふのである、今日は實に無宗教の時代である而して予は今日の時代を評して無宗教と言はんよりは寧ろ非宗教の時代であると言ふの至當なるを思ふものである、蓋し非宗教とは宗教に反對する精神の汎濫及び宗教に矛盾する精神の旺盛をいふのであつて今の日本は則ち夫れである、是れ獨り日本のみの現象でなく現代に於ける世界の趨勢であると思ふ、試に宗教の理想と現代の傾向とを比較し見よ直に其徑庭の甚しきものあるを知らん、即ち宗教は其第一要義として心を盡くし力を盡くし凡てのものを獻げて神に仕ふることを要求して居るが、現代の精神的傾向は全く之に反して其心を盡くし力を盡くして日々奉仕して居る所のものは、金てふ偶像である、由來神と金とは兼ね仕ふことは出來ない、而して現代の日本は慥かに金の方に仕へて居る、是れ予が無宗教の日本といふ所以である、又た宗教は「愛隣」を主義とするが現代は「利己」を主義として居る、宗教は「協同」を教ゆるが現代は「競争」を奨勵して居る、宗教は「犠牲」を貴ぶ、然るに現代は「奢侈」を誇とす、宗教は「與ふる」を喜びとすれど現代は「可成く多く受くる」ことを幸とす、斯くて現代を支配

する精神的傾向は、全然宗教的精神と矛盾して居る、茲を以て現今の我國を目して無宗教の日本と稱するも誣言でないと思ふ。

武士的精神の隆盛を極めた我封建時代は、今日よりも其實質に於て遙に宗教的であつたと思ふ、當時の理想は富にあらずして忠、其精神は利己的にあらずして義侠的であつた、於茲予は一方に於て現代の文明の進歩を歓迎すると共に、又一方に於て當年のこの美はしき武士道の衰頹を感慨して措く能はざるものである、蓋し此武士的精神は予がいふ宗教的精神の一方面の顯現であるからである、維新の鴻業漸く緒に就き一たび我國が門戸を開いて歐米の文明に接觸するや、唯物思想、巧利思想、拜金思想、我利々々思想は殆んど當る可らざる勢を以て突入し來り、暫くにして我國を現代的俗思想の潮流の中に巻き込んで仕舞つた、爾來文明が進歩したとか、經濟思想が發達したとか、商工業が盛になつたとか、實業熱が勃興したとかいふて人々は狂喜して居るが、然しこれらは皆美しき形容詞を以て其外觀を描寫したのみで、其實質實態を赤裸々に言明せば、道徳は退歩した、金儲けが上手になつた、拜金宗が盛になつた、町人根性が勃興し、武士氣質が消散して、舉國皆墮落の淵に沈淪

したといふ意味である、政治界も將又た宗教界も悉く此俗臭に掩はれない所はないのである、曾て、或青年が「乞食」と題する演説をなし、今日の政治家、教育家、宗教家皆一種の乞食であると罵倒したことがあつたが、予は之を聽いて痛快に感じた、回向院の一角に國技の偉觀を存し、意氣を知つて金錢を知らざる力士をして、尙武の技を闘はしむる相撲道は、尤も此近代的の臭氣に感染せざるものとして、一部の人士の愛顧を得たるものなるが、それさへ昨今金錢に關する紛擾の絶へずして常に顧客の迷惑を醸せるが如き、實に時代思想の傾向を表證して餘ありと思ふ、斯くて武士道は今や殆んど全滅の姿となつて仕舞つた、此武士道廢れて拜金宗盛んなる形勢に見て、予は我國を無宗教の日本といふのである。

社會の事已に斯くの如し、而して之れか救濟の任に當るべき宗教界は果して其の神聖を維持して居るか、果して俗社會の上に超越して其威嚴を保つて居るかと云ふに予は然りと答へ得ないのである、否現代の毒勢力は宗教界をも風靡し去りて僧侶と云はず、牧師と云はず、又宗教家を以て自ら許す人々の心中をも腐蝕せしめて居るので、左ながら罪惡は寺院教會の祭壇に座して、教法師を願使して居る形で

ある、豫言者アモスの言は移して今日の宗教界を罵倒した言葉と見て差支ない。

「我知る汝等の愆は多く、汝等の罪は大なり、汝等は義人を虐げ、賄賂を取り、門に於て貧者をおしまぐ、今は日暗くして光なく、暗黒にして輝きなし、我は汝等の祝ひを惡み且つ賤む、又汝等の集會を悦ばじ、汝等の歌の聲を我前に絶て、汝等の琴の音は我之を聽かじ、公道を水の如くに、正義を盡きざる河の如くに流れしめよ。」

嗚呼現時の日本は實に「神なく望なく」宗教皆無の時代である。

然れども予は今日を悲觀して失望落膽するものでない、神を信する我等は、將來に對して大なる希望を抱て居るのである、世は如何に暗黒なるも、太陽は滅したるにあらず、遂に黒雲を破りて再び其光明を現はし來るを信するのである、予は信す、世は益々進歩開展して今日の文明を靈化し、將來に於て前代未聞の理想時代を齎らし來ることを、又尙社會は社會進化の必然なる結果として、其進化の間に偉大なる信仰を時代思想の中に胚胎し來るべきを信じ、國家に對しては其國家に於て今日の營利的競争益々其度を増して猛烈となり、競争又競争の結果國民は遂に競争の不利なるを自覺し、協同一致國に盡くすの精神に支配せらるゝ日の至らんことを信

じ世界に對しては今日の帝國主義益々其勢を逞しくして戦争又戦争の結果、各國皆戦争の不利を悟り、協同一致以て人類に盡くすの精神の勝を奏するの時來らむことを信ず、是れ即ち宗教の實現である、此處に至つて宗教は社會に國家に又全世界に充實するに至るのでなる。

東西の宗教思想

チャムペレーの著書に *Things Japanese* と云ふ者あり、日本に來遊する外人は必らずまづ之れを購ふて、日本事情を知るの要となすのである、此書物の中に面白き一章がある *Topsy-Turvydon* と題し、日本人の所作と外國人の所作との間に恰ど正反對の狀態を示して居るものゝあるのを説いて居るので、且夥多の例證を擧げて面白く之れを描寫して居る、予も日本人として嘗て在米中同様の感じを以て彼の國の所作を見たことであつた、所謂處かはれば品變る、諺の如く、東西の異習は恰んと其起原を異にする人種の所作にあらざるかを疑はしむる程、大なる相違を示して居る、假如へは日本人の人を招くには掌を伏して指を上下動さすが、西洋人は掌を上向

て指を内方に動かす、日本人の數を數ふるには母指より屈して子指に及ぼし、西洋人は子指より屈して母指に及ぶ、日本人の匏を用ふるや之を手前に引き西洋人は前方に推す、日本婦人は歩行の際襪を取れど、西洋婦人は臀部を掲ぐる等枚舉に逸あらず、修辭上の相違を云へば、日本人は縦文字を右より讀み、西洋人は横文字を左より讀む、日本の書物は開卷の第一枚を右の方に置けど、西洋の書物は左の方に其第一頁を置いて居る、日本文の構成は棒讀的なれども、西洋文は返り點的である、方位の稱呼も日本人は東南、西北と云へど、西洋人は南東、北西と云ひ、其他日本人が正確なる英語を語らんと欲せば、恰んど思想の立脚地を轉倒せざる可らざる程違つて居る、單に風俗言語のみならず、人情氣質の上に於ても甚しく相違の點を有し、殆ど情意の通せざる物がある、假如へは感情の發表に際し、日本人は喜怒哀樂を色にあらはさざるを以て貴人の徳とすれども、西洋人は喜べば手を拍つて雀躍し、悲しめば聲を上げて悲叫す、彼れを以て我を見れば冷淡極まるが如く、我を以て彼れを見れば輕跳笑ふに堪へたる者がある、予が始めて西洋人の其妻を呼ぶに「ベッター・ハーフ」と云へるを聞いた時には實に奇異に感じ、日本人の愚妻呼ばりとは雲泥

の差ありと思つた、或時米國の一友人が妹の事を紹介するに彼は別嬪で利口で善い娘だなど、眞面目に稱賛して居つたが、予は之れを聞いて恰んど抱腹絶倒せん計りに可笑しく感じた、之れが日本人であれば、ナニニ彼れはお福面^{わが}で、氣儘で、碌なものぢやありません」と卑下する場合である又日本の演劇には義理人情に絡まりたる慘澹たる悲劇があるが、西洋の劇には斯る悲劇はないのみならず、義理人情の衝突と云ふことが西洋人には分らぬのである。

思想の流露に就ても自然趣を異にして居る者がある、即ち彼の思想は實利的に傾き、私の思想は詩的に傾いて居る、之れを氏名に徴しても西洋人の姓名には餘り優美なる聯想を興起するものがないが、日本人には雅致に富めるのが甚だ多い、假如へは松浦、山田、櫻井等西洋には求められぬ者である、彼は「ロヂック」の型に嵌まらざれば事物を解する能はざれど、我は直覺的に眞理を解するのである、之れ西洋人が東洋人の幽玄にして神祕なる思想の妙味を解すること能はざる所以である、嘗てメドリー教授が松村介石君に就て莊子の養神論を聞かれた事があつたが、其玄妙なる意義の點に至つては、随分了解に苦しまれて終に分からなかつた様であつた

コンソラスは米國の大説教家である、彼が往年我實業團の市俄高を訪へる際、中央會堂に於てなしたる大説教の中に、彼はエモルソンを以て東洋的の米人となし、我輩は今後東洋人の詩的感想と、優美なる思想の感化を受け、將來幾多のエモルソンを生せんことを願ふものであると云ふて居る。

斯の如く東洋人と西洋人とは風俗、習慣、人情、思想等恰んど全體の空氣、全面の境遇を異にして居るのであるから、彼れに適するものにして、我に適せず、我に適するものにして、彼に適せざるものあるは免かれざる結果である、然るに此理を辨へずして、何も蚊も西洋のものを優れりとして、之れを其儘我國に採用せんとするは愚の極である、彼の明治十五六年の頃西洋心酔の時代に際しては此愚を演出したのであるが、後直に反動起り、應て國粹保存主義の高調せらるゝ世は來つた。

爾來國力の自覺明瞭を加ふるに従ひ、國民も次第に隸智を増し、文物共に取捨を慎重する事となりたれども、然れども尙時に丸呑主義を實演する者なしとせず、某婦人科名醫の談に、年若き醫學士等の内には東西婦人の體格健康等の差別を察せずして、單に西洋書籍によりて得たる知識を、其儘に日本人の治療に應用するものが

あるが實に境遇を無視した危険なる施術であると、又予は彼の急激なる社會主義者によりて唱道せらるゝ共產問題、勞働問題の如きも此弊害に陥つて居るものであると思ふ。

就中宗教に於て予は切實なる實例を見るのである。明治の基督教は西洋人の思想感情の間に發育したる宗教にして、松村氏の所謂輸入的基督教なるが故に、日本人の固有性に適合せぬ所が甚だ多いのである。嘗て大隈伯も云はれた事がある。我國に於て西洋文明の他の方面は移植せられて後、大に進歩したるものあるに比して、基督教傳播のみ獨り甚だ緩漫なるとは、之れ大に考ふべき問題である。予は此原因を以て異習特情の彼我相通せざるものあるに歸せんとするものにして、即ち西洋の基督教は東洋の我國人に適せない所がある爲めである。彼の自由派基督教、獨逸普及福音教會、ユニテリアン協會等、何れも大に此點に注意したる者ありと稱せらるゝにも拘はらず、其成績の刮目して見るべきものなきは何の爲ぞや、近來渡來の同仁教會キリスト教の宣教師は其使命メッセンジャーとして、凡ての人の救を主張して居るが、我死なば地獄の釜のめき、せん」と洒れる様な人間の多い日本では、之れも餘り國民の有難み

を拂はるゝものとも思はれぬ。

由來宗教は國民性に從ふて發達するものなれば、西洋で發生した宗教は其民衆に適應して健全なる發達を遂げ得べしと雖も、之れを文物習慣を異にする東洋諸國に移して其儘同様の發達を遂げしめ得ることは出來ぬ、之れ基督教が西洋人を動かすの力あるも、日本人を感化するの力に乏しき所以である。ジヨナサン、エドワードは米國の大説教家である、其説教は當時にありて幾多の人の心を慰め、勵まし、救ふたか知れぬ、其説教集は今も米人の尊重措く能すとする所であるが、吾人が之れを繙く時は何處に夫程の價值のあるものにや殆んど不思議に感ずる計りである。日本の在留宣教師の内には其學識に於ても、見識に於ても相當なる人物がないではなからうが、其説教の不評判なること實に言語に絶して居る、之れは國語の習熟に足らぬのであるか、布教の熱心に缺くる所あるのであるかと云ふに、穴勝左にあらずして、畢竟其思想が我國國民性に觸れずして同情を喚起することが出來ぬからである、アミエル曰く

AM an only understands what is akin to Something already existing in himself.

實に「人間は己に其心に存するものと均しき者の外は之れを解すること能はぬ」のである。於茲吾人は不幸にして輸入的基督教は到底我國民の間に其基礎を確定すること能はず。前途心細き運命に繋かれたるものと斷言せねばならぬのである。然れども以上は單に輸入的基督教に就て云へるのみ、西洋の文明と共に我國に入り來りし基督の道は然らず、今後倍々發展して我國民性に融和し、偉大なる感化を與ふるや疑なし、假如輸入的基督教の形骸は死すとも、我は道なり、真理なり、生命なりといへる基督の大精神、大信念、大悟道は永遠に活動して朽つる者にあらず、基督曰く「美種を蒔く者は人の子なり、畑は此世界なり」と又曰く「天國は芥種の如し、人之れを取りて地に蒔けば、萬の種より小けれども、長ては他の草より大にして、天空の鳥來りて其枝に宿る程の者となるなり」と、吾人は大に期待せり、我日本の畑に蒔かれたる此真理の種は今僅かに萌芽たるに過ぎれども、如何に生育し、如何に發達し、又如何なる好果を結ぶに至るものなるかを。

然れども將來日本に發達すべき基督の道は、今日の所謂基督教ならざるや既に論述したる如く明かである。嘗て新島先生は日本の菊苗を米國に送つて、彼の地にて

栽培せしめられたが、其花輪は初め送られたる日本のと全く異なり、殆んど異種の觀を呈したりとの事なりしが、之れは土地や氣候の影響に感じたものであらうと思ふ。宗教亦然り、故に西洋より移植せられたる基督教も、日本に於ては西洋同様の姿を存し得るものでない。

予嘗て松村介石氏の名著「修養録」を読み、中に氏が信仰の發達を叙して、七期の經過を列記せられたるを見て、非常に同意したことがあつた。之れは單に松村氏一個の閱歷談にあらずして、國民的實驗の徑路を示されたるものと思ふ、而して其最後の第七期を説いて曰く

夫れ第七期の人に至らば、則ち予は道なり、真理なり、生命なりとの自覺を得べきを以て、最早歴史的の書を説かず、また歴史的の人を説かず、敢て名づけて何教と云はず、敢て争ふに説を以てせず、渾々浩浩、唯だ在るものは道あるのみ、真理あるのみ、生命あるのみ、言以て之れを言ふを得ず、人以て之れを聽くを得ず、神か人か、人か神か、吾れ之を判する能はず、唯り活心活意の天地を貫き、萬物に通じ、我と俱に我と一に、永遠無窮に存するを見ん。

と、東洋的宗教の幽玄なる意義を最も明瞭に言明し得たるものである。由來西洋の基督教は神學的にして、頭に本居を置き、極めて組織的であるが、我國今後の基督教は此東洋的なる國民性に適當して、神秘的にして、腹に本居を置き、極めて幽遠なるものならざるべからず、之れ蓋し自然の要求なればなり。

國民の特長と宗教の發展

曾て佛人の書いた「宗教の進歩に對する佛國の貢獻」と題する論文を讀んだことがあつたが、成程或時代には佛國にも盛なる宗教の活動があり、又或時には偉大なる宗教家も現はれ、宗教の發展に多少の貢獻をなしたることもあつた、然し歴史に徴して公平なる觀察を下す時は佛國が宗教に對する貢獻は比較的少量なりと謂はねばならぬ、元來佛國民は宗教的國民でない、宗教は寧ろ佛人の短所であつて、彼の長所は宗教以外に在ると思ふ、之に反して英米獨三國民が宗教に對する貢獻は實に著しいものである、彼等は其の國民的性情に於て慥かに宗教的である、總ての時代を通して宗教は彼等國民思想の大部分を占領して居る、何れの時に於ても其時

代思潮は常に宗教的にして宗教上の趣味は國民思想の最上位に在るのである、時には保守神學が勢力を有し、又時には自由思想が勢力を有して居つたこともあつたが、然れども全然無宗教の時代は曾てあつたことはないのである。

爰に英米獨三國民の間に於ける宗教發達の傾向を觀るに、各々其趣を異にする所がある、宗教の感化が國民の性格を作る上に與つて力あるとは、慥かに歴史的事實に相違ないが、之と同時に國民の性格と特長が宗教の發展に及ぼす勢力も亦掩ふべからざる事實である、予は暫く英米獨三國民の特長を論じ、併せて彼等が宗教の發達に如何なる影響を及ぼしたか、又及ぼさんとしつゝあるかを示さんとす。

第一、獨逸人の特長。獨逸人の長所の何なるかは予が喋々を待たずして萬人の認むる所である、即ち研究の精神に富み、極めて精密なる思想と、極めて根氣善きことである、獨逸は寧ろ實際に疎くして學理に長ずる人種にして、是れ獨逸が學術に於て世界に冠たる所以である、如何なる問題でも獨逸人は之を根本まで研究せざれば満足しない、試に見よ、獨逸學者の著述は何れも皆長年月を費したるものならざるはなく、一の著書を完成するが爲めに、或は二十年或は三十年を費したと云ふこ

とは獨逸學者の間に於ては餘り珍らしきことでないが、斯くの如きは他國にありては稀に見る所である、予は曾て獨逸人の著した英文典を見たことがある、今は絶版して、容易に購ふことは出来ぬが、メツネルと言ふ學者の著した英語の文法書にして、これ程完全した英文典は英米にもなからうと思ふ、其書物の大冊なること、其研究の精密なること、又其著者の根氣強きこと、實に驚くの外はないのである。さて斯る國民の間に發達した宗教は實際的の方面にあらすして學理的の方面なることは自然の數である、即ち宗教の研究、神學の發達に於ては英米の遠く及ばざる所である、故に獨逸語學者は常に誇つて云ふ、獨逸語を知らざる人は神學を語るに足らぬと、是れ一理由の存する所にして、凡そ深く基督教に關する哲學的或は歴史的研究の知識を得んと欲せば之を獨逸書に仰がねばならぬのである、蓋し宗教の根本問題は哲學の範圍に屬す、ウルフ、ジョッペン、ハッワー、フヒクテ、シエリッング、ヘゲル、ハートマン、近くはロッセ等の名を擧ぐるのみにても、如何に深く宇宙論即ち宗教の本論が獨逸に於て研究されたかを知るに足る、基督教の神學に就いても亦完全なる研究が盡くされて居る、ドルナーの組織神學の如き其一例である、單に「罪て

ふ一教理に就きミューラーは一冊數百頁の書物二卷を著して居る、其精密なること實に驚くべきである、更に進んで基督教の歴史的研究のことを言はんか、基督傳にはパウルあり、バイスあり、カイクあり、斯る精密なる基督傳は曾て他國に於て發行せられたことはない、又た、基督時代の研究にはホルツマンあり、ハウストラッあり、殊にシユーラーは此一問題に就き七冊の書物をかいて居る、要するに獨逸人の特長は精密なる研究の精神と、之に必要な根氣を有することである、故に獨逸が宗教に與へたる貢獻は宗教に關する理論的或は歴史的知識である、故に基督教も亦獨逸人の特長により非常なる科學的進歩を遂げたのである。

第二、英國人の特長　マスー、アーノルド曰く獨人は、リースニングに長じ英人は、ポルセプションに長すと、ポルセプションは知覺の義である、即ち之を識見と譯して可ならん、換言すれば獨逸人は精密なる腦髓を有し英國人は聰明なる見識を有すとのとである、元來英國人は學問よりも道德を貴び理窟よりも理想を重んじ、學者よりも人物を作らんとする人種である、實に道德の修養は英人の魂である、大學の教育も、學者の立場も、其主眼とする所皆此一點にあるのである、故に英國人の宗教

的特長も亦自ら此方面にあるのである。英國に表はれた大宗教家の特色は潤大なる宗教的「インサイト」により世に偉大なる「インスピレーション」を興へたとである。ウエズレーを見よ、ホワイトフィールドを見よ、又た彼のキングスレー、モリスを見よ、近くはロバートソンを見よ皆一種の豫言者である、然り英國の宗教は豫言者的である、其他説教家にあらざる大詩人大學者も皆其趣を一にして居る、例へばテニソン、ウワーズワース、ラスキン、カーライル、コレリツヂの如き皆一種の宗教的悟道を握り、之を以て世に感化を興へたる豫言者である、而して更に興味ある事實は彼等が唱道した思想の淵源の獨逸より來て居ることである、見よ彼のウエズレーの思想は何處より來れるか、カーライルのは如何、コレリツヂのは如何、即ち彼等の思想の淵源は慥かに獨逸のヘーゲルにあるではないか、然れども眞理が獨逸人の腦裡に存する間は冷々淡々たる空理の形あるに過ぎれども一度移つて之が英人の頭に入る時は茲に初て活動の眞理となり靈的活力と化して働くに至る、是れ英人の特長である、基督教は獨逸人によりて分析せられ解剖せられ、英國人によりて總合せられ、新生命を興へられたる趣がある、國民の特長により宗教の發展自ら異

なるものあるは此兩國の間に於ける基督教の狀況に徴して明らかに見ることが出来る、と信す。

第三、米國人の特長。米國人の特長は如何、米人の長所は確かに實際の方面にある、米國を視察し來る者の一同に感ずる所のものは米人が盛なる企業心に富める一事である、米國人の「エンタープライジング、エナジー」は世界の人が驚嘆する所である、農と云ひ、工と云ひ、商と云ひ、其進歩の著しく其經營の盛なる其規模の壯大なる實に驚くの外はない、哲學、科學は米人の長所でない、然し之を實際に應用して國家の富を作るの技倆は米人の特長である、所謂「アップライド、サイアンス」は彼の天才である、斯る國民の間に生長する宗教は其發達那邊にあるかと言ふに矢張り實際的活動の方面である、深遠なる神學思想に於ては米人は獨人に及ばない、高尚なる宗教的識見に於ては米人は英人に及ばない、斯く米國は獨國の如く大學者を作らず、また英國の如く大人物も出ださないが宗教の實際的活動に至つては米國は遙かに英獨兩國の上にあるのである、教會設備の年々に進歩すること、信徒の歲々に増加すること、外國傳道に熱心なること、慈善事業の盛なること、其他社會事業と言

ひ教育事業と言ひ皆宗敎的信仰の活動にして、其盛大なる實に驚くべきものがある。米國の宗敎は、アングライド、リ、ジョン（應用的宗敎）なりと言ふを當れりと思ふ。要するに、獨は宗敎的學理に長じ、英は宗敎的識見に長じ、米は宗敎的活動に長ずるのである。相互の關係を言は、獨は宗敎を作り、英は之を活かし、米は之を働かしむるのである。創世記に曰ふ。

エホバ神士の塵を以て人を造り、息を其鼻に吹き入れ賜ひ人即ち活ける者となりぬ。

と、獨は宗敎を土にて形作りて人形となし、英は其鼻に息を吹入れて活ける者となし、米は之に活潑なる動作を與へたのである。斯く國民各々特長あり、其特長に従ふて宗敎の發展も亦自ら異なる所あるは明かなる事である。而して此三國民の粹を一に集めたるものは是れ即ち完全なる宗敎である。我日本國民は獨逸人に似て理論を好み、英國人に似て理想を貴み、米國人に似て活動の精神がある。焉んぞ知らむ、將來の理想的宗敎は、此日本國民の保育の下に斯る國民性の擁護を得て始めて健全なる發達を遂ぐる者にあらざるなきかを。

予が宗敎思想の變遷

時代思想の變遷は國民の進歩發展を意味すること、前記したる如くなるが、個人の宗敎思想の變遷は其人の信仰の進歩發展を意味するものである。而して予が茲に敢て自己の宗敎思想の變遷を叙するに當り、顧みて深く感謝に堪えざる者がある。回顧すれば予が基督教を信じて後、敎壇に立つに至りし以來、今日に至るまで凡そ廿八年、之を其思想に依つて分類すれば明かに四期に分つことが出来る。

(一) 迷信時代。即ち外國宣敎師の齋らし來りたる基督教を鵜呑にして、其敎義及禮典を殆ど口寫しに説敎し又執行して來た時代にして、明治十六年より廿一年頃迄の間に讃州高松、伊豫今治等に布敎に従事したりし頃のことである。當時予が敎壇に立つて説敎した説敎稿は、今尙ほ之れを保存せるが、試に取つて反讀するに、其痴愚の跡殆んど滑稽に類し、斯くて救世の大業に預り、人心の敎化に任じ得たりけるかと思へば、獨り冷汗の背を濕すを覺ゆるのである。然れども當時にあつては滿腔の正心を以て説き、誠意を以て傳へたので、決して自から欺いて居つたのではない。

其熱誠の心情を追想する時は謹嚴なる聯想を起すものが往々あるのである、而して當時の信仰の中心思想となつて居つた者は、耶蘇は神にして、彼を信する事は唯一の救の道なりとの事であつた。

今より思へば實に笑止に堪へざる次第である、併し今日も尙此迷信の五里霧中に彷徨し、斯る思想を磐石視して基督教は此磐石の上に立たざるべからず、斯道の興亡懸つて此イエスの性格問題にありとなせる牧師傳道師の存在することを思へば更らに吃驚せざるを得ぬのである。

(二)新神學時代、予が基督の性格に關して從來唱へられたる三位一體の神觀に疑を挟み、漸く思想の動搖を來たし始めたのが明治廿一年の頃にして、予が米國に遊び神學の研究をしたのは、實に此動機によるのである、爾來研學四星霜を経て聊か得る所あり、終に第二期の新時代に移つた、予は此時期を新神學時代と稱す、即ち歸朝後本郷教會に牧師となり、盛んに進歩的基督教の爲めに氣焔を吐いた頃である、當時の説教及演説の草稿も亦之れを保存し居るが、今日之れを閲讀するに唯奇異の感想に打たれて、斯る思想も尙善く吾人の満足を購ひ得たるのみならず、之れを

天下に主張せしむるを得たる時代の存したりしを訝る計りである、而して當時の思想は所謂正統派基督教とユニテリアン派基督教の間に介在して、正統派にもあらず、ユニテリアン派にもあらず、極めて曖昧なる立場に在つて、難者の所謂辯辯を弄し、合理を眞向に翳さして他あるを知らざりし極めて危険なる時代であつた。此時代に於て予が熱心に主張したる所は、耶蘇の神性と稱することにして、即ち耶蘇を神なりと云はず、又人なりとも云はず、人にして神の性を具へたる特殊の性格を發揚したるものとして、耶蘇の「デバインネス」を説いたのであつた、ソコデ其立場は保守的なる正統派基督教の思想と急進的なる「ユニテリアン」思想との中間に立つて、其調和を計つた形であつた。

今日よりして之れを見れば、實に愚の至りにして、矢張當時の西洋思想を丸呑みにして居つた譯である、成程歐米に於ては斯る曖昧にして究屈なる宗教を説く必要もあらん、日本に於ては其必要なく、大膽に明白に其所信を公言して、耶蘇を聖賢の一人と見做し、吾人の間に出現したる、最も偉大なる人格であるとして差支ないのである、面して今日も尙我國の正統派基督教中の有力なる教役者輩にして、此思想

の域を超越し能はざる者比々然らんとは實に遺憾に堪えざる所である。

(三) 異端時代。予が新神學時代の曖昧なる立場を自覺し、自己の思想の危期を察するや、明治卅年の頃、斷然正統派基督教會と袂を分ち、應てユニテリアンを標榜するに至つたのである。當時正統派基督教會に屬する舊友等は予を目して異端邪説を唱ふるものとし、不忠なる謀判人視して嫌忌し且擯斥したのである。然れども予自からは却て予が良心に忠なる者と自信して、心に疚しき所なく、彼の三田惟一館に於て盛んにユニテリアン主義を聲明したのであつた。

當時の思想は明かに基督を人間とし、吾人と同情同心なるものと見て、其神性など稱せる奇怪なる性格を非認したもので、元より神なりと唱へざれば之れを前日の思想に比すれば非常なる進歩の跡を示しては居るが、矢張基督教の範圍を脱却したるものと稱するを得ずして、基督教なる宗派的根性は依然として予を束縛して居つたのである。ユニテリアン教會創立以來其の柱石となり、今尙其幹部として幹旋せらるゝ安部磯雄、岸本能武太及び三並良諸氏等は予が多くの點に於て説を同ふする者なれども、諸氏が相變らず基督教者の名に戀々して、其範圍を脱すること

能はず以て信仰の統一を計らんとするが如きは予が深く諸士の爲めに惜み、密に以て遺憾とする所である。

(四) 覺醒時代。偶々教友松村介石君日本教會を創立し、不朽の道を唱へて敢て宗派を稱せず、基督教を冠せず、佛教を冠せず、儒教を冠せず、神道を冠せず、凡そ歴史的宗教の形態は一切棄て、是を問はず、人間天稟の靈性を根據として、總ての宗教の精髓を取り、打つて一團としたる理想の宗教を奉體せんとするあり、大に予の心を得たるものありしかば、茲に同志を得たるの歡喜措く能はず、即ち氏と相携えて靈界に馳驅することゝなつた。之れ予が覺醒時代にして、現今の予が信仰的生涯である。而して予は敢て之を以て予が偉大なる靈覺に接し、雄大なる思想に觸れたるものとして居るのである。人或は不遜の言なりとせん、然れども予は衷心より斯く信じ、且此思想は將來の宗教の傾向に尤も善く適順したるものとして天下に誇るに足るべしと認めて居る所である。

予が現時の思想は信神、修德、愛隣、永生の四綱領を以て宗教の大意を盡せるものとなし、不朽の道の本體茲に存すとなして居るのである、而して此主張こそ時の古今

を論せず、洋の東西を問はず、凡ての人類の宗教的渴仰を満たすに足るものと信じて居る。

嗚呼神は多年子を教導啓發し玉ひて、終に今日の信仰に達せしめ玉ひし事は子の感謝に堪へざる所にして、又神が萬民を擧げて此信仰に到らしめ、御國を此世界に建設し玉はん日の遠からざるを信じて喜ぶ者である。

基督は基督教に必要なりや

回顧すれば明治廿六年の夏と記憶す、國根に於て基督教各派聯合青年會夏期學校の開かれし際、予は講師として招聘に與り一場の講演をした事がある、當時予の選びたる講題は、基督の宗教と基督に關する宗教であつて、其要點は現今の基督教は基督自身の宗教と、基督に關する他人の宗教思想の混同せるものにして、吾人たるものは其鑑別を明にして基督の宗教に歸依せねばならぬと云ふにあつた。

然るに當時我國の基督教界には未だ此點に着眼するもの少なく、偶々論議する者ありても世の注意を惹くに到らなかつた、蓋し當時我國民多數の思想は基督教國

害の迷霧未だ全く醒めざりしかば、布教者は其要件として之れが辯妄に日も足らざる形勢なりしかば、内に於て斯教の本領に就て省察研究する餘暇がなかつたのである。

然るに世運の進歩に連れて、外基督教に對する頑迷なる偏見的迫害漸く雲散し、内國民性との同化より、斯道の本領に關する考究漸く當路者の中に熱し來り、特に進歩的思想を有する先進者の中に、從來の基督教に飽足らざるものありて、從來の基督教は基督に關する宗教にして、斯道の心髓たる基督の宗教でないこと云ふ事に着目し來るものあり、此區別を言明して大に基督教徒を警醒し、以て我國基督教徒をして此本據の上に立たしめんとするものあるに至つた、彼の海老名彈正氏の如き即ち其内の有力者である、氏の説によれば基督教には昔より此二流派あつて、一は基督を信ずる、信仰を主張し、他は基督の信仰を主張し來りたるが、今や吾人は人文煥發の新時期に遭遇して、基督彼れ自身の信仰を高調せねばならぬ時節到來したとするのである、而して此思想は獨り我日本の先覺者によりて唱へらるゝのみならず、形式的基督教の因襲久しき西洋に於ても近來識者の中に唱へられて一般の

注意を惹いて居るのである。米國に於てはハーバード大學總長ドクトルエリオットは其大論文「將來の宗教」に於て盛んに此思想を鼓吹して、信仰界に一波瀾を起し、獨逸に於ては一昨年夏開かれたる宗教大會に於て、ハルナック教授が聖書中に説かれたる福音には、其内容に於て甚だ異りたる耶蘇の福音と、保羅の福音の二福音ありて、從來の基督教は重に後者を説きたれども、吾人は今後に於て前者を説かざるべからずと稱せるが如き、共に代表的論說として此思想の傾向を表明して居るものがある。

熟々從來の基督教を見るに、ハルナック教授の云へる如く、多くはポーロの福音にして即ち基督に關する宗教に屬する者である、基督を中心とし、本尊として其周圍に構成せられたる宗教である、一言にて云へば「クリストセンツリック」(基督中心主義)である。

此派の基督教徒は基督を以て神と人との仲保者となし、彼に由て吾人は神を識り神に近づき、罪を救はれ、永遠の生命を得るとなすのである、故に基督崇拜の熱心より云へば左ながら一種の偶像教にして、嘗て偶像教と卑下したる所謂異教と擇ぶ

所がない、畢竟彼は木石の彫刻物に跪坐禮拜し、此は歴史的人物を其れに代へたる迄のと同じにして五十歩百歩の差に過ぎぬのである。

かゝる基督教徒には、基督なき基督教なる者はないのである、否基督は彼等の信仰の生命にして若し基督に對して一疑念を生ずるに至れば、彼等の基督教は瓦解し彼等の信仰は根本より崩落したるのである、彼の内村鑑三氏は最も熱心なる我國に於ける此種の信仰の代表者にして、氏は自から稱して「基督者」といひて基督教徒といはず、蓋し氏は之れに由りて自分は基督を信する者にして、基督教をのみ信するものにあらずる謂を表明したりとして居るのである、嘗て氏は此間の消息を氏が主幹の雜誌「聖書」の研究に發表して曰く、余は基督の教訓を信する者でない、彼自身を信するものである、若し彼れにして新約聖書が明白に示す所の者にあらずとせんか、余輩の信する基督教は其根底より崩れて了ふのである、「中畧」余は近來の人の云ふ如き漠たる緋のなき基督教に賛成することは出來ない、予の信する基督は強ひ「ハッキリ」した者であると、而して氏は盛んに基督の神性、基督の贖罪、基督の再來、末日の審判等を述べて、之れが聖書の基督教、是れが實際に効力ある「ハッキリ」

した基督教であると唱へられて居る。

内村氏の主張は成程「ハッキリした信仰の告白と稱することが出来る、然れども未だ強ひ、確かな、丈夫な信仰とは云はれぬ、寧ろ手を以てすれば誠に薄弱にして、壊れ易い、脆い、危い信仰である、基督の所謂砂の上に立てられたる家よりも果無く、大水出で、大風吹くまでもなく僅かなる疑心の爲めにも崩潰し相な心持がする、原來斯る宗教に基督教の名を冠することは僭越の甚しきものにして、今日の基督教は保羅の思想を主とする點に於て保羅教と云ふの至當に庶幾きを思ふものであつて、基督の教訓、基督の信仰等を直傳する基督教ではない、要するに基督に關して基督以後の人々が作りたる宗教が、今日の基督教にして所謂基督教は基督の宗教ではないのである、之れ明敏達識の士が沙石の間に珠玉を求め、基督の宗教に歸れの聲漸く高くなつた所以である、彼のドクトルエリオットの「將來の宗教」は此思潮の發現に過ぎぬのである。

由來基督の宗教には何等の仲保者なく、贖罪なく、又其必要を認めず一指直に神は父にして、人類は其愛子たり、愛子は隔てなく父なる神の愛を受け、父なる神は其愛

を以て凡て罪過を悔ゆる人を赦し賜ふと云ふ大福音を指して居る、斯くて基督の宗教は神を中心とする所謂「シオセンツリツク」にして、基督が福音として傳へたる其大自覺は神は愛にして我等の父なりといふことである、而して基督は自から此自覺によりて其徳を養ひ、此自覺によりて人を愛し、此自覺によりて獻身的生涯を送り、此自覺によりて其使命を完成し、此自覺によりて新宗教を開かれたのである、左れば今後吾人の歸依に値する宗教は、此基督の意識せし宗教即ち「シオセンツリツク」神中心主義にして、信神修徳を經とし、愛隣、永生を緯としたる、基督の信仰を繼承したる者でなくてはならぬ、内村氏は斯る漠然たる信仰は人を動かす能はず、又實際の用に適せぬ者にして、神は愛なりと唱ふる抽象的教義は、我等に取つて愛の動機とならず、余輩の基督教は一層明白なる愛を傳ふ即ち、基督は我等の尙罪人たる時我等の爲に死し給へり、神は之に依て其愛を現はし玉ふと云へる、此特別の愛を傳ふる者で余輩の愛は茲に發現するのである、神に對する人の愛、人に對する相互の愛は皆此特別の愛に激勵せられて發するのであると云はれて居るが予は大に疑ふのである、若し果して然らば基督自身の神に對する愛、人に對する愛は何に

激勵されて發現した者か、基督を以て一個別製の人間とし、常人を以て律すべからずとし、彼は學ばず教へられずして凡ての知徳を具備したるものなりと云はゞ止む、苟も基督にして我等と同情の人間なりとせば、彼の愛神、愛人の熱心は皆吾人の所謂基督の信仰より出たるものにして、内村氏が所謂漠然たる信仰こそキリストをして大宗教家たる資格を養成せしめたる大勢力を與へたものである。論じ去り論じ來りて吾人は吾人の宗教的立場の、所謂基督教にあらずして基督の信せし宗教なることを公言す、即ち基督を中心とする宗教にあらずして、神を中心とする宗教を信するものなることを公言す、而して是れ決して基督教を排斥するものにあらず却つて基督教の眞髓を得たるものなりと確信す、基督を中心とする基督教は、其の實基督の主旨に背反するものにして、神を中心とする宗教こそ基督の心を得たるものなれ、而して此の神を中心とする宗教は古今東西に通ずる不朽の道にして、嘗て孔子の心にある、釋迦の心にある、マホメットの心にある、ソクラテスの心にある、特に基督の心に活躍して、大宗教家の人格を彼れに顯揚したるものである。

論じて茲に至れば予は此宗教に基督教の名を冠する事の既に陳腐に屬せるを思ふものにして、寧ろ不朽の道と稱するの理論に適するを感ずる者である、これ蓋し人類世界のあらん限り、萬世に亙りて更はらざる意義を最も明白に表明したる語なればなり。

吾は何教の信者なる乎

予が近時の説を聞くものにして従來の基督教に屬する者は、予の立場を以て最早基督教に非すとなし、時に聖書の句を引き又基督のことを云々すれども、基督教の根本的教義は既に悉く之を破壊し去り、斯教の特徴は殆んど皆之を無視して憚らない者となし、斯の如き宗教は決して基督教と稱することが出來ないと言ふて居る、乃ち基督教徒にして予の説を聴く者は失望し且大に愛想をつかして居る、又之に反して基督教徒ならざる者は、予が主張する所を以て矢張基督教にして多少從來の基督教とは異なれども、つまるところ一派の基督教に過ぎない、村井大に悟れりと言ふといへども彼れ未だ全く耶蘇の臭氣を脱し得ない、鰥跳ると雖も斗を出

です、彼が悟りは基督教の範囲を出でざるの悟にして、彼が如きは未だ共に大宗教を語るに足らないと評して居る。

一方では基督教徒でないと言ひ、一方では基督教徒であるといふ、我は果して何教の信者なるか、是れ予が茲に世人の爲め決定せんとする所の問題である、而して今之れを一言でいはい

吾宗教は所謂基督教ではない、然し眞の基督教である、更に考ふれば遂に基督教でない。

是れ佛者の空、非空、非々空と均しく極めて曖昧にして、徒に人々の疑惑を招く言なるが如く聞ゆれども、予が基督教に對するの信仰は遂に斯く言はざるを得ないのである、乞ふ之を詳説せん。

予思ふに新約聖書の中には少なくとも三種の基督教が説いてある、第一は使徒行傳などに現はれて居る極最初の基督教で、即ちペテロを始め他の使徒達の説いた宗教である、彼等が聖靈に満ちて盛んに唱道した基督教は何であつたかといふと、耶蘇の復活と其再來であつたのである、使徒行傳を讀んで予が實に驚くのは、使徒達

の基督教より耶蘇の復活てふことを除いたら残す所は殆んどゼロであるといふことである、神は耶蘇を甦し給へり我等は其證人なり」とは彼等が繰返へし言ふ所にして、これが使徒時代の大説教家なるペテロの説教の神髓であつたのである、元來當時の猶太人はメッシヤ(救主)の來らん事を俟ち望んで居つたので、彼等はペテロの説教を聞き、來るべきメッシヤとはナザレの耶蘇である、其證據は彼の復活を以て知る事が出來るとの議論には殆んど抵抗する事が出來なかつたのである、特に烈火の如きペテロの熱誠を以て之を説かれたれば、彼等は勿論祭司殿司及びサドカイの人々まで戦慄し恐れ、日々幾百千の悔改者を教會に加へたのである、而て此等最初の信徒は遠からざる内に於てキリストは再び天より降り給ふとの事を堅く信じ、それが爲めこの世の財産も最早や不必要であると考へ、共產生活を營んで耶蘇再來の日を期待して居つたのは確かなる事實である、抑も此耶蘇の復活、又は耶蘇の再來と云ふ事は、其に是れ使徒達の迷信に過ぎないので、此等の迷信によつて説かれた基督教は使徒時代の猶太人の間には或は大なる勢力を示し大なる効果を現はしたるもの、あつたにせよ、今日の我等は斯る迷信的基督教を信す

ることは出来ないものである。而して今日も尙ほ此迷信は霧消せずして、現に米國などに於て或る一派の基督教徒は使徒時代の基督教を文字通りに信仰し、熱心に耶蘇の復活と其再來を説き、之を以て基督教が人類に齎したる最大福音となし、年々莫大の寄附金を募り、夥多の宣教師を世界到る所に派遣して、盛んに傳道しつゝあるが、古今の別なく斯る耶蘇の復活と耶蘇の再來とが、基督教の本領であるといふなら、予は斷じて基督教信者でないと言ふのである。

聖書の中にはペテロを以て代表せられたる基督教の外に、ポーロを以て代表せらるる基督教がある。ポーロもペテロの信仰を否定せず、耶蘇の復活も信じ、基督の再來も説いて居る。然しポーロが非常に高調して基督教の神髓とした者は贖罪論であつた。人は皆既に罪を犯したれば神より榮を受るに足らず、只キリストイエスの贖に頼りて神の恩をうけ功なくして義とせらるゝなり、神は其血によりてイエスを立て信する者の挽回の祭物とし給へり、そは神忍びて已往の罪を寛容にし給ひしとに就て今其義を彰はさん爲め即ちイエスを信する者を義とし尙ほ自ら義たらんが爲なり。羅三章、廿三、廿四、廿五、廿六、参照、是れポーロが幾十回となく彼が書翰

中に繰返したる議論である。猶太人としてのポーロ、パリサイ人としてのポーロが此の理窟に頼らなければ安心立命の得られなかつたのは合理的なことである。予はポーロの心事には深く同情せざるを得ない、彼は猶太教の最も熱心なる信者にて律法（モーモの律法）の觀念に支配せられ、律法を嚴守して全からんことを欲し、苦悶苦悶の結果、律法は人を潔むるの能力なきことを悟ると共に、救の道は神の愛なることを悟つたのである。然れども神は義なるが故に人の罪を赦さんには、何か有力なる贖罪がなくてはならぬといふ法律的要求を深く感じ、遂に基督の血は即ち是れなりと自覺したのである。ポーロは此自覺を以て神の默示と信じ、之に頼りて自ら安心を得ると同時に之を以て基督教の福音と信じ、盛んに之を宣傳するに至つたのである。然し此贖罪説はポーロの基督教であつて、基督の教ではなかつた。基督は三年間の説教中更に贖罪の事を教へられたことがない。唯一度馬太傳の第廿二章二十八節に「此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非ず、反て人に役はれ又多くの人に代て生命を與へ其贖とならん爲なり」との言葉があるのみである。然し此一節はポーロの云ふ如き贖罪説を教へたものでないことは前後の關係によつて

明かに解る、彼の句に於ては耶蘇が其弟子達に謙遜を教へられたのが主眼にして、其中に贖といふ語があるからとて、直に基督はポーロと同説であつたとするは牽強附會の説と云はなければならぬ、又た耶蘇が弟子達と最後の食を共にせられた時、パンをさき之を弟子に與へて「取て食へこれは我身なり」次に杯を彼等に與へて「爾等みな此杯より飲めこれ新約の血にして罪を赦さん」とて衆の人の爲に流す所のもの也」と言はれたが、此は耶蘇の口より出たものでなく、ポーロの神學の影響にして、四福音の中に後に入れられた言であるといふことは高等批評學者が證明して殆んど疑を容るゝ餘地なきものである、基督は路加傳第十五章「放蕩息子」の譬により、最も明瞭に最も適切に又た最も簡潔に、神は罪人と雖も眞實其の罪を悔て己に歸る時は、何等の贖罪をも要求せず、直に其罪を赦し給ふことを教へられて居る、此處が基督教の救の道にして福音たる所である、予は佛國の大思想家アミエールと共に斯く信するのである。

"I believe in the gospel, the good news—that is to say, in the reconciliation of the sinner with God by faith in the love of a pardoning Father."

然れども今日の所謂基督教は矢張りポーロの贖罪説を以て基督教の一大特徴となし、之を信じない者は異端邪説の徒にして、基督教信者でないといふのである、若し然らば、予は斷然基督教信者でないと表白するを憚らないのである、最後に尙ほ一つ毛色の變つた基督教が同じく新約聖書の中に包まれて居る、即ち約翰と稱する人の基督教である、彼得の基督教は迷信に基し、保羅の基督教は神學に基し、約翰の基督教は理想に基して居るのである、名は約翰といふも果して使徒約翰であつたか否やは疑問にして、多くの學者は約翰傳を以て使徒約翰の作でないといふ論じて居る、予も亦此説に賛同する者である、兎に角約翰傳の著者は非常な理想家であつて、彼が物せし基督傳は歴史的耶蘇の實傳でなく、理想的基督を描いたのである、予は近頃更に約翰傳を熟讀して著しく此事を感するのである、其冒頭に「太初に道あり、道は神と共にあり、道は即ち神なり」云々の哲學的斷案を下だし、此思想を第一の前提として演繹的に耶蘇を理想化して居る、まづ此著者が耶蘇を評するの言葉に「我等其榮を見るに父の生み賜へる獨子の榮にして恩寵と眞理に満たり」といひ、又た「未だ神を見し人あらず唯生み賜へる獨子即ち父の懷にある者のみ

之を彰せりといふ、其外耶蘇の言葉として約翰傳の傳ふる所は殆んど皆耶蘇の口を藉りて著者の理想を言ひ現はしたものである、曰く「天より下り天に居る人の子の外に天に上りし者なし」、曰く「父は誰をも審判せず審判は凡て子に委ねたり」、曰く「父は自ら生命を有り其如く子にも賜て自ら生命を有せたり」、曰く「我は生命のパンなり」、曰く「我を信する者は永生あり」、曰く「我は世の光なり」、曰く「我を見し者は父を見しなり」、曰く「我は途なり眞理なり生命なり」、曰く「我と父とは一なり」、曰く「我は葡萄樹、汝等は其枝なり」、又最後の祈に曰く「父よ今我をして爾と共に榮を得させ賜へ、則ち創世より先に爾と共に有ちし所の榮を得させ賜へ」、此祈禱の意義と冒頭文なる「太初に道あり、道は神と共にあり、道は則ち神なり」との意義相照應して、明かに約翰の記せし耶蘇傳は彼の理想であることが分る、耶蘇を斯の如く理想化して、神か人か殆んど其區別なき程迄に其人格を頌揚したる約翰傳記者の技倆は實に豪いものである、保羅の神學と約翰の理想とは今日も尙ほ偉大なる勢力を以て歐米の基督教界を支配して居る、今の最も進歩したる基督教思想も、尙約翰の基督教まを行つて之を超越することが出來ずに居る、内村鑑三君は氏の雜誌に斯く言つて居る。

基督教徒に取りてはキリストは故人でない、即ち單に歴史的人物ではない、彼は今猶ほ在し給ふ者である、彼は即ち黙示録記者の所謂「今在し、昔在し、後在す者」である、基督教者が他の信者と其信仰を異にする點は全く茲に在る、彼等は死せる昔時の英雄を慕ふ者ではない、今存在する主に事へる者である、彼は眞に今猶ほ葡萄樹であつて、我等は其枝である、我等は彼を離れて存在する者ではない……キリストと信者との此個人的關係、是れが基督教の特徵である、是れなくして聖書も神學も教會も教義も何でもない、而して是れありてすべてがあるのである、キリストが我等と共に在り給ふが故に我等は基督者であるのである、聖書之研究第百十號

要するに基督によりて神を識り、基督を通ふして神に交り、基督によりて活く、之を以て基督教徒の靈的生命なりと信じ、之を以て基督教の特徵なりと辯護するのが今日の所謂進歩的基督教なるもの、立場である、然れども此は約翰の基督教にして決して基督の宗教觀ではないのである、予も多年此信仰に安んじて得々たりしも、今は此の迷想を脱却して更に八面玲瓏の光明界に入りたるを覺ゆ、則ち更に一

段の進境を得て無碍の妙域に達したるを感ず、故にかの約翰に依りて宣傳せられたる理想的基督論が基督教であるならば、予は最早や基督教信者でないのである。嗚呼迷信、學說、理想！此の三ツのものが基督の顔を掩ひて其真相を吾人に現はさないのである。使徒時代より現時に至るまでの教會史を繙き、基督教の思想變遷の跡を窺へば、幾多の迷信、幾多の學說、幾多の理想が、層一層と基督の周圍を圍繞して、益々基督の眞人物と眞思想とを隠し、終に吾人をして基督の眞相得て知る可らずとの嘆聲を發せしむるに至る。或學者が「基督ほど凡ての人に知らるゝ如くにして、凡ての人に知られざる者はない」と言つたのは至言であると思ふ。近頃寫眞師がコンボジット、ピクチュアールと稱して或一人の肖像の上に他の多くの人々の肖像を合せ寫すことがある。一種の戲技であるが其最後の肖像を見ると最初の人の面影とは似もつかぬ全く別人の顔となつて居る。今日の基督觀もまた此の「コンボジット、ピクチュアール」の如きものである。本來の基督即ち歴史的基督の眞人物を知らんには、過去二十世紀間に於ける基督教思想の發達變遷を研究して、基督に關し後世の人々が抱いた凡ての迷信や理想や學說を取去らなければ分らないのである。

予は齋藤松洲畫伯より面白い實驗談を聞いたことがある。畫工が「キャンパス」を前に置いて將に畫をかこうとする時、其畫工の目には、己が畫かんとする目的物が判然と白紙の上に見へて居る。畫工は其物を顯はし出さんため、筆を以て凡ての障害となつて居るものを取去るのである。其障害物を段々除くうちに、中から畫工の目に影じて居る物の形が自づと顯はれ來るのだと云ふ話である。予が基督に對する觀念も、此の如く基督の眞相を描かんとする予の心には、迷信、理想、學說等の障害物があるが、其中から基督の眞人物がほの見へる心地がする。而して此等障害物を取り拂つた後に顯はれ來る基督を見て、之を信じ、之を崇拜する者である。故に世の基督教會が基督なりと思ふ所のものは、予の信する基督でない。教會は基督に關する夥多の教義教説を以て基督教と信じて居る。予は基督が意識せし宗教を以て眞の基督教であるとするのである。教會の基督と、教會の基督教が倒れない内は、眞正の基督と眞正の基督教とは顯はれ得ないと思ふ。予は會て所感として日誌に斯ふ書いたことがある。

今日の基督教は必らず亡びん、一日も早く其亡びんことを祈る、然れども永遠に

亡びざるものは、基督の宗教である、基督教亡びて益々光輝を放つものは、基督の宗教的自覺である、基督を神とするの信仰廢れて後、始めて基督の心に宿りし神を識るの時來らん、予は從來の基督教に對して、破壊的態度を取れども、基督の宗教を尊信するの熱心に於ては、何人にも譲らない、我れ最早や基督を以て絶對無限の神なりとはせざれども、基督の心に映じたる神は、吾神なるを信す、基督の信仰は、我信仰、彼の意識は我意識、彼の理想は我理想である、基督は實に第二の我なるを自覺す。

此の自覺から云ふと、予は如何しても基督教信者であると思ふ、敢て「我はクリスチヤンなり」と表白する義務なしと雖ども、予が心情止むを得ないのである、之を思ふ毎に、予はベテロと共に、「主よ我れ汝を棄て、誰に往かんや」と云はざるを得ないのである、則ち此意味に於て予は基督教信者であると謂ふ。

然るに更に進んで尙ほ深く考ふれば、予は基督教信者にあらずと思ふ、何となれば予が信仰と宗教的生命は、基督なくとも成立するのである、我が信仰の基礎は神にあり、我が信頼する道は天地に滿ち、萬世を貫き萬人の心に存するのである、歴史的

基督の存在如何に依て、我信仰は何等の動搖をも感じないのである、予は基督を崇拜すれども彼を以て、教權の所在とは思はない、基督の教へたる訓言でも、若し我心に適はざれば、我れ之を棄つるに憚らない、二宮尊徳翁の畫に、彼れ左手に大學を持ち、右手に小刀を持つて居る肖像がある、則ち彼は縱令大學の中にある言葉なりと雖ども、自ら道理に背くものありとせば、用捨なく小刀を以て之を切り取らんといふ意義を寓したものである、予も亦歴史上の書物や歴史上の人物に對しては、此態度を取るのである、基督教會に於て、昔時は羅馬法皇を以て信仰の教權者として、ポープの言葉は則ち神の言葉である、と信仰した時代があつた、ルーテル出で、此迷信を打破したのは卓見であつたが、彼は、ポープに代ふるに聖書を以てし、爾來基督教會は聖書を以て最後の教權とすることゝなつた、然るに近來は聖書に關する高等批評勃興し來り、聖書にも誤謬の存在することは争ふ可らざることであると云ふことになつてからは、活ける基督を以て永遠の主權者とするに至つた。

新神學を標榜する基督教徒も亦究したりと云はねばならぬ、抑も自分の良智良能を外にして、何處にか間違なき者、全然信頼し得らるゝ者を求むるは、人心の弱點に

して、是が世に偶像教の生じ来る所以である。羅馬法皇元より信するに足らず、聖書も亦悉く神の默示にあらずとして、彼を棄て此を外にしたる者何故に基督を以て教權の所在と仰ぐのであるか、其の基督も亦聖書の中の基督でなく、活ける基督であるといふは、如何にも曖昧なる議論にてはなきか、活ける基督とは即ち神の別名にあらずや、予は我心に語り、我心に教へ賜ふ神を以て、最後の「オーソリチー」とするのである、此神は基督に現はれた神にして、又たソクラチスにも現はれ、釋迦孔子其他凡の聖賢の心に現はれて、彼等を教へたる神である、予は彼にありて活き且つ動き且つ在ることを得る者にして、彼の外に頼るべきの道なしと信するのである、神は我光である、予は此光によつて古今の聖賢を知り、又た此光によつて基督を知り、此の基督は凡ての聖賢に勝りて最もよく神の心を得たる者誠に彼は神の子なることを識るに至つたのである、予が世の基督教徒と信仰を異にするのは此點にあると思ふ、彼等は基督に頼り、基督を通ふして神を知るといふ、予は然らず神に頼り神を通ふして基督を知ると云ふのである、神は予が信仰の土臺にして又た生命である、予が靈的經驗より云ふ時は、予は歴史的宗教の必要を感せず、佛教倒れ基督教

亡ぶるも我が信仰に何等影響するなきを覺ゆ、予は獨り活心活意の天地を貫き、萬物に通じ、我と俱に、我と一に、永遠無究に存するあるのみである、予は唯不書の經、無字の書を読んで進むのみ、宗教の極致は遂に此所に至らねば已まぬのである、之れ予が更に進んで又基督教信者にあらずと言ふ所以である。

予が宗教觀

今春三田唯一館に於て自由派基督教徒諸士の催ふしに係はる自由基督教徒大會なる者が開かれた、當時諸士の寛大なる胸襟は三日に亙る講演會の講師として、神道家より補永氏を聘し、佛教家より新佛教派の境野氏を聘し、哲學者より井上哲次郎博士を聘し、之れに自由派基督教の錚々者海老名氏、安部氏、三並氏、青木氏、岡田氏等を加へたる盛大なる集會であつた、而して余も亦誤つて講師の一人に擇ばれ其意見を徴せられたのであつた、蓋し予は近來日本教會に於て一種の宗教意見を公表しつゝあるものから、諸士又異説として傾聴に價するものと見做し、其光榮を願かたれたるものと思ふ、而して予は之れを以て予が主張の宣揚に最も大なる便宜

を供せられたるものとして、敢て諸大家の席末を汚して講演に立つた次第であるが、本論は當時講演したる題目であつて、恰も茲に予が論述せんとする所なれば當時の筆記を其儘に轉載することゝした。

予は本題の講話を演ずるに先だち、予の今日の立場に就て、少し、述べて置く必要があると思ふ。蓋し予は元來基督教に依つて宗教的生活に入り、基督教の教育を受け、基督教に依つて人となつたものである。乃ち明治十二年横濱に於て基督教を信じ、明治十三年より十七年まで基督教主義の學校即ち西京の同志社に於て教育を受け、其後米國に遊び彼處に於て基督教神學を研究し、歸朝後基督教を傳道すること數年に涉つたものである。

然るに舊來の基督教即ち保守派の基督教が、次第に予の理性に満足を與ふること能はざるに至り、一時新神學と稱して、古き信仰に新らしき説明を與へたる、基督の所謂新しき酒を舊き革袋に入れたるが如き、誠に曖昧なる危ふき綱渡りのやうな態度を採つて居た事があつた。然れども暫らくにして、予は此の脆弱なる立場を自覺するや、同時に其態度の甚だ男らしからざるを看、斯る優柔なる態度を以て世に

立つべきにあらずとし、遂に斷然舊派の基督教を棄て、自由主義の基督教を標榜したのである。

之れ恰も明治卅年の頃で、其頃の予は諸君と主張を同ふしたるユニテリアン教徒であつて、此惟一館を根據として、約四年の間、盛に自由主義の基督教を叫んだのである。然かるに或事情により、予は安部、岸本、平井、豊崎の四氏と共に、決然此のユニテリアン協會と袖を別ち、全然關係を絶つて止むなきに至り、爾來數年の間沈黙の生涯を送ることゝなつた。而して此の沈黙の時期は、予にとりて無益の時期ではなかつた。予は此の時期に於て實に宗教的覺醒を得たのであつて、今日よりして是れを思へば、此の時期を與へられたる事に對して感謝の念に堪へない。

而して予が此の沈黙の時期の初に於て決心した事は、凡ての情實、凡ての經歷、凡ての僻見を一掃して、虚心平氣になつて抜ける程、人生問題、宗教問題を考へて見ようといふことであつた。ソコで或友人の如きは予に勸告して暫らく鎌倉に退き、僧坊で座禪瞑想してはどうだと云ひし位であつた。併し予は特に座禪もせず、斷食もせずして、唯辭に思ひ深く考へ、朝に夕に跪坐瞑想して天來の啓示を默會したのであ

つた。

其の結果として第一に予は心に一つの消極的確信を得た、ソレは外でもない西洋の基督教は我が心の要求を満すに足らないといふことであつた、保守主義の基督教は勿論自由主義の基督教と雖も、凡て舶來輸入の基督教に對しては予は悉く不満足を感ずるに至つたのである、即ち西洋人の歴史や、習慣や、人情や、思想の中に發達した基督教は、到底歴史も、習慣も、人情も、思想も相異なる東洋人なる我等に適する筈はないと確信するに至つた。

由來西洋人の思想の形式は全く東洋人のソレと違つて居る、彼等の頭は機械的であつて精神的なる宗教の眞理を解すること極めて鈍く出來て居る故に、彼等は詩的にして優美なる、神祕的にして玄妙なる、宗教の眞理を味ふには不適當なる人種である、彼等は東洋人の如く直覺的に眞理を看取すること能はず、之を説明して一種の「ホルミユラ公式」となし、始めて之れを理解するのである、之れ西洋人の宗教が皆教義であり、「ドクマ」であり、理窟であり、説明である所以である、自由主義基督教なども、餘程氣のきいた宗教である様であるが、其特色は所謂合理的と云ふ所にあ

つて抱擁が淺い、予を以てすれば宗教が合理的になれば最早や其中には宗教の生命はないのである、此扁額(惟一館公堂の扁額を指して)の文字なる「神是天父、人皆兄弟、濟固品性、奮進向上」は西洋のユニテリアンの信仰個條を文字通りに翻譯したもので、西洋人には「コンナ公式」が最上の宗教とも見ゆるか知れぬが、宗教はこんな「ホルミユラ」の中には無いのである。

基督は宗教的天才であつて神學者でなかつた、彼は曾て「ホルミユラ」を以て宗教を説かなかつた、彼は東洋人にして其頭腦は他までも東洋的で、宗教的で、詩的で、禪的であつた、西洋人は到底此の基督を解することは出來ない、例へば天國を問ふ者あるに對して基督は「人新に生れずんば神の國に入る」と云はれ、神の國は此處にあり、彼處にありと云ふべきものにあらず、爾等の中にあり」と云はれ、猶太人の宗教の本尊たる彼のエルサレムの宮殿を指して、爾此の殿を毀て、我れ三日にして之を建つべし」と云はれた基督の思想は皆禪的である、又道を問ふ者あるに對して「我は途なり、眞理なり、生命なり」と云はれた基督の言葉は禪味の津々たる者がある、此等の神祕的思想は西洋人のトテも了解し能はざる所にして、東洋人の翻譯

を俟つて始めて味ひ得らるゝのである。

是れ今日歐米の識者が東洋思想に望を屬するに至つた所以である、彼等は從來の基督教に壓き救を東洋に仰いで居るのである、彼のシカゴの大説教家ゴンソールスの如きは公然其の教壇から東洋の宗教趣味を大に我れに鼓吹して貰はなければならぬと云つて居る、之れ穴勝東洋人に對する諛言でもなからう、然かるに今日日本人であり乍ら態々西洋の基督教を焼き直して、之れを東洋人に宣傳しやうなどとする者は、是れ實に世界思想の大勢を知らぬものにして、自から好んで冠履其處を異にせんとする不見識極まつた輩である、寧ろ我等東洋人の宗教眼を以て彼の幽玄にして神秘的なる基督の大自覺を見、之れを西洋人に教へ、彼等を東洋化するこそ我等の任務ではあるまいか、而して彼等を東洋化するは即ち彼等を宗教化する所以である。

論じて茲に至れば、諸君は必ず去らば爾の宗教は何ぞと問ふであらう、予は之れに答へて、予の宗教は○である」と云ふの外はない。

は無邊無量である。

は靈妙不思議である。

は活潑々の能力である。

は萬人を畏服するの權威である。

此の○我にありて動き、此の○我を通ふして現はる。

而して此の○は我と一なり、我れ此境に達すれば、我の極致に達したる時にして、我自ら其何物なるを知らざるに至るのである、之れを神と云はん乎、否、人と稱せん乎、否、果して然らば此の○果して何者ぞと云ふに曰く言ひ難し矣、之を天と云ひ、神と云ひ、又佛といふ、皆似て非なるを奈何せむ、寧ろ○は○にして遂に解す可らずと云ふに若かざるなり、則ち予の宗教は佛にあらず、儒にあらず、又基督教にあらずして無名の宗教である、故に予が宗教は哲學の上に築かれずして哲學を超越し、倫理の上に立たずして倫理を超越するもので、即ち哲學倫理の上に位する神祕の境界にあるのである、元來宗教は哲學や科學や倫理學の奴隸にあらず、此等を超越して此等の上に權威を有する、アンノーンシムシングである、されば宗教を説明せよとは抑も無理な注文であつて、之れを説明すれば已に宗教ではなくなるのである、花は

美なりと感しても其美たる説明を求められては困る、花を解剖すれば其美は忽ち消滅してしまふ、予の宗教も之れと同じく到底言語を以て説くことが出来ない言語は不完全にしてトテも宗教の妙味を寫すことの出来ないものである、唯だ時々暗示を與ふる計りである、然も強て説明せんとならば、我は途なり、真理なり、生命なりといふの外はないのである、而して予は不肖にして未だ此境遇に達し得ざることを遺憾として居るのである。

終に臨みて、予は切に日本自由派基督教徒諸君に望む、諸君が現に教義的基督教より轉じて、進んで歴史的基督教に着目せらるゝに至つたのは、予の大に敬服する所なるが、更に進んで歴史的基督教より心理的基督教に移られんことは、一層切に希望する所である。

心理的基督教とは基督の悟道である、之を近世の言葉で云はゞ基督の意識を研究することである、諸君にして若し一度基督の意識の廣さ深さを看破せば、莊子の所謂此は此れたり、彼は此れたり、が分り、神一、宇宙一、人類一、天下の宗教皆一たることが明らかになつてくるのである。

理想的宗教生活

之れ宗教的生活といへども、迷信的宗教生活は予の最も厭ふ所にして、之等の生活を送る者の内には或は聖靈を受けて生れ變つたとか、或は祈禱によりて思はぬ金を與へられたとか、或は世の終は近づけりとか、實に常識はづれの言説を爲す者が、あるが予は常に見て以て嘔吐を催ふ所である、斯る宗教的生活は頗る劣等なるのみならず又甚だ不健全極るものである。

世間一角の識者にして此迷信的宗教生活を見て、此外に宗教生活はなきもの、如く心得、一般の宗教的生活をば速断して、悉く迷信を加味するものとして擯斥するものがあるが予は又そうは思はぬ、予は一方に斯くの如き病的宗教生活あるを認むと同時に、他に健全なる宗教生活の存する事を信するものである、即ち劣等にして没常識なる宗教的生活の外に、高尚にして優美なる宗教生活の存する事を信じて疑はないのである。

抑も「宗教的生活」てふとは、たゞ其言葉を聞くのみにても何となく氣高く、之を味へ

ば無限の趣味を聯想し來つて欽慕の情に堪へざる者がある、嗚呼宗教的生活なるかな、人若し其真義を現實せば其生活如何に神聖なるか、如何に高尚なるか、又た如何に美麗なるか、光風霽月も以て比すべからずである、而して予が斯く感ずるものは其感情によりて然か云ふにあらずして、歴史的根據あつて然か云ふのである、即ち抽象的に自ら想像して之を美なりと感ずるにあらずして事實に徴して然か感ずるのである、彼の古の聖賢君子や偉大なる宗教家が實現せし歴史的事實を追想する毎に、予は衷心より宗教的生活の美感に打たれざるを得ぬのである。

高尚なる宗教的生活を具體的に發現したる各種の人物と其性行を追想し、之を分析的に研究すると、茲に三種の慕はしき理想の其間に存在する事を認むるのである、或は之を稱して三種の宗教的生活と云ふを得べし、而して其間に多少方向を異にする點なきにあらずれども、各々倫理的動機に基き、最も廣き意味に於て、否、真正の意味に於て宗教的精神に満つることは皆同一徹である。

(一)自己を中心とする宗教的生活 茲に自己を中心とする生活とは己の利益と快樂をのみ是れ謀る所謂利己主義の生活を云ふのではない、自己の修養を目的とす

る生活をいふのである、即ち自己以外には神も見ず天地をも認めず、専心自己の徳を修め自己の品性を高むるを以て唯一の目的となし、又畢生の事業とする生活をいふのである、之を消極的に云はば、人慾の私を去りて己に克たんと欲するの精神にして、之を積極的に云はば、良智良能を發揮し、圓滿に天賦の性格を發揚せんと欲するの理想である、是れ古來の賢聖君子の心術にして予の欽慕措く能はざる所の者である。

自己の修養を目的とする生活は道德的生活にして、宗教的生活と稱する事能はずとする者もある、然れども予は慥かに之を以て一種の宗教的生活と認め得る理由ありとするものである、元より此種の生活をなすものは、未だ心に神を自覺せず又口に神の名を唱へざれども、其實彼等は神を求め、神に近づかんことを勉めて居る者であつて、ポーロの所謂識らざる神を拜する者である、彼等が人慾の私を去りて良心の聲に應せんとするは、取りも直さず己の中に伏在する神性を認むるものにして、彼の徒らに口に神の名を稱へながら心に貪慾を燃す俗宗教家に比して、彼等は真正に宗教的生活を營む人々である。

儒教を以て宗教とするものあり、又之を以つて、不當となす者あり、宗教として儒教の立場は未決問題である、予も儒書の中に時として「天」と云ひ又「上帝」と云ふ如き文字の散在するを以て、直に儒教は宗教なりとするが如き薄弱なる議論には賛同することは出来ぬ、然れども儒教の精神と理想とを攻究し來れば、其最も深き所に神を求め、殊に人心の根底に寓れる神明を揣摩しつゝある點に於て、宗教たる質を有する理由の存すとなす者である。

謹嚴なる精神を以つて修養の道を講じ、全心を捧げ全力を盡くして己の内の神に奉仕したる聖賢君子は、東洋の歴史に於て最も多く見る所であるが、西洋にも古より此種の人は數々あつた、予は彼の有名なるトーマスアケンピスの書をよみまたパスカルの傳を繙き、或は又彼の使徒保羅が基督教に改宗せし以前の經驗を羅馬書に於て見る毎に、彼等が如何に熱心に人慾の私を制するに苦み、良心の命に順はんことに努めたるかを感ずるのである、其心中を想へば實に同情と尊敬と欽慕の念を起さざるを得ないのである、彼等の生涯は決して進歩したる宗教的生活とは云はれねども、慥かに一種の宗教的生活の實質を有して居つたことは疑なし。

(二)人類を中心とする宗教的生活 自己の修養を目的とする宗教的生活に優りて更に高等なる宗教的生活がある、即ち自己の事を忘れて人類の事を思ふを以て主とする生活である、人を愛するの熱誠に満ちて人類の幸福と進歩の爲めに、己の利益と快樂を犠牲に供する生涯である。

自己を中心として修養の道に熱中したる聖賢が、東洋の歴史に多かつたやうに人類を中心として獻身的生涯を送りたる人傑は、西洋の歴史殊に基督教の歴史に最も多く見受くるのである、たとへば彼のジョン・ハワードの如き、ナイチンゲール女史の如き、リンコルンの如き、近くは英のシャフツベリー侯の如き、みな人類の不幸を救済するの熱心を以て其の身を飾はれたるの人々である、彼等の眼中には人類の意識あつて自己の意識なく、たゞ人道のため博愛の化身となつて活動したのである。

獻身的博愛の生涯は慥かに一種の宗教的生活であるが、此種の篤行家の内には往々自己を忘るゝと同時に神の意識にも甚だ薄い所の者がある、彼のハワードもナイチンゲールも基督教信者であつたから、神に對する信念はあつたに相違ない、然

れども彼等の精神を支配したる大なる「インスピレーション」は、寧ろ「ディヴ・ニチニー」(神)よりも「ヒューマニチー」(人類)であつて、彼等は之れが爲めに一身を獻げて働いたのである。教會史の内には異端者の刑罰に關する記事が往々掲げられてあるが、夫れ等は皆宗教の名によりて宗教家が宗教家を虐待したる史實である。斯くの如きは宗教家の行爲として無宗教家にも劣る非宗教的生活を現はしたものである。之れに反して予が曾て米國シカゴ府に遊び社會慈善事業の視察をした時、一人の尊敬すべき女傑に逢ふた事がある。彼は「クリスチャン」にあらずして純乎たる無神論者であることを自ら公言して居つた。然るに其性行と事業を視れば實に敬服すべきものが多いのである。彼は貧民と労働者に對する無限の同情を抱き、自から財産家でありながら、貧民の巢窟に其の居宅を移し、朝に夕に貧民と親炙して彼等を救濟することを樂しみとして居る。斯くて此の婦人がシカゴ市の社會的事業に貢獻したることの多きと、又労働者が彼を尊敬することの厚きとは實に驚くべき程である。此の種の人には自ら唱ふる所によれば無宗教家なれど、予より見れば慥かに宗教家にして宗教的生活を送つて居る立派なる宗教家である。猶太の賢人ヤコブの

云ふた言に「眞の宗教的生活とは孤子と寡婦を其患難の中に眷顧しまた自ら守りて世に汚されざる是なり」とあるが實に格言である。

(三)神を中心とする宗教的生活 最後に向一つの高等なる宗教的生活がある。即ち神を主とする生活である。宇宙の中心に理想と同情の存在を自覺し、之に和し之と交通するの生活である。是は宗教的生活の極致である。人此生活に入る時はこれほど高尚にして美しきものはない。

悟道の必要はこゝにあるのだ。この高尚なる宗教は自得して之に達するのでなければ本當でない。一度其道を誤るときは迷信的生活となりて最も醜にして忌むべきものとなる。又理窟で以て神の存在を理解したりとて、此道を得たりとは云はれぬ。蓋し宗教的自覺は智的研究の結果でなく、全く道德的意識の發達により自ら生じ來るのであるからである。

基督は實に此心を得、此生活を實現したものである。彼が他の聖人君子に異なる著しき點は此所であつたと思ふ。彼は天地に對し宇宙に對して抱きたる心情を表はすに父子の情愛を以てした。去れども此の父と云ひ子と云ふ言葉も彼の信念を完

全に寫し得なかつたに相違ない、基督が天地に對する心情の深さ高さ長さは到底識ることの出來ぬ者がある。

今日の基督教徒が神學上の議論を以て僅に有神説を構造し、而して此の神を呼ぶに基督の口吻を真似て「父よ」と稱し、自ら基督の心を得たりとするが如き實に僭越の極と云ふべきである、予の如きも未だこの高尚なる宗教的生活の奥堂に達したるものにあらずして、たゞ僅かに其門戸を窺ひ微かに理想の光明を認め得し者である、宗教的生活の種類以上叙する所の如し、即ち自己中心の宗教的生活と人類中心の宗教的生活と天地の大精神を中心とする宗教的生活とである、而して此三者を具備する者即ち自己に對しては王たらんことを勉め、人類に對しては僕たらんことを任じ宇宙の「ハート」に對しては子たらんことを期する者に於て理想の宗教的生活を見るのである。

信仰の修養

近頃一人の青年予が家を訪ふて珍らしい自白をした、其人の云ふには、私は小さい

時からクリスチャンの家庭に育ち、クリスチャンとして教育せられましたのであります、併し未だ信仰といふ自覺が起りません、又未だ嘗てその神に衷心より祈禱を捧げると云ふ様な信仰も起りません、之れ、實に珍らしい自白である、併し珍らしき事實ではない、世間には其説が有神論で其感情がクリスチャンであつても信仰の實驗をした事のない人が随分あるのである、立派に洗禮を受けて幾年も説教を聴いて、毎日曜日には缺かさず禮拜に出席すると云ふ忠實なる教會員であり乍ら、まだ信仰のゲート、ウェイ(信仰の門口)にも達せぬ者がある。

希伯來書第十二章に「イエス即ち信仰の先導となりて之を完うするものを望むべし」とある、この信仰と云ふ事に就ては吾人は大に耶穌に學ばなければならぬ、彼は常に信仰の先導者たるのみならず、實に信仰の師表である、模範である、彼れの修養の跡を尋ねれば、第一信仰の起源、佛者の語を藉りて云へば發心、第二信仰の成長即ち修養、第三信仰の極致即ち完成の順序が明かに現はれて吾人に其徑路を示して居る者がある。

(二)信仰の起源　耶穌は如何にして信仰を得たかと云ふ事は聖書にも明かに書い

でないのである、併し注意して新約聖書を讀むと、多年修養を積まれた末、或時に至つて忽然として自得せられた様に見える、それは彼が三十才の頃にして、其時始めて大自覺を得られた様である、聖書に「イエス、バプテズマを受けて水より上る時、天忽ち之が爲に開け、神の靈の鳩の如く降りて其上に來るを見る」とある、是は即ち此耶蘇の自覺即ち心的覺醒の當時の模様を形容した詞である、此語に由りて見れば、今迄耶蘇の心の中にあつた神は、何だか遙かの天上に掛つても居る様な氣持であつたのが、此時その天一時に開けて神は歴々として耶蘇の上に下られた、それも夢の様にボンヤリとしてはいはない、鳩の下るが如く明らかに天より下つて耶蘇の胸に宿つた、是は如何しても耶蘇が信仰を自得せられた時の其心狀を描いたものに相違ない。

信仰はこんな具合に忽然として來るものである、神は斯く遽然突然に頭上に落下し來ると云ふ様な經驗をするものである、聞いて知つて居ると云ふ丈ではいけない、自得しなければならぬ、心に感ずる丈ではいけない、徹底して仕舞はなければならぬ、併しこれは自分の修養で以て自ら發明するのではない、全然他力である、神に

教えられるのである、此自得、悟道の刹那に信仰は生るのである。

中江藤樹は常に門弟に教えて「汝等主人公に逢ふべし」と云つて居たと云ふ事である、是は實に意味ある語である、思ふに、主人公とは天を指すもので、之に逢ふべしとは忽然として天を自覺し之れを體せよと教えたものである、王陽明も其詩の中に「四十餘年睡夢中、而今醒眼始朦朧」と云つて居る、彼も亦四十餘年にして始めて自覺の域に達したものだと思はれる、孔子は「五十而知天命」と云つて居る、孔子は十有五にして學に志して以來、修養を積んだのであるが、五十にして始めて天命を自覺したのである、ポーロが信仰に入つた時の實驗は、忽ち彼の眼より鱗の如きもの脱ちて、耶蘇を幻に見たと云ふのであつた。

此等はすべて自覺である、耶蘇は云ふに及ばず中江藤樹、王陽明、孔子、ポーロ皆この實驗を経たのである、神を信ずると云ふのは神を自覺すると云ふ事である、我聞て信じたるにあらず我目之を見、我手之に觸れて信ずるのでなくてはならぬ、予自身も神を求むること十三年間にして始めてこの自覺の經驗を得たのである、其時は物あつて天より我頭上に落下し來つた様な感がしたのである、併し其以前の考が

間違ひであつた譯ではない、唯睡夢中の者であつたので、眞の信仰は出来て居なかつたのである、醒眼始めて朦朧して觸目するにあらざる限り、まだ信仰の域に達しないのである、信仰は議論でもなければ、感情でもない、自覺である、自得である、この觸目の自覺生じて其信仰は始めて大丈夫である、岩の上に建てられた家となるのである、何人の強迫も如何に奸譎なる誘惑も之れを動かすことは出来ぬのである、茲に至つて其信仰は己れの存在よりも確かなるものとなる、自分が茲に居ると云ふ事よりも更に疑ふ可からざる事實となるのである。

此種の信仰は人間の能く之を授け得るものではない、人間の口を以て如何に説けばとて到底この信仰を作り出す事は出来ない、此意味より云へば傳道は人力の及ぶ可らざる所である、人は唯々之を暗示する丈に過ぎない、人の發心に援助を與へ機會を供する位の事に過ぎないのである、故に此信仰を求めんと欲せば人は直ちに之を神に聽かなければならぬ、教ふるものは只神あるのみ、神に教えられなければ、人は悟道に入る事は出来ないのである。

「求めよ、然らば與へられん。」此信仰を得んと欲する者は求めなければならぬ、之を求

むる事切なれば何時かは之を與へられる時期の來ぬ筈はない、所謂思之思之思到於通のである、予は十三年間求めて終に漸く之を與へられたのである、併し起信の徑路は人によつて一樣ならず機會も亦違ふのである、故に或者は肉親の死、事業の失敗等非常な悲哀に陥つた結果之に達し、或者は人生の煩悶の極、或は誤解の結果、或は失戀の結果、或は罪惡の結果、或は歡喜の餘り感謝に堪へずして之に至る者もある、又斯る特殊の境遇に際會せずして、自ら修養の結果之に到達する者もある、基督の如きは修養の結果之を得たものであつた、之を求めて修養を積めば何時かはこの豁然たる自覺の時期が到來せずには居らないのである、かく其の徑路は種々様々なれども、一度この自覺を得た人は、等しくこれ信仰の人である、わけ登る麓のみちは多けれど、同じ高根の月を見るのである、而して此の信仰の境界に達したる時の喜びは何に譬ふべきか、殆ど其比を知らないのである、基督は嘗て其弟子の信仰が此處に達した時、天地の主なる父よ、此事を智者學者に隠して赤子に顯し給ふを謝す父よ、然り、それ此の如きは聖旨に適へるなり」と云はれ、又或時爾等の目は見、爾等の耳は聞くが故に幸福なり」と云はれた、愛弟子シモンペテロが、此自覺に入

つた時には「ヨナの子シモン、爾は幸福なり、そは血肉なんちに示せるにあらず、天に在す我父なり」と云つて喜ばれたのであつた。

(二)信仰の成長 天來の信仰も自然に委すべからず、之れを養成すると尙豪腕師の花弁を培養するが如く用意周到を缺いてはならぬ、然り其處に三個の必要なる用意がある而して其の第一は謹慎である、耶蘇は其信仰を自得するや直ちに野に行つて四十日四十夜の間大に修養せられたのである、之は吾人の大に學ばなければならぬ事である、假令ひ一時光明を見る事が出来ても、謹慎して修養しなければ、再び元の暗黒に歸るのである、所謂聖靈を消して仕舞のである、基督の語に「また天國は畑に穢れたる寶の如し、人見出さば之を秘し、喜び歸り、その所有を盡く賣りて其畑を買ふなり」とある、天來の信仰は寶である、眞珠よりも貴い寶である、一度之れを見出さば名譽も、財産も、學問も、親も、兄弟も、妻子も己れの生命をも抛つて、之を購ねならぬのである、基督又曰く「汝の手汝の足、之を躓かさば、斬りて之を棄てよ」と、信仰は吾人の生命の生命である、魂の魂である、人若し其生命を失はば、全世界を得るとも何の益あらんや、信仰の爲には何物を犠牲に供しても惜むべき事ではない。

第二の用意は謙虚である、謹慎なると同時に謙遜でなくてはならぬ、己を低うし己を虚うし又己を無き物にする事は、之れは懸て信仰を高ふし確ふし又満たしむる秘訣で、高慢と矜りとは信仰の大敵である、無我とは空の謂でない、己を空しくして神を満たすのである、即ち無我有神は吾人が靈の生活の極意である、ネーロが「願はくば神に滿つるものを我に満たしめ給へ」と云つたのも之である、予の經驗を以てすれば、己れの皆無なるを感ずる時は即ち己れの絶大なるを自覺するの時である、己れの空なる時は神に滿つる時である、神己が心に在りて始めて己れの絶大なるを覺ゆるのである、無我は即ち大我にして大我は即ち無我である、大鹽中齋の太虛説も亦此邊の消息を傳ふるものである。

第三の用意は祈禱である、一度天來の信仰其の心に生ずるや祈禱は自然にして生ずるものである、天と我との間の關門徹せられて祈禱は實に己むを得ざるの情となり、己むを得ざるの要求となる、祈禱の經驗なきものは宗教を知らざるものであり、祈禱なき宗教は宗教でない、安心立命の地を得むと欲せば「恒に祈るべし」靜平なる生涯は祈りの生涯である、祈禱によりて神は愈々「我有」となる、"God enters into us"

日々の生活にも静の部分と動の部分とがある、而して吾人は其間に處して一方に偏することなく、動の中に静を觀、静の中に動を觀て以て、靜動二様の修養に熟達せねばならぬのである。

(二)動中靜の修養 に就て先づ吾人の試むべき第一事は靜の心を得、靜の趣味を養成することである、彼のアミエルは冥想の人にして深く其眞義に通じたる人であるが、彼の言に曰く一波揚らざる靜穩なる海は、狂瀾澎湃たる怒濤の海よりも趣味深く、手を拱いて倚子に倚れるナポレオンの肖像は、拳を上げて立てる勇士ハーキユリースの型像よりも意味長しと。

彼の鳶の飛んで天に臻り、魚の淵に躍るは動にして形容盛んなるに似たれども、鳶未だ飛ばざる大空と、魚未だ躍らざる深淵の靜態には無限の趣味が包容せられて居るのである。

都會は動の光景を現はし、田舎は靜の光景を示して居る、詩人ポーブは都會は人の造る所にして、田舎は神の造り賜ふ所なりと吟せしもの、餘韻嫋々として盡きず、吾人をして田園生活の神聖を憧憬して已む能はざらしむる者がある、靜なる田舎の

風景は實に懐かしき風致の極を有して居るのである。

一日の中晝は動にして夜は靜である、試に半夜、獨り郊外を逍遙して、靜に天の蒼々を仰ぎ、地の際涯極りなきを見、此覆載の間に在つて黙して語らざる森羅萬象に對せよ、何人か靜の力が吾人を壓し來つて、感慨措く能はざる心情を熾熱し來るを覺えざるものある。

予は思ふ、靜の趣味を解する人は宗教の趣味を有する人にして、靜の意義を解せざる人は宗教を解するに能はざる人であると、蓋し神は無限の靜中に於てのみ見ることを得るものなればなり、然り而して此靜の趣味を楽しむ人世間幾人かある、冥想に無限の歡樂を感じて、無色の思、無聲の想を追ふて歸を忘るゝもの幾人かある、彼の鳶飛び魚躍るを見て快哉を呼ぶ者、世間比々皆然りと雖も、鳶なき空、魚なき淵を見て其靜觀に心を洗ふもの幾人かある、斯くて動を觀て靜を見ざるもの滔々たる人心の勢をなして居るのである。

加之近代文明の影響は愈々生存競争の勢を激甚し、人類は其生活の爲めに奔命に疲るゝに至つて、倍々靜の修養の必要を加ふると同時に其困難も加はり、人心日に

月に萎微衰頹して、世は無靈無神の悲境に陥るの傾向を現はすに至り、前途を思へば悚然として畏懼すべき者があるのである。

(二) 静中動の修養 前説の如く予は現代に向つて大に動中静の修養を勸奨するものである、即ち静坐瞑想して靈界の妙趣を味ひ、以て醒寤たる人事の動中に静を樂しむの餘裕を存せんことを希望して已まぬものである、蓋し此修養なくば激烈なる現代的競争場裡に立つて苦患と闘ひ、其生存を全ふすることは恰んど不可能の事に屬するのである、彼の薄志弱行の徒等の事に敗れて自殺を企つる者年を逐ふて其數を増さんとして居るものがあるが、是れ即ち動中静の修養を缺ける結果にして、苟も心境に餘裕を存し動中に静を觀する者に至つては、中心別に安定の場所あり時に臨んで不動山の如き態度を持する事が出来るのである。

然れども又静に偏して動を顧みざる者に至つては是れ亦不可なり、斯る輩は静中動の修養の存する所以を悟らねばならぬのである。

人類は働らかざるべからざる運命を有するが故に出来るだけ活動せねばならぬ、人の此世に立つは其努力の貢獻の爲にして、人は働らかんが爲めに世に生れ出た

のである、彼の静に偏して動を忘れたる人を見るに皆之れ死せる人である、虚偽奸譎の横行する世を厭ひて山野に隠れ、獨り潔ふして榮譽利達を雲烟視することは善は即ち善なれども、世舉つて斯くの如き静觀に陥らば、活動はやみ、文明は退歩し、社會は衰頹し、國家は滅亡するに到るや明らかなる事である、之れ我東洋諸國の夙に大古に於て燦爛たる文華を煥發しながら、今や後進なる西洋諸國の開化の後塵を拜し其餘澤を蒙り居る所以にして其原因は、實に此思想の沈衰に由るものである、吾人たる者奚んぞ静中動の修養を唱道せざるを得んやである。

夫れ宇宙は常に活躍す、森羅萬象の新陳代謝は秒時も已む時なし、其動中に静あり、静動兩つながら宜しきを得て、茲に宇宙の完美を發揚して居るのである、人類に於ても尙然り動静二様の修養を経て、茲に初めて理想の人を顯現するのである、而して予は基督に於て此理想の人を見るのである、彼の生涯には最も鮮明に此二方面が描出せられて、事宜に適して發現して居るのを見る、即ち其静の方面を見れば不動山の如く、動の方面を見れば左ながら澎湃として狂瀾の捲くが如し、動の極致は十字架となり、静の極致は「神と一なり」の自覺となり、人類歴史の表面に卓然として

大人格を顯揚して居る。

以上は予が個人に於ける動靜の修養を論述したのであるが之れを論述するに際し、東西文明の相違及其融和に就て一言の論及せねばならぬものがある。蓋し人種的文明の相違は個人の思想に大なる影響を有するものがあるのである。

之れを歴史に徴するに、東洋の文明と西洋の文明とは各特殊の表徴があつて、互に長短を示して居る、即ち東洋の文明は靜より出でて、形而上學の發達を遂げ、西洋の文明は動より出でて、物質的文明の進歩を遂げた。斯くて東洋人の理想は靜となり、西洋人の理想は動となつたのである。故に西洋人は活動方面に長足の進歩をなして器械工業の發達人目を驚かすものあるに拘はらず、靜の趣味甚だ乏しく、東洋人は靜の趣味に富んで、世相の觀察、人心の情念、意氣等に就ては西洋人の意表外に出づる美點を示せども、活動の行爲に缺ゐて居る所があるのである。

然るに交通機關の發達は思想の接近を來し、今や東洋と西洋は一葦帶水を隔つる對岸の境土となれるのみならず、彼我相識るの深さを加へて互に其長を採りて其短を補ふこととなり、茲に東西文明の融和を來らんとするに至つた、而して此大事

業を完成するの責を負ふものは、予は我日本國民であると信する、而して予は予が斯く信するとの僭越ならざること、衷心より信するものである。蓋し日本は東洋文明の粹を最も善く咀嚼し、且數千年に亙りて之れが改善を謀り、適當に之れを保存し來りたる上、近年西洋文明の粹をも輸入し、且之れを自得し、彼我の長短を見て取捨を嚴密にし、既に自から特殊の發展を遂げて新進國の盛名を上げたものなれば、今後我國は世界の先導となりて列國の間に斡旋し、東洋諸國に向つては西洋の動を鼓吹し、西洋諸國に向つては東洋の靜を紹介せざるべからざる次第である。此際我國の宗教は果して如何なる主張と抱負を有せざるべからざるかと云ふに、
即ち

動中に靜を觀し、靜中に動を觀する。

を以て理想とするものでなくてはならぬ、而して吾人は平常其主張として信神、修德、愛隣、永生の綱領を標榜して居るものである。此信神修德は即ち靜にして、愛隣永生は動の發現なれば、吾人は吾人の宗教の本領として、動中に靜を觀し、靜中に動を觀するを以て其神髓として居る者である。

夫れ宗教の二大要素は神と人とである、即ち吾人の語を以てすれば静と動とであつて、此二方面は宗教固有の者である、然るに世間の宗教には静に偏して動を忘れ信仰道を唱へて祈禱と断食を之れ事とし、社會の事の如き殆んど我關せず焉の態度を示すものと、又之れに反して動に偏して静を輕んじ行爲道を唱へて社會救済の善行を以て、宗教の本體となせるものがある、彼の參禪者流の徒は稍や前者に近きものにして米國のゼームス教授の如きは、其後者の一人である、前者は座禪瞑想して世上一切の出來事を夢想視し、假ひ落雷堂に振動するも聽かざるもの、如くならんとし、後者は基督の主意を以て此世に神の國を建設するにありとし、此社會を改善するの外基督教の主張はないとして神祕の信仰を輕蔑して居る、如此は共に吾人の眞宗教とせざる所である、吾人が仰で以て眞宗教とする者は、此静と動との兩様の方面を具備し、且其權衡宜しきを得たるものにして、「デイヴニチー」と「ユーマニチー」の二大精神を完全に主張したる者である、斯る宗教は東洋人にも西洋人にも満足を與へ、且つ彼等を活かしむる道である。

予は斯く信ず、宗教の「テスト」は萬人に満足を與ふると否とに存すと、故に學者にも無學者にも、男にも女にも、西洋人にも東洋人にも満足を與へ得る者、是れ即ち完全なる宗教にして、換言すれば人間凡ての要求を満足し得るものにあらざれば完全なる宗教でないのである、吾人は唯り此道を以て萬人を救済し、又世界の思想を統一することが出來ると確信するのである。

進化と退化

予が常に主張して居る、信神、修徳、愛隣、永生と云ふ事は、言を換えて云へば、人格の進化即ち人間性格の向上と云ふ事である、然るに世間一般の有様を見れば、此向上進歩を期する人は稀であつて、墮落退歩に陥る人のみが多い、沈倫に至る路は濶く、その門は大なり、此より入る者多し、生命に至る路は窄く、其門は小さし、其路を得るもの少なしとは實に名言である、予は茲には此二つの門、即ち進化と退化に就て論じて見ようと思ふ。

人間と獸類との差異 人間は自ら萬物の靈と稱して威張つて居るが、一體人間と獸類とはどれ丈の違ひがあるか、人の人たる所以の特質は何であるか、動物學者は

約十三箇條の差異を擧げて、動物學上から人間と獸類とを區別して居る、例へば獸類は四足であるが、人類は直立して歩んで居る、獸類には頤が無いが、人間にはある、獸類は笑ふ事が出来ないが、人間は出来る等、數へ來らば種々違つた點がある、併し若し人間と獸類との差が此等動物學上の差異に過ぎないとしたならば、人間もアツケないものである、直立して歩けばとて何であるか、頤は爾く誇るに足る者なるか、吾人が若し笑ふ事が出事なければ直ちに獸類と同列に下らなければならぬか、果して然らば人獸の差は只五十歩百歩に過ぎない、大して威張る程のともない、人間が若し眞に萬物の靈であり、根本的に獸類と其種類を異にするものとすれば、人は更に高尚なる、更に著しい、争ふべからざる特質を有して居なくてはならぬ、而して茲に述べんとする進化及び退化こそ、予は實に人の人たる特性であると思ふ、獸類は永遠に獸類である、進化と云ふ事もなければ退化と云ふ事もない、千年前の猫も今日の猫も更に異なる所はない、猫が進歩したと云ふ事實もなければ、墮落したと云ふ話も聞かなひ、何時も同じ状態に停滯して仕舞つて居るのである、之に反して人には進化及退化の能力があつて、其状態は一定不變のものでない、人間の相場

は斯く几帳面に極り切つたものでなくて、常に上に向て進化するか、或は下に向て退化するか、決して同一の處に留まる事の出来ないのである、人は自ら下に向ふときは無限に墮落する事も出来るものであるが、又一度上に向ふときは則ち無限に進歩し向上して恰んど其極まる所を知らざる絶大なる能力を具へて居るものである、此點に於て吾人は嘗に獸類と其性質を異にするのみならず、其種類を異にするると云ふ事が出来るのである。

茲に進化及退化と云ふのは、人間性格の進歩及退歩を指すもので、孔子も、君子上達小人下達と云はれた通り、吾人は何時でも進歩か退歩か、向上か墮落か、必ず其一に居るものである、吾人は窄き門より入らなければ、則ち廣き門より入らなければならぬのである、生命に至る路を歩かなければ、則ち沈倫に至る路を辿らなければならぬのである、然らばこの兩つの路は如何なる路であるか、之に至るの方法は如何すればよいか。

人間性格の進歩 人間は唯外に向つて萬物の靈長と稱せられて居るのみならず、内に於て高貴なる性格を有する者とせられて居る、成程人間は高貴である、併しそ

れは如何なる意味に於てあるか、目を擧げて見れば世間滔々として利慾に走り、腐敗墮落、殘忍暴虐、一切の罪惡充ち滿つる者即ち人間の社會である。斯る現在の人間は何で高貴であるか、若し今日の人間が人間の標本ならば、人間が何で高貴であるか、吾人は今日の儘の人間を貴ぶことは出来ない、今日の人間は未だ人間と稱するにも足らぬ、たゞ人間の候補者に過ぎないものである、然らば斯の如き取るにも足らぬ吾人人類を高貴だと云ふのは抑々何故であるかと云へば、前にも云つた通り、人は無限に進歩し向上するの大能力を有して居るからである、人間はこの實に偉大なる可能性(ポシビリチー)を有して居る者なるが故に、何處へまでも進歩し、發達し、成長して真人即ち理想の人となる事が出来、且進んで神ともなり得るの能力を有して居るのである、即ち我等の心の中に存する神性ゴッドナイチは即ち之である、左れば今日の人間の貴いと云ふのは、其現狀に就て云ふのではなく、此「ポシビリチー」が貴いと云ふ譯である、神は此能力を一切の禽獸に賜はらずして、獨り吾人々類に授けられたのである、神はこの偉大なる賜物を以て人間に無限の光榮を加へられたのである、して見れば吾人がこの神恩を感謝し、この神意を完うするの道は自ら明か

である、即ちこの能力、この神性を發揮して益々人格の進歩に努め、何處々々迄も向上しなければならぬのである。

然らば人格向上の道如何と云ふに、第一心に神を存る事である、世には神を認めずして唯所謂克己復禮の人意的工夫を以て修養の能事了れりとする者があるが、そんな小刀細工では、勞力のみ徒らに用ひて効果は却て少いのである、神を理想とし、神に頼り、神に親炙して神に同化するでなければ眞の修養は出来ないのである、ポロの所謂「新しき人は愈々新になりて、人を造りし者の像に従て智識に至るなり」とは即ち此有様を謂つたものである、而して茲に新しき人とは神を認めて精神的に復活した人を謂ふのである、予も勿論修養に重きを置けども、吾人の主張する修養は信神に基く修養にして、宗教に基かざる修養は、浮草の根なきが如く、理想なき修養にして無限無窮に人格を發達進化せしむる事は到底出来ないのである。

第二には愛隣の行爲を現はすことである、如何に修養を積むも愛隣の行爲の之れに伴ふ者なくは駄目である、大學の語を借りて言へば、修養とは明德の事、愛隣とは親民の事で、此二者は車の兩輪の如く兩々相俟つて離るべからざるものである、愛

隣の伴はざる修養は空である、修養の根底を有せざる愛隣は虚である、修養は愛隣によつて始めて完く、愛隣は修養を俟つて活動するのである、人類の爲め、社會の爲め、國家の爲め、隣人の爲めに働く事によりて、人の性格は益々善となり、益々美となり、益々大となるのである、米國のシカゴに「ハル、ハウス」と云ふものがある、此れは社會改良運動の中心であつて、社會殖民事業の本部であるが、之を經營して居る館主ミスアダムスと云ふ婦人は、予が從來面會した人の内の最も高貴なる人の一人にして、恰んど斯の如き高貴なる人物は、見た事がないと稱しても不當でないと思ふ程高い性格の婦人である、周圍の貧民は同女を殆んど神の如く敬愛して居る、此婦人はクリスチャンであつて、信仰の基礎の上に修養の徳を積み、且つ愛隣の事業に身を捧げて益々其人格を研いて居るのである、其性格の高貴にして殆んど善美を極めて居る事は怪しむに足らないのである。

更に基督の人格を見よ、約翰は彼を評して、其榮えを見るに、實に父の生み給へる獨子の榮えにして恩寵と眞理とに満てり」と云つて居る、彼れの人格の高貴なりし事は争ふべからざる事である、吾人は多くの人々の如く基督を神とする事は出來な

いけれども、彼等が基督の高貴なる人格の光に接して嘆美の餘り之を呼んで神なりとするに至つたのは無理ならぬ事であると思ふ、基督の徳と人格とは即ち信神、修徳、愛隣の力によつて造られたるものなる事は、苟くも新約聖書を繙いた者の皆能く知る所である、此徳ある人は自ら永生をも有して居る、即ち永生の人である、之を要するに人間性格の進化は、予が平生主張する信神、修徳、愛隣、永生の四箇條によりて得られるのである、基督の如き高貴なる人格も、皆この四ヶ條の結果である、然れども、吾人々類の特質たる進化の能力たるや、決して基督を極致とするのではない、吾人の能力は無限である、我等は基督よりも尙大なる事をなし得るのである、限りなく進歩し、限りなく發展し、限りなく成長すべきものである、人間性格の退歩 人間は斯く無限に進化し得ると同時に、又無限に退化し、無限に墮落し得るの能力をも有して居るものである、人の心は「神性」を宿すと同時に又「獸心」をも存して居るのである、故に吾人若し此神性を放棄して、只此獸心の働くに任ずるときは、人は限りなく墮落して獸類以下にも退化するものである、人の進化の能力が偉大なる丈けそれ丈け退化の能力も怖ろしい。

人若し墮落しようと思へば、先づ神を斥けて「己れ」を拜せよ、修徳を廢して肉慾に耽れ、愛隣を止めて利己をこれ事とせよ、人間墮落の道は此三者に存するのである、彼の奈落の底の測り難きが如く人間墮落の限りも分らない、かく墮落の淵に沈む者は何等獸類と擇む所なきのみならず、實に禽獸にも劣る者たるを見るのである、予は嘗て桑港の暗黒界たる支那街チナタウンに入つて實に驚いた事がある、其處は白人の賤業婦等の巢窟にして、彼等の行爲は左ながら肉慾の餓鬼である、又彼の守銭奴輩の人間獸心的なる行爲を見ても人間ならで他の動物の決して企及し難き惡行爲を爲して居るのを見るではないか。

嗚呼吾人はかの光榮ある進化の途に上らなければ、則ちこの慘憺たる墮落の淵に落ちなければならぬのである。
進化と退化、其孰れを撰むべき乎 滔々たる天下相率ゐて廣き門より入り、滅亡に至るの路を歩みて窄き門より入る者少く人格の進化を期する者は殆んどなからんとせり、故にアミエルは人生を評して A birth, a vanity, a nothing (出生、虚榮、滅亡) と云つて居る、然も吾人は之れに甘んずべきでない、吾人たるもの須らく進化の途に上

りて A birth, a growth, an eternity (出生、成長、永生) の生を送り無限に向上成長して限りなき生に至らんことを期せねばならぬ。

刻々主義

「今」といふ語は深長なる意義を包有する語にして、之れを解釋する時は少くも二個の大なる意義の宣揚せられて居るのを見る。
第一義は何事を爲すにも直ちに之れを爲して決して後に延ばすことなき意にして、所謂思ひ立つ日を吉日と定め、眼中に明日を容るゝの猶豫を存せず、即意、即決、即行する謂にして、處世上最も大切なる心意の發表である、嘗つて某君は此意義を「即刻主義」と譯して爲めに大に氣焰を吐かれた事があつたが、予も貴重なる主義として其命名を嘉賛する者である。

第二義は一層深く一層貴き意義にして、此今の瞬間を我全生涯と尊視し、此瞬間を最も富麗に又最も充實ならしめて以て、吾人の生涯の内容を堅實ならしめんとする者である、而して予は之れを稱して刻々主義又は刹那主義と名け予が抱懐せる

人生觀の發表として、由て以て人生解釋の鍵鑰とせんとするのである。

由來時間は之れを哲學的に觀察すれば大なる謎であつて、アミエルの之れを以て人間最大の迷信なりとして居る、畢竟吾人の過去、現在、未來と稱する者は、有限なる吾人人類の思想の形式にして、過去なる特別の時間の存在せしにもあらず、未來なる別種の時間の來らんとする者あるにもあらず、夫等は唯過去りたる現在、來らんとして未だ來らざる現在を、目前遭遇の現在に區別したる名稱にして、此目前遭遇の現在のみ永遠に吾人と共に存するのである、之を譬へば大なる圓球を見るが如く、其吾人の眼に映する表面は僅に圓球全體の一小部分に過ぎざれども、其廻轉に連れて表面又表面交々吾人の眼前に現れ來りて、終に吾人をして其全圓球を會得せしめ、其眼前の部分は僅に一小部分に過ぎざるを知らしむる如く、時間も主觀的には過去、現在、未來と區別し能ふと雖も、客觀的には單り現在に接し得る計りである、吾人は思想の習慣上過去、現在、未來を以て、恰んど自明眞理の如く疑念を挾む餘地なき者と思惟すれども、之れ等は一種の幻影に過ぎずして、飛雲の大空に去來する時月の走るが如く、汽車の山中を駛走する時、森林巖石の後方に向つて飛去するが

如く共に其實相でない、是れ有限の人類には過去、現在、未來あれども、絶對的存在者なる神に於ては唯現在のみ存する所以にして、即ち神は永遠の現在に住み玉ふのである。

以上は哲學上より觀察したる議論なれども、之れを人類の實際に徴するも尙ほ同一の結論に歸着する事を認むるのである、吾人々類の生涯には年處に従つて感想を異にする者あり、生涯を通じて同一感想に居る事は出來ぬのである、此感想の輾轉する間に全生涯が現出し來たるのであるから、老齡到れば多恨生じ、青年期には將來を思ふて煩悶し、兒童の際には無心に嬉々として現在を樂むのである、而して予は此兒童の悅樂に充てる日常の働作を見る毎に、彼等は無意識の中に人生の眞意を得たる者として欽慕の念に堪へぬのである。

蓋し人間の生命は現在のみ、過去は逝きて又還らず、將來は永遠に我目前にあれども我前には到らず、我生涯の存する所唯「今」の瞬間を越ゆる事能はず、此刹那の秒時以外吾人は何處にも吾人の生涯を發見し得ぬのである、而して茲に吾人の最大教訓は存するなり、即ち此瞬間の刹那なる現在に於て全心、全靈、全力を擧げて吾人の

「ベスト」を爲し、此刹那の秒時の内容を尤も豊富に、尤も充實に、又最も堅確にする事によりて吾人の人格を向上して行くのである、而して之れが吾人の大修養にして、應て天則に合へる生活であると思ふ。

神は現在に活き玉ふ、吾人も亦現在に活くべきにあらざる乎、而して茲に真人の生活は存し、又之れによりて神人の真相は發現するのである。

予が刻々主義は則ち此刹那の活用を高調するものにして、吾人が唯一の存在なる此現在を尊重し、此時間に於て全心を傾注して人格の理想に達せんが爲めに努力し、全力を擧げて「ベスト」を「ヒューマニチー」に致さんことを期し、以て吾人の生を豊富ならしめんとするのである、左れば吾人は其食ふ時は餘念なく食ひ、眠る時は餘念なく眠り、働らく時は餘念なく働らき、遊ぶ時は餘念なく遊び、時と場合に處して苟も散漫なる惰氣を容れず、一味の涼風に神氣爽かなる境涯を我生となさんとするのである、而して此境遇や奮闘にあらずして幸福なり、煩悶にあらずして慰安なり、吾人にして此境域に達せんか人格の光輝燦然として現はるゝのである、夫れ人生は美妙なる意義を發揚して居るもので、如何に些細なる經驗の中にも、之

れを究むれば其奥底には珠玉の至寶を藏して居るものなれども、吾人の興味なる徒らに淺薄輕躁なる旦夕を送迎して居るものから、此人生の至寶を發見し得ず、従つて其高貴なる趣味をも解する事能はずして、空しく天地に充滿せる幸福を逸して居るのである、掘れよ、掘つて其深所に至れば、涙の露も凝つて水晶となれる所あらん、悲哀の中にも歡喜あり、苦痛の中にも慰安ありて、萬象樂天の譜を奏し、天地自から陽春の氣を漲らすを覺ふる事あらん、安心立命即ち茲にあり、基督が「爾曹生命のために何を食ひ何を飲みまた身體の爲めに何を衣んと憂慮こと勿れ、生命は糧よりも優り、身體は衣よりも優れる者ならずや——爾曹の内誰れか善く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや——」此故に明日の事を憂慮なかれ、明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり」と云へるもの、最も明白にこの刻

刻主義を表明し且教戒して居るのである。
近時我國に於ても生存競争漸く激しく、貧富の懸隔倍遠ざかるに連れ、生活難の聲囂々として人心爲めに煩悶し、社會の生氣沈衰して又昂らざるもの甚だしきより、所々に煩悶者慰藉を以て任ずる篤志者の輩出を見るに到つたが、予は人類が此根

底的自覺を得るにあらざる限り、煩悶は終に根絶し得べき者にあらずと思ふ、蓋し現在に活る者は此自覺によりて大安心に悟入して心中更らに恐怖なく、生死共に其真諦を得るが故に、朝に道を聞て夕に死すとも可なりとなし、彼の生死の際に狼狽して恒心を失ふが如き醜態を演ずる者でない、故川田博士は篤學の聞高き名士であつたが、博士は其遠逝の數日前迄、身の將に他界の人たらんとすることを知らざるものゝ如く、孜孜として英語の研究に耽溺せられしが如きは實に味ある事實であつて、刻々主義の人ならでは善くすべからざる逸話である、網島梁川嘗て曰く現在の一瞬間を幅に於ても、長さに於ても、深さに於ても、最も富麗なる又充實なる者として生活し、以て永遠と最も多く觸るゝ者は、是れ即ち不朽の生活なりと、梁川の解釋は予の衷心より同意する所にして、見神の意義は此所に存して居るのである、吾人が靈なる神を見ると云ふとは、人生の眞義に徹底の觀察を下し得て後、初めて自覺し得る者である、蓋し神は吾人の前にあり、後にあり、又萬有の内に遍在し玉ふが故に、刻々主義の實行者は事物の到る處に於て、其顯現に遭遇するのである、故に或は神の御裾に觸るるとあるべく、或は御手に觸るゝとあるべく、又或は御顔を拜す

るともあるべし、兎に角刻々主義は人世を通じて神明に到らしむる公道である、基督曰く「我來るは爾曹をして生命を得且之れを豊かならしめん爲なり」と、予は基督に於て此刻々主義の理想的人格を見、又之れに師事することに由りて滾々として盡きざる修養の泉の湧出することを覺ゆるのである、

隠れたる生涯

予が爰に言はんとする隠れたる生涯とは、世を捨て、深山幽谷に閉ぢ籠り、仙人的生涯を送る謂ではない、成程時に我等は人生の無常を感じたり、或は人情の頼りなきを感じたり、又或は世の墮落に愛想をつかしたりする時は、何となく人間社會がイヤになり、ヒマラヤ山の奥にでも隠れて生涯を送りたくなることもある、然れども是れ決して健全なる思想でなく、又た高尚なる感情でもない、予は極力此種の厭世的觀念に反抗を試むる者である、

又た茲に言ふ隠れたる生涯とは、無名の英雄を氣取つて社會の一隅に隠れ、人々に知られざる隠君子的生涯を送るといふのでもない、成程世には沽らん哉、沽らん哉

と叫び、頻りに世に己を廣告して居る陋劣なる人物がある。斯る斗背の小人共が互に競ひ争ふ世の有様を見ると、時に我等は口を緘して無言の人となり、寧ろ無名の生涯を送りたくなる。「こゝに美玉あり匿に韜めて之を藏す」と云ひ、又た「金を山に藏し珠を淵に藏す」といふ如き人物の方が、誠に奥床かしく遙かに尊敬に價すと思ふ。然し予が謂ふ隠れたる生涯とは、自ら己の才幹を藏して世に背く意味でない、モット深い、モット貴いモット大なる意味の生涯である。

使徒保羅の言に「それ汝等は死にし者にて、其生命はキリストと偕に神の中に藏れ在るなり」とのことがある。此の言葉によつて代表せらるゝ思想の中には、猶太人としての癖見も多少ないことはないが、又た其中に高尚なる宗教的實驗より出たる感想が言い現はされて居ると思ふ。予が謂ふ隠れたる生涯とは保羅の此の感想と意義相通するのである。即ち心意の奥底に於て、神と交り神と語る、神聖にして平靜なる境涯を恒に心に有することである。一言以て之をいへば Life with God である。Life in God である。

基督の生涯を見て予が最とも感ずる所は、四面楚歌の間に立ち、波瀾極まりなき生

涯の中にありながら、彼は常に其心の奥底に於て、神と偕に最も静かなる生涯を送り得た一事である。彼には確かに二個の生涯があつたと思ふ。其一は何人の目にも觸るゝ現はれたる生涯にして、其の二は何人も窺ひ知ることを得なかつた隠れたる生涯である。「我には汝等の知らざる糧あり」と云ひ、「我は父に居り父は我に居る」といひ、又、父の外に我を知る者なし」といふ此等の語は皆基督の内的生涯の消息を洩らしたるものにして、聖書の所々に散見する所なるが、斯る實驗は吾人の生涯に最も必要な經驗である。世界を離れ人事を超越した境涯——親も子も夫も妻も如何なる人も、如何なる事情も侵入するとの出来ない境涯——である。即ち唯一人「神と偕に交り、神と偕に語り、神と偕に居る境涯を心に有つて居らねばならないのである。此の人にして始めて動中に静を觀じ、變化の中に不變の心を有することが出来るのである。此の人こそ身は凡俗の中にあるも、心は仙境の裡に在る人にして其の人格には言語に盡し難き床しきものがあるのである。而して予が隠れたる生涯とは、此種の人の心事をいふのである。

神と偕に醒め、神と偕に樂み、神と偕に立ち、神と偕に行き、神と偕に進む、此の内在の

生涯を自覺する者は、外界の事情によつて心を動かすことがない、假令ひ貧苦疾病等其身に迫りて、外なる人(肉體)は壞るゝとも、其内なる人(心靈)は日に益々新なるを得て、保羅の如く「我は寧ろ我が弱きを誇らん」との勇氣を生じ來るのである、交友の誤解によりて不測の怨恨を購ふ事は、人生悲惨事の最たるものに屬し、實に斷腸の感に堪えざる者なれども、然も内に修養あれば斯る際にありても尙善く堪へ得て、其心中に光風霽月の餘裕を存し、敢て動かざることを得るのである。

○最高の生活

人間を分類するのに或は國籍、或は人種、或は言語の相違等によつてすることがあるが、これは人間を外面から觀察した分類法であつて、極めて皮相的にして之れによりて人間の眞價値を判することは出來ないのである、國籍とか人種とか言語とかいふことは所謂偶然の情況であつて、之によりて髮膚の區別を判することを得るも性格の高下を論ずることは出來ない、畢竟此等の區別は人間の分類上便益を與ふる標準たるを得れども、道德的には全然意味なきものである。

人間を分類して其高下を評定するには、其内部の状態即ち心的生活の如何に頼らなければならぬ、是れ道德的分類法であつて神の目に映する人間の區別である、而して今日の人間を心的生活の上より觀察するときは、確かに左の五個の階級があると思ふ、

- (一)物生活
- (二)獸生活
- (三)人生活
- (四)神生活
- (五)某生活

今此の順序によつて予は今日の人間を評論し、人間最高の生活を説いて見よふと思ふ。

(一)物生活——アミエルは言ふ、今日の世間の人々は、人間の候補者にして未だ人間てふ尊稱に價せず」と眞に名言である、人は皆莊子の所謂真人、至人となり得るの可能性を有つて居れども、天下多數の人は未だ向上發達して其域に達して居らない

のである、而して就中予がいふ物生活を營んで居る者が最も多い、去れば物生活とは何ぞと云ふに、大鹽中齋は「心不歸乎大虛、則實理埋沒了、與物不異」といふて居る、彼の説によると、人は大虚に歸すれば人間となるを得るので、大虚に歸せざる中は人でなく、一種の器物であるとの論である、若しこの大虚なる者が神の別名であるならば予は全然中齋の議論に賛成するを憚らないのである、世には人にして人にあらず一種の機械器物同様の生活をして居る人が多い、人と生れて人たるの自覺を有つたことなく、又た曾て人生の眞意義に觸れた経験もなく、何等の信仰も持たず、何等の理想も抱かず、漫然日夕を送迎して居る者が極めて多い、此等は起きて喰い、喰ふて働き、働いて眠り、同じルーチン(常務)を繰返へし、て無意味の生活を過して居るのである、彼等の生活は機械的で、其人格は「物我」とでも云ふべきである、彼等は人にして人にあらず、其本體の所在を失したる實に憐むべき最下等の人間であると云はねばならない。

(二) 獸生活——物生活の上に獸生活がある、物生活の人が憐むべきであれば、獸生活の人は恥つべき人間である、予がいふ獸生活の人とは孟子の所謂物慾に耽溺せる

人である、聖書の語を以て云は「肉の人である、凡て肉慾情慾の奴隷となりて得々たる人、功名富貴を追求して役々たる人、醉生夢死の中に擾々たる人、皆是れ獸生活を營む人々である、斯の種の人々の内には、時に國家社會を益する偉功を奏する者もあるが、然し其動機を窺へば賤むべき利己的野心の潜める者あるを認めざるを得ない、其外に現はるゝ功績は大なるにもせよ、其内に隠るゝ意志は獸的たるを免れない、凡て利己情慾の念慮を超越し得ざる人は、其行動如何に美なるも善なるも、矢張り獸生活の人と稱せざるを得ないのである、大鹽中齋又曰く

夫古今之英雄豪傑、多從情慾上做來、從情慾上做來、則雖驚天動地之大功業、要夢中之技倆而已。

古今幾千の英雄も此評を聞かば歴然として言なかるべし、英雄豪傑を欽慕する今日の青年の最も戒むべきは情慾の上より做し來れる、所謂「英雄の此心である、其心や則ち獸我である、獸我は勿論物我に優る、然れども獸我に支配せらるゝ者は未だ人にあらず、況んや理想の人に於てをやである、修養一番以て獸的生活の境涯を脱出しなければならぬ。

(三)人生活——物生活の上に獸生活あり、獸生活の上に人生活あり、人生活とは何ぞ、利の爲に屈せず、慾の爲に曲げず、徹頭徹尾良心の命を之れ奉じて行動せんとするの生活である、君に忠、親に孝、友に信、日夜孜々として道德的生活を送らんとする努力の生涯である、儒教の本領は則ち此人生活を教へたるものにして、孔子は則ち人生活の良模範である、物我の夢より醒め、獸我の羈絆を脱脚して人我を自覺し、其完成を企圖するに至つて人實に敬ふべき人である、然れ共是れ人間としては當然の生活にして、凡て人と生れた上は何人も皆之を自覺する筈のものである、獸類が道德的自覺を得來つて人生活に入らば、是れこそ不思議にして驚嘆すべきであるが、人類が人類の本性を發揮して其當然營むべき道德的生活即ち人生活を完ふすればとて更に驚くべき筈のものではない、然るに滔々たる天下多数の人々が人以下の生活を送つて居るが爲めに、偶々道德的生活に努力する人あれば、甚だしく彼れを崇めて或は聖人と呼び或は賢人と稱して賞讃するのであつて、實は斯く賞讃すべきことでもなく、又驚嘆すべきことでもない、人間當然の事にして普通の人のなすべきことである、畢竟聖人の生涯は凡人の生涯にして、決して人間最高の生活といふに價しないのである。

(四)神生活——然らば人間最高の生活は何ぞと云へば、道德的生活を超越して宗教的生活に入り、人生活を越へて神生活に入り、人我の自覺を解脱して神我の自覺を得たる生涯である、人此境涯に入れば我は唯神の靈を容るゝ器なるを自覺し、我が凡ての動作は我之をなすにあらず、我裡に在ます我ならざる者之をなし賜ふの意識を得、遂に無我の生涯に入るのである、宗教の妙趣は蓋し此處に存するのである、*アシムル*が此の境涯に入つた時の自白は實に何とも云へぬ深い文字である、*I feel most strongly that man, in all that he does or can do which is beautiful, great, or good is but the organ and the vehicle of something or some one higher than himself. This feeling is religion. The religious man takes part with a tremor of sacred joy in these phenomena of which he is the intermediary but not the source, of which he is the scene, but not the author, or rather, the poet. He lends them voice, and will, and help, but he is respectfully careful to efface himself, that he may alter as little as possible the higher work of the genius who is making a momentary use of him. A pure emotion deprives him of personality and annihilates the self in him. Self must perforce disappear when it is the Holy Spirit who speaks, when it is God who acts.*

神生活とは則ち斯る心情を意味するのである、我等時に斯る意識を有ち得ることなきものにあらざれども、何時しか世事勿忙の間に埋没し去られて此心を持続することが出来ない、唯修養を積んで之れを常住不斷の心情となすのである、而も是れが我等の理想である、比較的多く之を我有となし、其生涯に渡りて之を實現したるものは使徒保羅であつた、我最早や活けるにあらず基督我にありて活けるなり」といひ、「我は我が弱きに誇らん蓋我弱きは神の強きの顯れん爲なり」といひ、「我此寶を瓦器に藏てり、是れ大に優れたる能力は我より出づるにあらず、神の能力なることの顯れん爲なり」といひ、「我等の中に行ふ能力に従いて我等の求むる所、思ふ所よりもいたく過ぐれたることをなし得る者に限りなく榮を歸せん」といひ、「我は我に能力を與ふる者によりて凡ての事を爲し得るなり」といふ、此等の語は確かに彼が神生活に居つたことを表證するに足るのである、然れども最も完全に、最も圓滿に神生活を實現した者は基督であつた、父我に居り、我れ父に居る、我を見し者は父を見しなり、父と我とは一つなり」とは彼が神生活の意識を最も鮮明に表證して居る所である、彼れこそは全く神の靈に身を委ね、其示導のまゝに動きて世に神の旨を

行ひし人である、嗚呼我等も亦彼の如く神に合し、神の中に没入して全く自我の意識を忘れ、八面玲瓏の生涯を送りたいものである、而して斯くの如き生涯は人間が此世に於て達し得る最上最高の生活である。

(五)某生活——神生活の上に尙ほ一段高層の生活がある、予は何と命じて名の適當なるかを知らざるが故に茲に某生活と稱す、一種不可思議の境涯である、其境涯は今日の我等人類が窺ひ知る能はざる所である、然し吾人の信仰は此境涯あるを想像することが出来る、元來人間の生命は不可思議中の不可思議にして、其始は何處から來たか、其終は何處に到るか、永遠のミステリーである、僅に臚に心眼に映する所は人間最後のデスチニーは神に歸るにありと云ふ事である、ポーロもいふ、神より出で神に倚りて神に歸ると、此の神に歸つた境涯は哲學者が如何に考へても考へ盡くすことの出来ない所、詩人が如何に感じても感じ盡くすことの出来ない所、則ち宗教的意識の味ある領分にして、神祕的信仰の實在となす所である、夫れ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を眞實とするのである、故に予がいふ某生活を強めて古人の語を以て云へば莊子の所謂「大妙」である。

一年而野、二年而從、三年而通、四年而物、五年而來、六年而鬼入、七年而天成、八年而不知死不知生、九年而大妙。と極致の幽玄は瞑して想ふべく説いて云ふべからず。

活宗教の特色

基督教にも佛教にも自由派進歩派など稱して合理の宗教を唱道し、自から高しとするものがあるが、予を以てすれば此等の宗教は却て最も宗教らしからざるものである。蓋し自由基督教と稱し、又自由佛教と唱ふる自由主義の宗教は、重きを教理の討究に置き、常に科學的研究の態度を以て宗教を研究せんとするものにして、具體的の宗教にあらず。所謂血あり肉ある宗教の精髓を疎外して居るもので、元より人を「インスパイア」する力がない、即ち死宗教にして活宗教でない。

由來宗教は哲學にあらず、理を以てのみ研究すべからず、之れに生命あり、此生命は萬物の本源にして萬象生動の實相である、又單に道德にあらず、倫理を以て其旨と

せず、之れに「インスピレーション」あり、人心に靈活して其靈能を發揮せしむ、故に宗教にして此生命なく、此「インスピレーション」なくば、鳴る鐘や響く鈸のみ、以て宗教と稱するに足らないのである、果して然らば活宗教の特色如何、是れ予が茲に指摘せんとする所である。

(一)神祕的信仰 活宗教の第一特色は其信仰の神祕的なる所にある、元來宗教は無限の神祕を包めるものにして、或る點迄は推理の追究を許せども、到底理解の及ばざる境涯ありて、遙かに人智を超越せる所がある、而して茲に其本領を置ける宗教は古來知識萬能主義の容るゝ所とならずして、所謂學術と宗教の衝突なる奇現象を現はし、今に至る迄物質學者の猜疑を購ふて居る次第である、然も見えざる神は無限に見えざるなり、物的見識によりて靈的消息を解せんとする事は、之れ木に縁つて魚を求むるものにして、既に其基因に誤謬の存して居るのである、是れ靈の事は靈によつて知るべく、肉の與り知る處にあらざる所以にして、靈的經驗なる宗教は靈的修養の人を俟つて始めて解することの出来る理由である、蓋し理觀の神には神祕なく、神祕なき神は神にあらず、吾人の信する神は無限の神にして、有限の理

性を以て究め盡くし得べきものにあらざればなり、茲に於て吾人は神祕の必然なる存在を見るのである、而して人間の宗教的本能は此神祕を要求して居るのである、彼の莊嚴なる殿堂や森嚴なる儀典は、皆此神祕の要求を發現したるものである、「夫れ信仰は未だ見ざる所を眞とするものなり」と、吾人の宗教的生命は此信仰にあり、即ち吾人は此信仰によりて活き且つ動き且つ在ることを得るのである、此未見の認識は大なる神祕にして直覺作用の發現である、斯くて吾人は理性によりて神を解せず、直覺によりて神を知りしものである、我靈彼の靈に感じ、彼心彼の心に通じ、神と我と終に一なるに至つたのである。

然るに今の自由基督教、又は自由佛教などを唱ふる所謂進歩的宗教家は、此神祕的信仰を蔑みし、只管唯理に走りて合理的宗教を高調して居るが、吾人の立場より云へば斯くの如きは宗教の本領を没したるものにして、宗教の名あつて其實なきものである、蓋し宗教は其合理的ならざる所に玄妙の價值を發揮するものにして、所謂目以て見る可らず、耳以て聞く能はず、人の心未だ思はざる不思議の事實の、理解力の達し能ふ境涯を超越したる所に妙趣を湛へて居るのである、而して此境涯の

妙趣を悟と云ふ即ち神祕である、基督の心境、マホメットの心境、釋迦の心境、皆此悟にして、吾人は此大悟の内に絶妙の感興を起して日々追慕して已まぬのである、左れば吾人を以てせば此感興なき宗教は、唯淋しき宗教の幻影に過ぎぬのである。

(二)權威ある信仰 活宗教の第二の特質は權威である、基督が大宗教を體して世に現はれ「悔改」の大道を説くや、人々其教を聴きて驚き互に評して曰く「彼は學者の如く語らずして權威ある者の如く云ふ」と、是れ實に宗教家の態度を道破したるものにして宗教の特性である。

嘗て一友と語る、友嘆じて曰く今日の宗教家を昔日の宗教家に比するに、智に於て優る所あるも威權に於て甚だしく劣るものありと、予も亦同感に堪えぬのである、而して奇恠にも口に自由進歩を唱へ智識に於て一日の長ありと自稱する輩に於て、特に權威を缺く者あるを實見するのである、彼等の言説は常に「デアロウ」「デアアルマキカ」「ダト思フ」的の口調を帯び、何となく齒切の悪い不確實なる信念を表明して居るのであるが、斯る宗教に威權や權能の存する筈はない、彼等は學者を以て任せるが故に、學者の如く説けども威權ある者の如く教えぬのである。

予は昔時猶太國に輩出したる豫言者の壯烈なる態度と、森嚴なる信念とに對して大なる尊敬を拂ふ者である、彼等は智者にあらず、學者にあらず又王侯貴人にもあらざる、教育なく、爵位なく、金錢なき常人なりしかども、一度天の使命を自覺するや、冒すべからざる權威を以て世に臨み、其民の従はざるを見るや、晴天の霹靂に百雷の落下するが如き怒を發し、人をして畏怖して戰慄せしむるものがあつた、テニソンが嘗て宗教的靈覺を得て世に起ちし時、カーライルはエマーソンに書を送りて云へる事あり、曰く今日我英國に於て特筆大書すべき事は、實にテニソンの宗教的活動にして彼は今の世の腐敗と罪惡とに對して神の怒を以て起てる者なりと、世には時代の墮落を慨き、民心の腐敗を憂ひ、之れが匡正に任する志士あり、慷慨悲憤して爲めに家を忘れ妻子を顧みざる誠意誠に欽仰に堪えたるものあれども、然れども未だ人の良心を衝き、世の罪惡を責め、人の靈魂に威令するの權威を振ひ得ることとは彼等の終に爲し能はざる所にして、此等の事は宗教的自覺により、神と共に愛へ、神と共に怒り、神と共に叫ぶ者のみ善く爲し能ふ所である。

此權威は宗教の一大特長にして、宗教の本領を有するもののみ之れを有し、作爲の宗教の與り知らざる所である、是れ予が平素人類の理性を尊重し、苟も理性の容れざる所は之れを排棄するに於て人後に落ちざるものなるに拘らず、唯り宗教に於てのみ合理的倫理的と稱して人智を以て宗教の奧義を究めんとする、所謂進歩的宗教者流を厭忌する所以である。

(三)有難味ある信仰 活宗教の第三特色は其有難味ある處に存す、嘗て「新日本誌」上に島田三郎氏が「保護事業」を評論せられた中に、「有難味や零也」と云はれて居つた、當時予は密に以て進歩的宗教に對する適評として居つた、彼等の説話は條理整然、義明瞭にして、聽者をして恍惚として其説く所に心酔せしむる底のもの者あれども、些の景仰心をも喚起するものなく、其有難味に至つてや眞に零である、之れに反して從來我國に流布し來りたる宗教の内には、随分甚だしき迷信を丸出しにして居る者あり、從つて極端に理性を無視して居るものもなきにあらざれども、其等の宗教の内には、何處となく懐かしき所ありて有難味の溢れて居る者がある、而して此懐かしき有難味の多い處が宗教の生命にして、鹿の溪水に撞がるゝが如く人心之れに歸依するのである、天理教の如き蓮門教の如きいづれも其適例にして、其立

宗の起源は眞に滑稽に屬するものなきにあらざれども、其の感化の偉力は實に當るべからざる者あつて存するのである、西行法師嘗て伊勢大廟に詣ふで、「何ものおはしますかはしらねともかたじけなきに涙こぼる」と詠じたる、此幽玄なる宗教的趣味は理解の説明を俟たぬのである。

今や宗教の大義棄たれて地に墮ち、徒らに末技に拘々して神祕の信念地を拂ひ、畏敬の觀念日に薄く、感恩の誠意月に弱からんとす、吾人たるもの奚んぞ活宗教に對して早天に雲霓を望むの感なきを得んや。

コムトの人類教を評す

頃日子はイングラマ氏の著作に係る宗教史を讀んだ、著者は英國の大學教授で經濟學者として夙に其名を知られて居る人である、然るに此人が宗教に關する著作を公にしたと云ふことは予の聊か奇異に感じた所である、蓋し宗教は全く氏の専門以外のことに屬する者なればなり

然るに氏は此宗教史の序文に該書を著すに至つた理由を述べて居るが、實に面白

き節がある、氏は自ら斯く云ふて居る

予が専門は經濟政治の方面である、併し宗教問題は人間の安心立命に關する問題であつて予は之を等閑に附する事は出来ぬ、故に常に眞面目に此問題を攻究し來つた、而して中年コムトの哲學を研究し、其人類教の蘊奥を味ふに至つて、予が心中大に悟る所あつて、宗教的大確信を得た、爾來數年間熱心にコムトの哲學を研鑽すると同時に、深く人類教を信じ、之を我身に實踐し、精神の上に道德の上に又た品行の上に益々其効驗の著しきことを悟つた、今や歐米の宗教思想は過渡の時代に居る、舊思想は倒れて最早や人心を繋ぐの力なく、而して之に代るべき新思想は未だ建設せられて居ない、即ち今日の宗教界は實に混沌たる形狀を呈して居る、此時に當り現代の宗教的要求を満たし、將來の宗教として崇拜せらるゝものは實にオーガスト、コムトの人類教であると信ず、予は謹んで今に至る迄輕々しく宗教のことを口にせず、更に之れに關する予が持論を口外しなかつたが、然し今や晩年に近づき予が世を去るの時亦遠きにあらざる事を察し、茲に予が確信を公にするの止むを得ざるに至つた譯である、云々

イングラム氏の宗教史は斯る理由と斯る精神と斯る信仰とを以て書かれたのである、要は氏が宗教思想の沿革を叙し終りにコムトの人類教を祖述したのである、予は年來コムトの哲學思想に興味を有する事と、又イングラム氏が熱心にコムトを信することゝの理由により、二重の興味を抱て面白く此の書物を通讀した、是れ予が茲にコムトの人類教を評し併せて予が所信を陳ぶるに至つた理由である、第一人類教の長所 人類教の長所として先づ吾人の認むべきことは、コムトが超越的神の觀念を否定したことである、人格を具ふる神が宇宙の外に位を定め、時々人類の上に或は恵を降し、或は禍を下し、或は天地の主宰たる權能を以て自然法則を左右するてふ信仰に、極力反對して其迷信たる事を證明したことである、或る宗教信者は今日も尙ほ斯る信仰を抱いて以て宗教の生命として居が、此信仰はコムトの哲學ばかりでない、今日の科學は之を容れないのである、元來此の宇宙は法則の宇宙にして、一葉の凋落も自然法の支配を脱することは出來ないのである、故に神が奇蹟を行ひて自然を左右し玉ふなど思ふことは、偶々絶對なる神の立法權を度外視し、斯る神の存在を非認するものにして、奇蹟は却て神の非存在を證明せん

とするものである、予は神の存在を信す、然れども斯る超越的なる神の存在を信じない、此點に於て予はコムトの説を多とする者である、

コムトは人格を有する超越的なる神を宗教の中心とせず、之に代ふるに、人類の觀念を以てした、此觀念を宗教の本尊としたことの當否は暫く措き、兎に角人類てふ總合的存在者を認め、人類を知り人類を愛し人類に仕ふる事を以て宗教の第一要義とし、最大目的としたことは確かにコムトの人類教の長所として吾人の看過すべからざる所である、コムトの教によれば人類てふ總合體は過去現在未來を通じて存在する者であつて、個人は此大存在者に負ふ所極めて多く、從て此存在者の爲めに大に盡くすべき義務があるのである、而して此義務はコムトの大に高調した所であつて、コムトは人類に對する義務の福音を宣傳したのである、權利は吾人の求むべき終極のものにあらずして、人類は義務を盡くすべき爲めに生れたのである、吾人に主張すべき權利ありとすれば、人類の爲めに働くべき權利あるのみであるとは彼の主張である、オーガスチン以來中古の耶蘇教學者は、人類を塵よりも軽く蟲よりも卑しきものと觀して人類墮落説を主張し、惹いて終に病的思想に陥つた

が、此際起つて歐洲思想界に大革新を興へ一新紀元を畫したものは、オーガスト、カ
ムトである。彼は實に人類に對し罪惡の醜塊を掃除し、之を天の高き上に
上げて崇拜に値するものとした。人類に對する尊敬はカムト教の最も貴き所である。
第二人類教の弱點 以上は人類教の長所して吾人の同教に對して負ふ所なる
が、予はカムトの宗教に對し斯く多大の同情を表し、或點迄は殆んど之を崇拜する
者なれども、尙ほ其間に満足し得ないものがある。是れ予が人類教の弱點として指
摘せんとする所のものである。則ちカムトは人類を以て宗教の本尊となし、人類を
神として禮拜すべきものであると主張して居る。而して是れ決して比喩的でなく
文字通りで正直に人類を神として崇め、之に禮拜するのがカムト教を信する。ボジ
チビストの信仰である。而して其禮拜の様式に二種あり、一ツは公衆の禮拜にして、
他は家族の禮拜である。公衆の禮拜に於ては會衆共に靜肅を守り、瞑目して永遠に
存在する人類を默念し、其前に跪きて禮拜し、家族の禮拜は毎朝家族相團樂し、其内
より家の妻たり母たる女性を推して之を崇め、其者を拜するのである。蓋し女人は
人類の母にして殊に崇拜すべきものと認められたるによるが、カムトの人類教も

此處に至りては殆んど滑稽の沙汰と云はざるべからず。
人類即ち神てふ教は、予が見る所を以てすれば是れ宗教の形ありて其實なく、最早
や宗教でないと思ふ。人間の宗教心は決して之を以て満足するものにあらず。宗教
心の根本的要求は人類以上に或る無限なる存在者を渴望する點にあるのである。
然るにカムトは此要求を認めない。是れ予がカムトの人類教に對し不満足を感じ
る所以である。

然れども又予は今日多數の基督教徒が信する如き神、即ち宇宙を離れ人類を離れ
て存在し、人の人格と同じ人格を有する超越的なる神の存在を信せず。又此世界を
以て神の細工物の如く觀し、人類を以て神の作りし土人形の如く觀し、神を大工か
左官の如く思はない。換言せば宇宙と人類を超越して存在する怪物的神の存在を
信じないのであるから、此の點に於て予はカムトと説を同ふする者である。

然れども亦カムトと共に人類を以て直に神なりとなし、人類を無限の存在者と觀
し、之を尊信崇拜することを能くしない、人類を尊敬し人類を熱愛し人類に仕ふの
熱心に於ては予は謹んでカムトに従ふことを躊躇しない。然れども人類を以て宗

教の本尊とし、其前に跪き之を禮拜する如き極端なる「ヒューマニタリアン」ではない、予は人類の中に有る神の存在を認むるのである、予の信する所を以てせば人類以外に神なく而かも人類は神でない、神は人類の中に宿り玉ひ、人類は其神の顯現であることを信するのである、譬に人類のみならず宇宙も亦神の顯現である、神のイマネンス(充盈)は予が信仰である、宇宙の外に孤立する神なく、併も宇宙其れ自身は神でない、神とは宇宙人類を貫通し其中に充盈する無限の生命であることを信するのである、而して人類は萬物の長であつて最高等の存在者であるから、神は人類によつて最も善く顯現せられて居るとするのである、人は神の姿である、聖人君子は神の寫眞である、其徳は神の徳である、基督は神の「インカーネーション」であることは、此意味に於て予が信する所である、然も獨り基督のみならず、吾人も亦或る程度まで神の「インカーネーション」である、人の品性は其人の中に在る神的生命の發現である。

第三此信仰の効力 科學と宗教との調和即ち科學と宗教との衝突を防止することは此信仰によつて出来ると思ふ、蓋し科學は宇宙萬物の間に行はるゝ法則を發

見するを主旨とし、宗教は此法則を以て宇宙に充盈する神の動作と説くのである、此兩者の間何處の餘地に衝突の動機を伏在せしむべきか、却て科學の進歩は益々宗教の光を増し、宗教信仰の發達は科學的研究の精神を奨励するに至らざれば已まぬのである、畢竟從來の宗教家が神は宇宙の外に超越して宇宙の法則を左右するものなりとなせる迷信は、偶々近代科學の精神と衝突し、人をして宗教と科學は無究に衝突を免かれざるものと思はしめたのである。

社會と宗教の調和も亦之れによりて計ることが出来ると思ふ、從來の宗教が社會と離れ所謂出世間的となりし事は、夫等の宗教が人類以外に神を求めた結果であるが、一度び人類を神の宮と觀じ人類の中に神を求め人類に仕ふるは神に仕ふるを意味するものなりとするに至らば、此新信仰は、社會と宗教とを一致させるの効力がある、蓋し「天國は爾等の衷にあり」此最小さき者の一人を愛するは神を愛するなりとの信仰即ち人類の中に神を認むる信仰は、吾人をして社會に向つて全幅の精神滿腔の熱心を傾注せしむるの傾向を起すべければなり。

宗教に就て云へば、近く我國に於ては基督教と佛教と各其教義を固持し、基督教は

唯一神教を過重し、佛敎は凡神教を過重して、其末各迷妄の極に走るの譏を招きたるが、此東西の二大宗教の調和も亦人類の中、宇宙の中に存する神を宣傳する新宗教に由りて善く上げ得らるゝ事と思ふ、唯佛耶の間のみならず、要するに將來の宗教問題は此の信仰によつて解釋せらるゝ所甚だ尠からざることと思ふ。人は云ふ過去の宗教は破れたり、然り過去の宗教の破れたることは事實である、然らば新宗教は何によりて建設せらるべきか、宗教心を以て一種の迷妄（ミヤゴト）と觀せば止む、苟も宗教心の要求が果して確實にして永遠のものなりとせば、之を満足すべき宗教は必ず建設せらるべきである、今後世界の人類を支配すべき宗教は、正に吾人の潛心考究に價する問題である。

大宗教家の資格

宗教家とは如何なる人物をいふのであるか

雪嶺三宅博士嘗て「宗教家、僧侶、坊主」と題し趣味深き論文を公にせられた事があつたが、其内に坊主と云へば醒坊主とか道樂坊主とか云ふて何となく輕蔑の意味を

含み、墮落の口氣を現すが、之れを僧侶と云へば、何となく世間より離れて現社會には活動なき人々を意味するの感事がする、而して之れを宗教家といへば其内に多少考もあり、社會にあつて經世の志ある人々であるとの感事がする、其處で宗教家は、何宗何派を問はず、高潔なる精神を以て天下國家のため大に活動せねばならぬとの事であつた。

予は思ふ今日の耶蘇敎の牧師とか傳道師とかいふ名稱も、既に幾分か佛敎の坊主僧侶と同意義に解せられて來たではないかと、要するに名稱の如何を問はず、宗教を以て「プロフェッション」となし、之に依つて衣食する人々は、其職元より高貴なるに相違なしと雖も、何となくイヤな感事がする、所謂坊主嗅い人物のように思はれる、敢て擯斥するでないが欽慕に至らない、然れども宗教家といふ名は高尚にして、直に其人に對して尊敬の念を起すのである、蓋し宗教家とは宗教を以て己が最高の主義なし、天下の爲め社會のため活動する志士であるといふ聯想が起るからである、かの英吉利西のシャフツベリー侯の如きは宗教家の好模範である、彼は僧侶にあらざる大宗教家であつた、家にあつては祈禱と聖書の研究に時を費し、外に出で

ては貧民労働者の友を以て自ら任じ、夜は貧民窟に行いて其情况进行を視察し、晝は議場に登つて貧民救済の政策を議す、予は彼の傳記を讀みて感嘆措く能はず幾度か「嗚呼敬ふべきは宗教家なる哉」と机を叩いたことがあつた、然れば、大宗宗教家の資格とは果して如何。

宗教家は頭の人なり 先づ第一に宗教家の資格として吾人の認めざるを得ないものは明晰なる頭脳である、直覺的に眞理を捕捉するの眼識である、こゝが大宗宗教家のエライ所であつて萬人の尊敬を博する所以である、彼れ必らずしも博學多識の人ではない、然し社會の事でも政治の事でも或は宗教道德の事でも能く其真相を看破し、其眞髓を得其大局を觀し、以て天下の人を指導するの卓見家である、昔時猶太では斯る人物を「プロフェット」といふた、「プロフェット」は豫言者と譯すれども、唯未來の出來事を卜知する占者の輩をいふのでなく、直覺的に宇宙の大眞理を悟るの明、直覺的に宇内の大勢を觀するの明、即ち宗教的に云はゞ直覺的に神と其働を見るの明ある人をいふのである、「プロフェット」の原語は「見る人」といふ意味で、我國の所謂「識見家」と同意義である、舊約時代にあつてはモーゼの如き、エリヤの如き、新約時

代にはヨハネの如き、ポーロの如き人物は皆是れ豫言者にして驚くべき識見家であつた、宗教家第一の資格は即ち此見識である、豫言者的の眼光である、遠見卓識を有する頭脳である。

宗教家は情の人 眞の宗教家は頭の人であると同時に又た情の人である、唯眞理を看取する計りでは宗教家と云ふことは出來ない、總明なる頭腦を有する上に温かなる人情を有たなければならぬ、頭は「デイヴヒニチー」に充ち胸は「ヒューマニチー」に満ちて人情大義に動かされ、喜ぶ者と共に喜び、悲む者と共に悲むの人でなければならぬ、基督は愛を説き、釋迦は慈悲を教ゆ、彼等皆に之を口に説いた計りでない、基督は全身愛に満ち、釋迦は渾身慈悲を湛へた慈愛の權化であつた、是れ彼等が大宗宗教家として人類の尊敬と崇拜とを受けたる所以である、見よ彼のセント、フランシスを、彼は宗教的信仰の刺激により貧民に向て無限の同情を寄せ、自ら其財産を抛つて之を貧者に施し、獻身的生活を送つた、而して其感化は歐洲全面に波及し、基督教會史に新局面を開いた、又た彼のジョン、ハワードは宗教的熱心を以て牢獄の改良に一身を獻げ、獄窓に呻吟する罪人の爲め熱涙を湛き、歐洲の人心を動かして

遂に彼が如き人道的偉業を奏するに至つた、此熱心と此熱情は宗教家の特質にして、吾人をして其名を聞く毎に愛慕措く能はざらしむる所以である、宗教家はヘツド(頭)の人であると同時に實にハート(情)の人である。

宗教家は腹の人 宗教家は死を以て起つ者で、主義の爲めには常に喜んで生命を捨つるの覺悟を有する腹の人である、是れ亦宗教家の高貴なる所である、基督曰く「我は刃を出さんが爲めに世に來れり」と、宗教家の社會に活動する者、皆此精神と覺悟とを有して居る、故に不義不正の存する所は王侯貴人と雖も是れ我敵として挑戦する勇氣がある、彼のサボナローを見よ、彼は盛なる信仰と熱心を以て時の政界に活動を始め、自ら共和黨の首領となり、社會の腐敗を攻撃して止まず、遂に貴族社會の惡む所となり、迫害身に逼り、政敵四方に顯はれ、演説を禁止せらるゝと數十回、遂に獄に投せられて後、火刑に處せられた、然し彼は終始其主義を枉げず泰然として死に就いた、此勇氣、此腹は實に宗教家の宗教家たる特色にして、古來夥多の殉教者の傳記を潤飾する所以の點である、大宗宗教家は如上の三大資格を具備する人物である、即ち頭あり、情あり、腹ある人である、孔子の所謂智仁勇——智は頭、仁は情、勇

は腹——にして、此三徳を有する大人物こそ始て大宗宗教家たれ、而て予は基督に於て此三徳が最も完全に最も圓滿に實現されて居ると思ふ、是れ予が基督に向つて無限の尊敬を拂ひ、朝に夕に彼を想ふて彼れの如き識見と彼れの如き熱愛と彼れの如き膽力とを養ふて、宗教家たるの實質を全ふせんと勉むる所以である。

偉人の心

曾て弟子基督に來り問ふて曰く、「天國に於て大なる者は誰ぞや」と此質問を今日の言語に翻譯せば、眞正の偉人とは誰ぞや」との意味である、其時基督は一人の嬰兒を示して答へ賜ふらく、「凡そ此嬰兒の如く自ら謙る者は是れ天國に於て大なる者なり」と、換言せば、謙遜の人は即ち偉人なりとのことである、是れ予が近時大に感ずる所にして實に謙遜は偉人の心であると思ふ、マーチノー曰く、

“Humility is an eternal attitude for finite minds.”

「謙遜は限りある人心の永久に有すべき態度なり」と、眞の學者、眞の賢人、眞の豪傑は古來皆謙遜の人である、予曾て米國に遊び最も驚きたる一事は、かの國に於て大學者として知らるゝ人々の實に謙遜なる態度である、其著書を読み、其名聲を聞き、逆

も近づく可らざるもの、如く思ひし人にして、實際其人に接するや優しくして邊幅を飾らざる謙遜にして少しも誇らざる、一見して其人格の高さを思はしめ、倍々其學識の深きを感せしむのである、ニュートンが引力の大發明をなして其名天下に轟きし時、彼は自ら其學識を誇らず、我は大海の沿岸に貝殻を拾ふ童兒に似たり、私の知らざる眞理の海は限りなし」と稱したりと、何ぞ其心の謙遜にして奥床しきぞ、是れ實に彼が眞の學者たる所以である、ジョージ・ワシントンが米國第一の大統領にして、米人は昔も今も彼を敬ふこと殆んど神を敬ふが如くである、然るに彼は常に人間の貴きを自覺して、如何なる人をも蔑視したることなかりしと、彼曾て逍遙の際黒奴の小兒來つて禮を施す者あるや直ちに足を止め、恭々しく脱帽して之に答禮したりと云ふ、何んぞ其行儀に篤く其心の謙虛なる！副島伯は至誠を愛し、曾て盛んに之を唱導して天下に遊説したる人なり、松村介石氏大に伯の志を慕し、一日伯を訪ひ伯に讃辭を呈す、伯は笑つて曰く、我れ實は密かに耻づ我が性行を顧みれば我には道を説くの資格なしと、其のこれを自白するの謙遜は聽て伯の至誠を現はした所である、キリストは衆望身に集まり、人皆其教と其威に服せし時、或人

來りて、善き師よ我れ限りなき生命を得んが爲には何の善事をなすべきや」と問へるに答へて、何故我を善と言ふや一人の外に善き者はなし即ち神なり」と答へ玉へるが、此坦々たる心狀はキリストの偉大なる所を現はして居るのである、要するに眞の學者、眞の賢人、眞の偉人は其心狀皆謙遜である、博士號を鼻にかけて誇る輩は眞の學者にあらず、爵位を振り舞はして威張り散らす貴族は決して高貴の人にあらず、自ら己を虚ふし嬰兒の如く謙遜なる者は、是れ實に敬ふべく貴ふべき人にして、即ち天國に於て大なる者である。

基督教は謙遜を説くこと細にして、キリストの教のうち最も著しき教は謙遜を説きたる教訓である、或は心の貧き者は福なり」と言ひ、或は心の柔和なる者は福なり」と言ひ、或は爾等の中大ならんとする者は爾等に使はるゝ者となり、爾等の中首たらんとする者は爾等の僕となるべし」と言ひ、或は自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせらる」と言ひ、又或は若し改りて嬰兒の如くならずは天國に入るとを得ず」と言ふ、皆これキリストが其弟子に謙遜を教へたるものにして、聖書の中に此種の言葉の多きは、キリストが如何に熱心に此徳を説きしかを現はす

に除りあるのである、使徒保羅も亦謙遜を以てキリスト教徒の標章とした、故に彼は「キリストを着よ」と言ひ、又同じ意味を以て「爾等謙遜を着よ」と教へて居る、蓋し保羅はキリストを以て謙遜の化身なりと信じたのである、然れども基督教の教ゆる謙遜の人とは卑屈なる者、愚鈍なる者、無氣力なる者、自信自重の心なき者、徒に腰を低くして人に諂ふ者、所謂封問の行爲を言ふのでない、此等は謙遜に似て非なる者である、基督教の教ゆる謙遜は吾等が人に對し、世界に對し、神に對して自ら願み、時自然に生じ來る心狀を言ふのである、眼を放つて此宏大無邊の宇宙を見ん乎、我等の知る所は唯一小部分にして、知り得ざる領分は殆んど限りないのである、一片の樹葉も我等の解せざる意を寓す、人々互に其知識を比較せば或は我は人よりも勝れりとして誇る心も生せん、然れども宇宙の前に跪いて黙想する時は、何人と雖も己が知識の淺薄を感じて自ら謙らざるを得ないのである、基督教は此謙遜を教ゆるものである、更に又た皇天上帝の前に跪座して己れを願みよ、我裡に何の誇る所かある、嗚呼「我は罪人なり」嗚呼「我は禍なる哉」この死の肉體より我を救はん者は誰ぞやと嗟嘆するに至らん、他人に比して己の潔白を誇る人と雖ども、神を自覺し

其前に立てば、忽ち己の不潔白を悟り自ら謙らざるを得なくなる、基督教は此謙遜を教ゆるのである、又た神の造りたる人間を想へ、之れを人爲の裝飾を纏へる上より見る時は、人々互に區別して上を貴しとし下を賤とする心も生ずべし、然れども一度ひ天眞の赤裸々に返り、人間の人間たる其真相に着眼せば、其の高貴なること、其無限なること、其神の子たることに於て、吾人は乞食をも尊敬せざるを得ざるの感をなす、之れフシントンが黒奴の小兒にも敬禮を返したる心事である、基督教は此謙遜を教ゆるのである、然るに後世の教會は謙遜の本義を忘れて其末節に拘り、其精神を示さずして其形を教へ、爲めに謙遜の人を作らんとして卑屈の人を作り、夥多の弊害を生じたのである、故に我等は大に之に鑑み、宜しく謙遜の精神に溯り、其本を得ねばならぬ、即ち神につき、宇宙につき、人間につき、眞の知識を求めねばならぬ、斯くて謙遜の念は泉の如く湧きて盡きず、終に偉人の心を得るに至らん、然り偉人の心は謙遜にして謙遜の心は偉人に到るの道である、西哲は言へり

Humility is the Road to Greatness.

と、實に千古の格言である。

人生の好伴侶

旅は道づれ世は情けといふ諺の如く、旅行をするに好き道づれがあれば、長き旅程も短く感せられ、又旅の愛さも是が爲めに忘れるもので、旅行の快樂の大部分は、好き伴侶を有つと否とにあると思ふ、人生も亦一種の羈旅なることは古今東西の詩人が屢々歌つた所である、左れば此の人生を渡るに好伴侶を要することは云ふまでもないことである。

世には酒色を以て人間最大の娛樂となし、之れなき時は一日も楽しむごと能はず、これなき處は山水の美も目に映せざる底の人はある、而して此の種の人は随分少なくないのであるが、斯る人は肉慾の嗜好を以て人生の好伴侶として、居る所の人であつて、下等動物と選を異にせざる生涯を送つて居るのである、斯る生涯を送る者は人生の趣味を解せぬものである。

苟も肉慾の外別に人間の樂所を觀するものは、他に清高眞率なる人生の伴侶を有せざるべからず、而して之は如何なる種類のものにして如何なる條件を有し、如何

なる資格を要するかと云ふに、第一に人生雑多の苦痛悲哀に對して常に吾人を慰藉し又獎勵するもの、第二に人生の誘惑及び罪惡より吾人を救ふて高潔なる感情を吾人に鼓舞するもの、第三に吾人が人生の難關に立つて百千の障礙に對するに際し、必要なる力と、インスピレーションを與へ、吾人を勵まして事に成功せしむる力あるものでなければならぬ、此等の資格を具へたる者にあらざれば、以て吾人の生涯の好伴侶となすに足らぬのである、一度斯の如き好伴侶を發見し得るか、吾人の人生は爲に愉快極まり且つ趣味多きものとなり、茲に初て風物美はしき羈旅を現することゝなるのである、彼の酒色を友として人生を塗糊し、自から欺いて直歩の下等動物となり、或は人生を不可解として自殺を以て一大福音と感ずるの徒は、皆此伴侶を缺くより來るものにして、勢茲に到らざれば止まぬのである。

之れを具體的に云へば、讀書は人生の好伴侶として正に主要の一つであらねはならぬ、之を予自らの經驗に願み古今の大人物の傳記に徴して、予は其誤らざるを深く信するものである、特に偉大なる書籍は人生の良友として缺くべからざる感化を與ふる者である、神學者にして又た著述家なる瑞西の Erasmos の言に、書籍は

人間生活の必需品にして、衣類の如きは贅澤品に過ぎないと、實に書籍に比せば衣服は畢竟贅澤品であつて、此れなくも敢て性格に缺く所はないのである。故にエラスモスは常に衣服の新調に迫られても、之れを措て先づ書籍を購讀したとのことである。而して此のエラスモスの最も愛讀した書物は如何なるものなるかと云ふに、シセロの著書であつて、彼れは殆んど之れを以て己が最愛の妻の如く愛し、朝夕に之を繙いて其心を養ひ起臥共に其傍を離さず、其之を讀み終りて書架に收むる毎に、彼は必らず之れに接吻して著者に敬愛の情を表したといふことである。又た彼の佛蘭西の有名なる學者モンテスキューは苦しみの時、悲しみの時、其他種々様々の心配に遭遇する毎に、必らず書齋に退いて一時間なり二時間なり讀書する習慣があつたとのことである。則ち彼は讀書によつて人生の苦痛悲哀を忘るゝことを努めたのである。此等の例を以て考ふるも、讀書が人生の清高なる伴侶であることは明らかである。其他ダンテは常にヴェルジルの書籍を愛讀し、シラーはセーキスピヤーを賞讀し、ミルトンはホーマーを、ゲーラーはスピノザを各々愛讀して居つたといふことである。

書籍の人生に關する所斯くの如く重し、然も讀書の方法善しきを得ずして徒讀に陥り漫讀に終らば、假ひ千萬卷を閱するも眞に通讀に過ぎずして、吾が生に齋らす所終に空からざるを得ぬのである。予の知人に某なる學者がある、此の人は或る専門の智識に於ては日本有数の學者であるが、不思議なことには其書齋に殆んど書物なく、唯ある者はブリタニカ百科辭典ばかりであると云つても差支がない。其他の書物を讀まぬ人である、時に論文を作り又演説する場合に際せば彼れ此れ當面の問題に就て直ちに彼の百科辭典を繰返して其の材量を調べるのである。或る意味に於て彼は實に豪い學者であつて、自身に「オリヂナルノート」が澤山あつて他人の書物を參考するに及ばない者と取られるかも知れぬが、予は斯くの如き人を以て讀書を人生の伴侶として居る人とはしないのである。凡そ讀書と云ふとは、單に知識を求むるといふ目的ばかりでない、これも一つの讀書法であらうが予が所謂人生の伴侶として行かうといふ意味の讀書法でないのである。去らば眞に書物を樂むといふのはどうすることかといふに、其の之を著したる著者の思想を自ら思想し、其の著者の感情を自ら感じ、著者の經驗を深く味い、著者と喜び著者と悲しみ、

著者と歌い著者の精神生命が讀者の精神生命に同化するといふのである、故に吾人は斯くの如くにして愛讀し得る書物を求めなければならぬ、換言せば讀む毎に吾人に新たな識見を與へ、吾人をして新人物とならしむる様な偉大なる感化を與ふる書物を求めねばならぬ、斯る書物は無論澤山あるものでない、又た人々によつて其選む所を異にするに相違ないが、種類の相違は敢て問はぬ、唯讀む度毎に吾人に新感想を與へ、滾々として教訓の泉の盡ざる偉大なる思想を包藏するものを得て、眼孔紙背に徹する迄之れを精讀せねばならぬ、此人生の好伴侶に對し死生を共にせねば已まぬの熱情を灌くのである、英語の *The man of one book* 即ち一書を熟讀玩味する人を吾人は期望するのである、何が己の最も愛讀する書物であるか、何が我が心に新らしい見識と高尚なる理想を與ふる書物であるか、又いづれに之れを見出すべきか、潜心張目して其選を誤まらぬ様にせねばならぬ、而して一度其書籍を得て以て座右の友となし人格修養の資となすを得るに到らば、吾人の生涯も茲に始めて多幸なる生涯と稱することが出来るのである。

次に人生の好伴侶として吾人に眞率なる感化を與ふるものは此天地である、此意

味のある此美麗なる此神聖なる天地は即ち吾々の求むべき生涯の好伴侶である、此天然を友として麗はしき生涯を送つた人は彼の詩人ライヅワースである、予は此人の名を思ふ毎に天地の風光を聯想し、天地の風光を感ずる毎にライヅワースの名を聯想するのである、ライヅワースは天地の美を人間に紹介したるのみならず、彼れ自分は天地の美しい感化に依て養成せられたる偉大なる詩人である、此自然即ち天地の風光が人心に優美なる感化を與へて人の性情を清くし、又高尚なる性格を養はしむることは著しいのである。

ワシントン、アーペンクは英吉利の紳士ほど優美なる人を見ないと言つたが、何故に英吉利の紳士は斯く美しい性格、即ちセントルメンの性格を有つて居るかと云ふと、是は正しく自然の美しい感化に依るのである、元來英吉利の紳士は業務を倫敦に於て採り、休息を林野の眺望美はしき田舎の家庭に採り、都會を以て事務所や工場とし、田舎を以て安易の生活を送る場處として、常に美しい天地の懷の内に其感化を受けて其性情を養つて居るのである、是れが英吉利の紳士が優美なる性情を發揚して居る所以であると思ふ、實に自然の風景が人間の心に感化を與ふる力

は、不識の内に働けど極めて大なるものである。詩人ポーブの言に「上帝は田舎を造り人間は都を造る」とあるが、實に都會は人間が造つたものであつて、美は美なれども脂粉の装にして自然の美に及ばないのである。畢竟都會の美は人工美にして田舎の美は自然美であるが故に、常に紅塵萬丈の都會にのみ生活する者は其心漸次に困憊萎微して仕舞ふが、上帝の造られた田舎に住み廣々たる天地の美觀に耳目を清爽にする者は、其心自から活躍し性情自ら優美となり、性格識らず／＼向上するので、之れ所謂境遇の人を造る所以である。吾人は其親炙するものによつて其人爲を左右せらるゝのである。左れば吾人が天地の自然に親炙すること愈深ければ、天地自然も亦益々其美を發揮して親しき感化を遺憾なく吾人に及ぼすのである。親子の間、夫妻の間、又朋友の間に互に相感化する神通の事實は恐ろしき現象にして、相互の性質終に相一致し、言語筆蹟迄も相似るに至らねは已まぬものがある。故に吾人が自然の美を愛すること戀人を愛する如く熱烈なるに到らば、吾人は何時か知らず／＼天地の美に感化せられて麗しき人格を得るに相違ないと思ふ。嘗て某學校に於て文學會を催ふされた節、チャパンタイムスの記者高橋一知君が

英語演説をせられたが、其の中に斯う云ふことを言はれた。自分は不圖した事から近頃日本の詩人仲間に交際する機會を得て測らず不思議な事實を見出した。即ち二様の詩人に就てのことで、其一は詩作家即ち詩を作る人である。此人は其の生活と云ひ其家庭と云ひ、其人の周圍に詩人らしき雅趣を現はして居らぬが、詩を澤山作つて居つて頗る御自慢の方であつた。今一人は一向詩を作らぬと見へて作品を見せなかつたが、其座敷の裝飾、庭園の木石、將た主人公の風采等、自から風致を示し如何にも詩人らしき處があつた。之れを前者に比すれば、前者は詩を作る詩人にして後者は生活を詩化する詩人であると、面白い話である。思ふに吾人は各々長所を異にして居るから悉く詩人とはなれぬが、併し彼の生活を詩化する詩人となつて其心を詩化し、以て天地の自然に對し其真美を愛玩して性格を美化するとは出来な

いことはないと思ふ、而して予は此の意味に於て詩人になりたいと思ふ。幸にして我日本は天然の風景に富み、自然の美に於て世界に冠たるものありと稱され、外國人は我日本を稱して地球上のパラダイスと云つて居る。此の美しい自然の間に生息する我等同胞は、且夕親炙の友として此自然を與へられたるものなれば、常に

以て性情を温め思想を向上し、立派なる人物を養成せねばならぬこと、思ふ。最後に人生の好伴侶として吾人の生に伴はなければならぬものは宗教である、宗教の目的は其の何宗何教を問はず、皆人間をして其生を樂しましめ安心立命の生涯を送らしめんとするのである、此の宗教を以て生涯の「コンパニオン」となし始終之に依りて心を慰め、心を勵まして、欽慕措く能はざる美はしき生涯を送つた人は、世界の各所に起りたる立教の聖者に於て之を見るのであるが、就中耶蘇基督は予の最も敬服する所にして、彼は常に神の意識に満たされて居つたのである、基督の言に「神吾に居り吾神に居る」と云ふことがあるが實に高大無邊なる自信である、而して之れが神の意識に充てる彼れの意識を云顯はしたものであつて、基督の性格の高尙なりし所以、其人物の偉大なりし所以、彼が万難を排して能く其天職を完ふした所以である、基督の人物の非凡にして高尙なりしことは今更云ふまでも無い所にして、古來多數の基督教徒が彼を以て完全なる人間、罪無き人間、人にあらずして神なりしとなす所以のもの、皆此絶大なる意識の告白によるのである、而して基督が此絶大なる意識を養成し得たるものは、一に彼が敬神の誠意によるものにし

て則ち宗教の感化である、此宇宙には不可思議なる大能の充ち満てることは殆んど何人も否定する事の出来ぬ所である、而して此不可思議なる大能は朝に夕に吾人の胸中最も深き處に宿つて、吾人に勸善懲惡し向上の途を指示して居るのである、此大能を吾人人生の好伴侶とし、生涯の「コンパニオン」として行く事の、吾人の生涯を無碍安全にし且幸福ならしむる事は、實例に徴して吾人の疑を容れざる所である。

以上は予が人生の好伴侶とする三者であるが、いづれも之れを得るには少からぬ修養を要する事は言を俟たざる所である、今日書籍を繙いて今日直ちに讀書の趣味を得ると云ふ事は出来ぬ事で、多年讀書の結果漸く趣味の生じ来るのである、自然の美の感化を受け様と思ふて一朝鎌倉や大磯に出掛けて行つた所が、それで美の真相を得ると云ふことは出来ぬ、平常宗教に無頓着なるものが、一夕の坐禪で神を自覺し宗教の極意を得るなどの事は思ひも寄らぬ所である、良友の得難きを思ふ者は人生の好伴侶も亦其得難きを思ひ悟らねばならぬ、良友のなかるべからざるを思ふものは、又此好伴侶を得ざる可らざる理を悟らねばならぬのである。

誤解の修養

誤解は人生に於いて止むを得ないものである、人間の知識に制限(リミテーション)のある間は、どうしても誤解は免るとは出来ない、X光線發明せられて人體の中を透視することが出来るやうになつたが、人の心中を透視する方法は未だ發明されない、保羅は言ふ、我等の知識全からず………我等今鏡をもて見るが如く其見る所昏然なり」と是れ即ち誤解の生ずる理由である、古人の句に「うたがひを切り放ちたる西瓜かな」といふことがある、切り開けば疑も何もない、切り開かない間は西瓜の果して赤いか白いか判然と知る譯に行かない、人の心も切り開くことが出来れば誤解はない筈、然し人の心は切り開いて見ることが出来ない、其處で誤解が生じ來るのである、時には善人も悪人と誤解せられ、悪人も亦善人と誤解せらるゝことがある、こゝに至ると世の中は混沌として差別明かならず何が何やら分らなくなり、人は皆盲目者の感がするのである。

智識の制限による外、知識に程度の存する事は誤解の生ずる他の理由である、先達

の士が時人に容れられなかつたのは之が爲めである、凡俗は非凡の人を知ることが出来ない、小人は偉人の心を察することが出来ない、愚人は哲人の思想を解することが出来ない、此處に於て誤解は止むを得ず生じ來るのである、基督は其の最も著しき實例である、彼ほど誤解せられた人はない、彼は凡ての人に誤解せられ、又其弟子にさへ誤解せられた、彼が十字架の死も全く誤解の結果である、彼は實に同時代の人に誤解せられたのみならず、爾來今日に至るまで多くの人に誤解せられ、甚だしきは彼れの名を冠せる教會にまで誤解せられて居る、此誤解は即ち彼の豪い所である、アミエール曰く「神は凡ての者の中で最も人に知られず最も誤解せらるゝ」と。

“He also — He above all — is the great misunderstood, the least comprehended.”

要するに誤解は人間の知識に制限のある事と、程度のある事とによりて生ずる止むを得ない事實である。

誤解は人生の一大悲痛である、人生には多くの苦痛がある、貧乏も苦痛、艱難も苦痛、病氣も苦痛、失戀も苦痛、失敗も苦痛である、此等の苦痛に堪へずして自殺をさへする者がある、皆これ非常の苦痛に相違ない、然し誤解の苦痛は之れを経験した者

の外、其悲惨を想像することの出来ぬ苦痛である。嗚呼誤解は人生の最大十字架、最大悲痛である、彼の新聞の誤解などは更らに意とするに足らない、殊に日本の新聞紙の如きは其記事殆んど當にならぬものとせられて居る、こんなものに譽められても別に名譽でもなく、又之に罵られても更に耻辱でない、彼等の批評は之を雲烟過眼視して差支ないと思ふ、然かし我が最も愛し、最も信じ、最も敬する、親、兄弟、妻子、朋友などに誤解せらるゝ其の苦痛は人生悲痛の極である、予は嘗て此の殘酷なる試練を受けつゝありし一人の年若き妻君を見た事がある、彼は當時予が許に來り涙ながらに其事情を物語つた、而して彼を誤解せし人は彼が無二の朋友にして、是まで兩人の中は他人が見て羨む程の親しき交際であつたが、不幸にして一朝何人かの離間中傷によりて誤解を受け、爾來彼が言は悉く友の疑を惹き、善意も悪意と見做さるゝとになつた、予は其婦人を識ると約十年、其間親しく學校で彼を教へしと三年、予が家に同居せしこと二年餘、其人物性格は予の熟知する所にして、先天的の好人物にして、然も模範的のクリスチャンである、此婦人にして此の誤解を受く、予は實に同情に堪へなかつたのである。予も亦友人の誤解を招きて此苦痛を経

験したことが二回ある、一回は予が在米中の事にして、約二年の間予は之れが爲めに日夜苦んだ、其誤解を解かんとすればする程益々誤解の度を増し、又た其誤解は引て他の友人にまで傳染することゝなり、予は殆んど絶望して爲す所を知らず、唯神に祈るのみであつた、然し今日は其疑全く氷解して前日に倍する友情を以て交り、當事の事を一笑に附して居るが、彼の時經驗した誤解の苦痛は今尚ほ之を忘るることが出来ない、第二の經驗は近年のことにして、予はいま一人の友人により痛く誤解せられたのである、予は殆んど十年の間如何に此友の爲めに盡くしたかは神の知り賜ふ所にして、曾て一度たりとも彼に對して悪意を抱きしことはないのである、然るに不幸にして一朝誤解を招き、爲めに十年間の親切は全く水泡に歸し、今は却て讐敵視せられ怨恨の的となつて居る、實に人の心も果敢ないものである、然し予は此苦しき經驗によつて大に教訓を學び、又た大に修養を積むことを得たのである、予が誤解の修養と題して此文を草するに到つたのも此に負ふ所があるのである。

誤解の試練は吾人の修養となる。世の誤解は我をして神に接近せしむるのであ

る、蓋し人間は人に知られざる時は神に知られんことを願ふ者で、人の疑をうけ世に棄てらるゝ時は神に最も親しくなる時である、神を以て我が知己とするの信仰は誤解の苦中より生れ来るものである、基督が「父の外に我を知る者なし」との嘆聲を發せられしは彼が世の誤解を受け凡ての人に棄てられた時に出た語に相違ない、而して此嘆聲は彼が神に對する最も親しき信仰の意識を表證して居るのである、吾人は神の存在を是認すと云ふ如き冷々淡々たる信仰を以て満足してはならない、神に對して温かなる交情を抱き、親しき友情を持つに至らねばならぬ、神と我との個人的關係即ち此の密接なる交通を得ねばならぬ、此の貴き信仰の修養は親友の誤解てふ試練によつて始めて得ることが出来るのである。

誤解は我等に愛人の徳を養はしむ。誤解は愛を潔むるの好果を收めしむる者である、基督曰く

「爾の隣を愛して其敵を憐むべしと云へることあるは汝等が聞きし所なり、去れども我汝等に告ん、爾等の敵を愛み汝等を誣ふ者を祝し、爾等を憎む者を善視し、虐め責むる者の爲に祈禱せよ如此するは天に在す父の子とならん爲なり……」

……汝等己を愛する者を受するは何の報かあらん税吏も然かせざらんや」と。是れ誤解する者に對して我等の有すべき態度である、之に依つて眞の愛即ち犠牲的の愛、私心私情の混入せざる純潔の愛を實驗することが出来るのである、白隠禪師が嘗て誤解を受けし時無頓着にして更に之を意とせざりし所には東洋道德の美が現はれて居る、孔子の所謂「自ら省て疚しからずんば何をか愛へ何をか懼れん」との心事を實現したもので、實に貴むべきではあるが、更に進んで我を誤解し我を憎む者を愛し、其人のために盡くす心情は一層貴むべきものである、基督の道德が世の道德に勝る所は此處にあるのである、テニソンは之を詩に詠じて居る、彼の有名な *Typha of the King* の詩の中に、エニッドといふ婦人を描き彼が其良人に疑はれ、濡衣を着せられて暗涙に咽びつゝも、尙更に己を辯解せんとせず、唯愛と信を以て良人の爲に盡くし、其危難に當つて己が生命を賭して彼を救はんとし、遂に其眞心徹底して良人は其誤解を悔ゆる次第を叙して居るが、斯る犠牲的の愛則ち敵を愛する愛、我を疑い我を恨む者を受するの愛、是れ吾人の修養すべき愛隣の徳である、エニッドは誤解の試練に勝つて此愛を實現することを得た、誤解は吾人に美はし

き信仰を興ふると同時に此の潔き愛を實驗せしむ。

信仰と愛と望は基督教道徳の三要素である、而して保羅曰く「それ信仰と望と愛と此三の者は常に在るなり、此中尤も大なる者は愛なり」と、信仰は如此して得られ、愛は如此して養はる、更に望の徳も亦誤解によつて大に修養することが出来る、望とは眞理は最後の戦勝者であるを信じ、忍耐して其時の來るを待ち、決して倦まざるの精神である、昨年の春予は庭前に花園を作り各種の草花を培養して樂んだが、夏去り秋來るに及んで凡て皆枯れ果て、曾て爛熳たりし花園は變じて枯草の茫々として横はる所となつた、更に冬到つては氷雪之れを閉ぢて一莖の殘草も跡なく殆んど絶望の感を催ふしたが、不思議にも一陽來復して春光地を温むるに到つて、絶滅したるが如き庭園に草花各々其芽を出し、蕾を發し、終に再び花咲く美はしき光景を挽回し來つた、眞理も亦時に世の罪惡に掩はれ、誤解に包まれて其光を失ふが如く見ゆると雖も、是れ暫時の間のみ、時至らば又た光輝を發すること疑いないのである、人若し我を誤解し或は恨み或は憎むことあらんか、吾人は希望によつて何れの時か其心解けて再び花咲き共に笑ふ時の來ることを信じ、常に望み常に忍び

何處までも其人を棄てざるの心を抱かねばならぬ、友は輕々しく作るべからず、去れど一度び友として交らば永遠に之を棄つべからず、彼が善人である間のみ彼を愛するは何の賞むべきことかある、彼れ若し墮落して惡人となり、或は節を變じて我れを踈んずるとあるも我れ尙彼を棄てず、其心の善に歸る時を待つこそ眞の友情なれ、永遠の神を信する者は人に對して亦永遠の希望を有せねばならぬのである。

誤解は畢竟吾人の修養の資である。神を愛する者の爲めには凡てのこと皆働いて益をなすとは保羅の實驗より出たる眞理である、神は其愛する者を鞭ち賜ふ、誤解も亦神より出づる愛の鞭と觀して深く神に感謝せねばならぬ。

『たゝかれて後で花咲くなづな哉』

模範青年

近頃新聞に模範教師、模範村長、模範巡査など言ふ記事があるが、余は今茲に世の模範青年として弘く紹介するに足る一青年の逸話を記述して青年箴となさんとす

るのである。

青年名を水野愿と云ふ、東北の産にて父は儒者であつたが、愿の尙ほ幼少の時既に亡くなつた、母は愿と外二人の子供を連れ叔父を頼つて東京に出た、叔父も家計裕ならざりしかば、彼女は或は幼稚園の保姆となり、或は裁縫の教師となり、兎角して幼なき子達を養育した、中々の賢婦人にして愿は大に母の感化を受けた様である、愿は幼時より慈善心に富んで居つた、まだ六七歳の頃友達と門前に遊んで居た時、偶々憐れな乞食を見ていたく不憫に思ひ、母に乞ひて小錢幾個を得て之を施し、其乞食の非常なる喜を見て彼も亦大に喜び、爾來彼は母親に『穴の明いたお金があつたら下さい』と頼み、それを貰うと門口の敷居の上に並べ置き、乞食が来て取つて行くのを何よりの樂として居つたとのことである、彼が十一歳の時始めて石川島監獄所の給仕に雇はれ、僅かの給料ながら家族の暮しを助ける資に供することとなつた、其在勤中にも彼れが真から慈善心に富んで居つたことを證明する一美談がある、或時一人の老婆が小さい子供を背負ふて囚人に面會を求めに來た、愿は彼を案内して其囚人に逢はせると、檻房の格子を隔て、二人が涙に咽みながら物語て

居る、愿は深く心を動かされて聴くとはなしに聞けば、囚人は人力車夫であつて先頃妻は病氣の爲め乳兒を残して亡くなつたので、前記の老婆を雇ふて子供の世話をして、自分は日々車を挽て暮しを立て、居つた、然るに一日悪友に誘はれて賭博に手を出し始めたが、遂に法網にかゝり家にも歸らず監獄に入れられた、家には老婆が主人の歸るを待てども待てども更らに歸り來らず、其日も暮れ二日三日とたち心配は増し食料はなくなる、困じ果て、警察に主人の搜索を願ひ出た所、何ぞ計らん主人は石川島監獄に居るとの事で、老婆は子供を連れて今面會に來たとの事であつた、所が囚人なる主人は婆と稚なき兒の顔を打眺めて泣くばかり、真から己が罪を悔ゆれども外に詮術なく、唯婆に低頭して『わしも斯うなつた身の上で、何とも致しかたがないから誠に氣の毒だが、暫くの間何とかして暮しの途を立てわしの出獄を待つて居つておくれ、こんど出たら全く心を入れ換へ一生懸命に働き、決して不自由はさせない様にする、どうぞ後生だそれまで辛抱を頼む』とのみ、之を聞く婆は今更兒を見棄て、逃げ去る譯にも行かず、詮方なく再び子供を背にして泣き乍ら別を告げて歸ることゝなつた、始終を立聞きし少年慈善家水野愿は同情の

念に堪へ兼ね、歸り行く婆を後より呼び止め、懇々慰めて言ふ様

「先刻からの話を聞き私は誠に不憫に思ふ、此際何とかしてお前の難儀を救ふて上げたいとは思へど、私も給仕の身で何の蓄財もなく、助けと云ふ程は出来ないが、差當り私の財布に六錢あるから之を上げよう、そうして今日の辨當に「パン」を持つて来て居る故、私は一度や二度食事を廢してもチツトも構はぬから、これも持つてお出でなさい、又たお前が此次来るまでには何とかしてお金をこしらへて置く、どうぞ苦しいであらうが辛棒しておくれ」

と言ひ聞かせ、金と「パン」を施して歸へした、婆は地獄で佛に逢ふたる思をなし、愿の慈悲に感涙を流がしつゝ、深く禮を述べて歸つた、愿は婆と別かれて給仕室に立戻り、尙も婆や小供のことを思ひ續けて獨りしく泣いて居つた、其處へ偶々他の役人が来て、常に勇ましい愿が如何にも悄然として居るのを見て不思議に思ひ、話を聞いて見ると右の次第であつたので、其役人は愿の心立てに感心して、君がそれ程迄に思うなら僕は君の爲めに回狀を認め、同役の連中より慈善金を募つて遣う」と言ひ、早速回狀を拵らへ之を廻はしたが、皆薄給の小役人なれば澤山の金は出

来よう筈がない、或者は三錢、或者は五錢など云ふ寄附金で、總計三十錢餘出來た、併し愿は數百圓の金を貰つたかの如く喜び、感謝して此金を請取り、婆の來るのを鶴首して待つて居つた、それより約二週間程すると、かの婆は再び子供を背負いて遣つて來た、其姿を見るや否や、愿は飛んで行き、三十何錢の喜捨金を渡した、婆は先に愿から六錢の金を貰つた時、深く愿の親切に感じ、その六錢を大切にし、之を以て可成長く生命を繋がんものと覺悟し、毎日焼芋の幣を求め來りて食糧となし、辛くも二週間餘り子供と二人の生命を繋んで居つたのであつた故、今また更に三十錢を貰へば主人の出獄までの暮らしは裕に出來ることゝて、天に歡び地に悦び、愿が重重の親切を感謝して歸つたとの事である。

愿は其後監獄所を辭して大藏省に雇はるゝ身となつたが、其頃深く志す所あつて東京外國語學校の専修科(夜學校)に入學し、西班牙語を勉強し始めた、これには大に譯があるのだが後に陳ぶることにする、西語の教授篠田賢易君の言ふ所によれば、彼は非常な勉強家で同級生中でも比肩する者のない程に成績よく、一度教はつたとは決して忘るゝとなく、毎日忙がしい職務の身でありながら、豫習復習更に怠り

なく、雨の夜雪の夜如何なる暴風雨の時でも一回だに缺席したることなかつたと
言ふ、或夜篠田教授は授業時刻の鐘を聞いて教場に行つて見ると、廣き教室に出席
者はたゞ一人、即ち水野愿が居つた、而して熱心に西班牙語の聖書を熟讀して居つ
た、篠田教授は殊勝な青年もあるものかなと感じ、君は耶蘇教信者であるか」と尋ね
た、愿は、「ハイ私は信者であります」と答へた、何處の教會に屬するか、何れの教會にも
屬しません、「洗禮は受けたか」「否洗禮は受けません」「それでも信者であると言ふのか、
」左様、私は確かにクリスチャンであると自覺して居ります、篠田教授は益々彼れの
精神と信仰に感じ、其夜の授業も打忘れて彼が此異常の答へに就て更に

「君は如何にして基督信者となつたか」

と質問した、其時愿は基督教を信するに至つた經驗談を自白したが、其話は普通基
督信者の經驗とは大に異なつて居る所がある、當時彼は姉の娘なる某を預かり、共
に下宿生活をして居つたが、友人中一人の善からぬ者あり、姪の容貌に心を寄せ、屢
屢來つて其歡心を得んと勉めて居つた、愿は疾く之を悟り如何にもして此友人の
心を翻へし、劣等なる情欲の火中より彼を救済し呉れんと決心した、愿は常に悪友

を見る毎に其交りを絶たんとはせず、寧ろ求めて斯る人物に接近し、其惡心を改め
しめ、斯る友を救ふを以て樂みとして居つたのである、當時既に彼は基督の「我が來
るは義人を招く爲に非らず罪ある人を招きて悟改めさせんが爲なり」との心事を
自然に抱いて居つたことが分る、其處で或夜、其友人の家を訪ひ彼に忠告する積で
行つた所が、計らずも其友人より、君は西洋に耶蘇教と云ふ宗教があるが知つて居
るか」との質問を受け、愿は、僕は其名は聞いて居るが如何なる宗旨か調べたことは
ない」と答へた、然るに其友人は一冊の新約聖書を示し、これが耶蘇の經典である、文
明國の宗教を知らざるは我等の耻であるまづ之を讀んで見玉へ」と彼れの性格に
も似合はぬ忠告を與へた、昔より惡魔は知識の點に於ては天の使にも劣らぬと云
はれて居るが、此劣等なる友人の口から斯る立派な勸告を聞くのは實に不思議で
ある、愿は此友人の性行には服せざれども、其言ふ所の真理には謹んで之に耳を傾
け、直ちに友人の手より聖書を受け、偶然之を披ひて馬太傳第五章を見た、而して其
初めて目に映じた基督の語は彼の心に一大光明を與へ、多年の煩悶と疑惑の雲は
忽ち晴て新らしき人となつたのである、此時彼は心に靈の洗禮を受け、我は基督信

徒なりてふ自覺を得たのである、所謂急突の改心を得たのである、迅雷耳を掩ふの暇なく彼は天の啓示を得たのである、手は世の「サツデン、コムボルション」には疑を存して居る者で、今の今まで悪人であつた者が忽ち一變して善人に生れ更はると言ふ事は、畢竟皮相の觀にして實際は斯るものある筈はない、人の目から見たら其人は悪人の様であつても、心には自ら満足せずして絶へず善を求め善を欲して苦悶しつゝありしものが、其衷の情願漸く熱度を高める中、事に觸れて深く感じ、決然善道に歸るのである、之を反對に見るも、今まで善人であつた者が忽ち墮落して大罪を行ふ者となる Sudden Fall と云ふことはない筈で、唯これは外面より見て斯く見ゆるのみ、實際は其大罪を行ふまでに其人は多年隠れたる小さき罪を犯し、漸次墮落しつゝあつた者が其勢力何時しか積み重なりて終に或る誘惑と機會に際し、大墮落をなすに到るのである、水野愿も亦其一例にして、彼が聖書を開いて忽ち悟道に入り、我は「クリスチャン」であるとの自覺を得たと云ふ裏面には、彼が多年修養を積み道を求め義を慕ふて居つたと云ふことがあるのである、基督の語を讀んで、豁然安心立命を得たのは、其迄に彼の心には其安心立命を得らるゝだけの修養が

積で有つたことを意味するのである、心の清き者は福なり、其人は神を視ることを得べければなり」と基督の曰ひし如く、人其修養を積み其心鏡を清めて置かなければ聖靈の能力と雖も、其人の心に神を現はすことは出来ないのである、水野は少年の頃より常に人生問題に心を寄せ、人間は何者ぞ、人生の目的は何、將た又我は何處より來り何處に往くべき者ぞと云ふ如き問題を考へ、煩悶又た煩悶して安んずる時なく、爲めに食を忘れ、眠を成さなかつたことさへあつたと云ふ、斯る心の畑には必ず真理の善き種は實を結び、或は百倍或は六十倍或は三十倍する者である、愿が始めて聖書を繙き基督の語を讀んで、豁然悟を開き新生命に入つたのは不思議でも奇蹟でもないのである、併し愿は後に至り自然に此新生涯に導かれた時のことを回顧して、神の深き智慧と不可思議なる神の攝理とを讚嘆して止まなかつたと云ふ、蓋し彼は牧師より道を聴きしにあらず、宣教師より教を受けしにあらず、我姪を傷つけんとする悪友の手を経て神は彼を光明に導き賜ふたからである、然り神は傳道の恐なるを以て信する者を救ふを善しとし玉ひしなり、保羅曰く「嗚呼神の智と識の富は深いかな、其審判は測り難く其踪跡は索ね難し」と、愿は幾度か此種の

言葉を繰返して己が生涯に顯はれし神の攝理を讚美したのである。願は或日又古本屋にて内村鑑三氏の著書、基督信徒の慰と題する書籍を得て之れを熟讀したが、それが又彼の心に非常な感化を與へたのである。

此事が有つて以來、願は大の内村氏崇拜家となつて内村氏の著書と云へば大小残らず是を集めた、其頃内村氏は萬朝報に筆を執られて居つたので、氏の論說小品は日毎に同紙に掲載されて居たが、願は一々之を切抜いて恰も寶物の様に愛藏したのであつた。如是彼は内村氏を崇拜し尊敬して居ながら、彼は死に至る迄終に一回も内村氏に遇ふた事がなかつた、之れは餘事であるが、彼の死後或人が内村氏に願の事を告げた時、内村氏は、あゝさうでしたか、然し私に遇はなかつたと云ふ事は却て彼の爲めに幸福であつた、若し遇ふたならば彼は必ず失望したでしやうと云はれた相である、流石は内村氏の言である、氏の偉大なる所は實に此處にあると思ふ、予は此語を聞いて實に感心した、普通人ならば斯く己れを慕つて居つた者と聞けば、一度は遇つてやつたらよかつた位は云ふであらう、然し其處を内村氏は他人が如何に己を崇拜して居つても、自分は決してそれ程のものでないとして自己の

足らざるを自覺して居られる、人のエライ所は此自覺にある、兎に角願はかくも崇拜し又敬慕して居つた人に、一度も遇ふこと無くして永眠してしまつたのである、是の如く、願は内村氏の著書を受讀して居つたが、中に同氏の「外國語の研究なる書物中によつて」と云ふことを發見した、則ち吾々日本人は大に南米の天地に發展すべき餘地を發見せねばならぬと云ふことを見出した、爾來願は眞面目に南米移住の心を養ひ、南米の曠野に同志を集めて新日本なる「パラダイス」を建設しやうとしたのであつた。

之れ彼れが東京外國語學校の専修科に入り、熱心に西班牙語を研究するに至つた所以である、斯くて晝間は役場に出て劇務に従事し、夜は學校に通ふて一生懸命に勉強し、其成績常に全級を壓して優等を占めて居つたのであつた。

然るにかくも遠大なる理想に對つて専心努力しつゝ、ありし願は、壯齡二十四にして天の召を蒙つたのである、天は何故にかくも有望なる青年に壽を與へ給はなかつたのであろうか、惜しみて尚餘ある次第である、而て彼の死後、百圓の蓄財を有せる事が知れた、薄給の中より苦しき思をなして、百金を殘せし彼が心事は如何に

彼が南米移住の目的を達せんとするに熱心なりしかを證して餘あるのである。願の性行に就ては逸話が多い、彼は實に母に孝、姉に愛、友に信、職に忠の人であつた、彼は毎朝未明に起きて自ら湯を沸し飯を炊き而して後母を起した、また曾て姉が病床に臥した時など、實に至らざる隈なき看護をなして、其爲に彼は全く己を忘れ、殆んど寢食をも絶つに到つたとの事である、願は又意を身邊の事に留めず、服装等は其の願みる所にあらざりしかば、生來曾て絹布を纏ひしことなきのみならず、嘗て斯る珍事をさへなした、或夏の事友人に誘はれて大森海岸に行く事となつたが、當時彼には着す可き單衣も無かりしかば、早速の工風にて姉の帷子を借用した、而して彼の平氣なるに引代へ友人等は却て是を耻ぢたとの事である、以て彼が居常意を心靈の上に傾け、容姿の事の如きは全然無頓着に附し去つて居つたと云ふことが分かる。

願は又色情の誘惑に就ては曾て之を知らなかつた、爲めに友人より不具者の如く見られ屢々冷評された事すらあつたとのことである。

かくの如き彼にも一つの道樂があつた、即ち古人の金言を蒐集する事である、彼の

部屋は實に四方八方古人の金言を書いた張紙をもて滿されて居た、曾て姉が之を見て笑つた時に、

「姉様これが私の唯一の道樂ですから此れだけは許して下さい」
と云つて頼んださうである、而して其用紙は總て役場にて用ゐし紙の切端なりしと云ふ、其細心の程察するに餘りあるではないか。

全能至善の神常に
吾人の心意、行爲を見給ふ。 願

興へて感恩せざるは彼の
過也、興へざるは余の過也。 セネカ

斯くの如きが貼附せられたる金言にして、自から彼の性行を現はし、炭々乎として其獨りを慎む修養の誠意と、温乎たる生來の慈善心を示して居るのである。願は又其公務に對して頗る忠實であつた、彼は常に人の三倍の仕事をした、而して

それを少しも人に誇らなかつた。
後藤課長曾て愿に就て證言して曰く。

「他の屬吏は自分の目の前ではよく働くが蔭では常に怠けて居る、水野は自分の見て居ると居らないとに關せずよく働いてくれた」

と、是によつても愿の日常を察することが出来るであらう。
又彼れの性質は實に溫和であつた、死後家族の人の話に、愿は生前曾て一度も怒つた事はなかつたと云つて居る。

更に彼の臨終の有様は感心すべき者であつた、彼は斯く貧しかりしかば、名醫を迎へて十分の療養を盡すことが出来なかつた爲め、或は彼れの死因は主治醫の誤診に由らざりしかとの疑もあつて兎に角其の病名は不明であつた、而して其病勢稍々進みたる時、彼は天井より紐をつるして其れにすがつて苦痛を忍んで居たが、其愈愈死に瀕するや、此紐を取つて恰も昇天の姿勢にて、滿面に笑を堪へ欣然として瞑目したとの事である、彼れが最後の有様は神を信する者の最後の慰安を遺憾なく現はしたものである。

以上は予が模範青年と題したる本論の主人公の性格にして、其心事行爲共に現代青年の模範として些の遜色なきものである、見よ其篤學の精神の如何に熱誠なるかを、彼は勉學の爲に睡眠すら満足にせなかつた、彼が學校に於てスペイン語を學ぶや其學び得し文字は悉く之をカードに記入して保存した、左れば其進歩の度も亦非常に速にして衆生を厭するに至つたのであるが、特に感すべきは、彼は是の如き苦學の境に安んじて更に不平なく、境遇の許す範圍に於て全力を盡して勉強したと云ふ事である、是れ實に今日の青年の學ぶべき第一の性格である、愿は格言の蒐集を道樂としたと云ふが、之れを今日の青年が酒色の宴樂を樂しみ、野鄙なる文字を友とし、努めて醜猥なる情念を挑發して愉快極まるとせる者に比して、實に雲泥の差ありとせざるを得ぬ、有爲の青年たる者須らく其嗜好を高尙にせよ。
彼の理想は更に遠大であつた、元來青年にして理想なき者は是青年でないのである、子供は現在にのみ生存して居る故に、彼等は今日上野に連て行つてやると云へば嬉しがるが、明日と約すると大に喜色を變するのである、彼等は現在にあつて過去もなければ將來もない、青年に至つては然らず、青年は將來に活きなくてはなら

ぬ、彼等は高崇偉大なる理想を立て、之に向つて奮闘する特色を發揮せねばならぬ、水野愿は此氣性此精神に満ちて居つた、南米の野に日章旗を翻さうと云ふ偉大なる目的を抱いて、之れが爲めに學び之れが爲めに勤め終に之れが爲めに斃るゝ迄奮闘したのである。

彼の忠實は又欽仰に價する者があつた、將來に如何なる高尚遠大なる理想を有する者も、現在の小事を怠る様では理想の青年とは云えぬ、日々其務を全ふし、日々其業に勵み、日々己の力に叶ふ限りの善をなし、而して理想の遂及に怠らぬ者にして始めて理想の青年と云ふ事が出来る、水野愿は心中に偉大なる理想と抱負を有しながら、彼れが従事する日々の小務小事も尙怠ることなく、忠實に其務に任じたのである。愿は又人生問題に就て嚴正なる態度を採つて居つたのである、現今の青年は徒に人生の皮相にのみ走り、無意味に其日を過す者多く、人生問題や宗教問題を等閑に附し、道を究め光を求め安心立命を求むる事をせぬが愿は此點に於ても甚しく相違の點を示して居つた。

更に彼の死期を見よ、洋々たる前途の希望を有しながら、其志半途にも到らずして

壽先づ折る、愿にあらざれば天を恨み人を恨み悲哀悶絶せずんば已まざる所なるべけれども、彼れは此際堯爾として天父の懷に歸れり、斯くの如きは實に精神修養の賜にして、宗教心なきものゝ真似ても及ばざる所である。

要するに水野愿は現代の模範青年である、彼の生涯は恰んど現代青年の範を爲さんが爲めに生れ出しにあらざるなきかの感起さしむる者があるのである。

彼の前半生は、人事を盡して天命に安んじ、後半生は、天命に安んじて人事を盡したのである。

青年自脩論

西曆紀元の初めつた猶太國に二流の勢力ある學派があつて、ヒレルとシヤマイと云ふ學者が各其代表者であつた、就中ヒレルは餘程の賢人であつたと見えて彼の教訓集を見ると、其倫理思想は實に高遠なる所に達してゐる、思ふに基督教祖耶穌も慥にこの學者の思想の感化をうけた事であらう。

ヒレルに就ては別に傳記の世に遺れるものもなければ、委しい事は分らぬが然し